講習場所	講習生	講習期間
安藝郡室戸町	三二	三ケ月
高岡郡宇佐町	五四	三ケ月
幡多郡清水町	七〇	三ケ月
計	一五六	

七、應召職員については

1、應召水産會職員には可成り現職の待遇を與へ、其の生活を保障したのである。

2、家族、遺族、等の慰問については、農會などの振合を見て遺憾のないやうにすること。

八、應召漁家については

1、應召漁家の生活に關しては、農林次官より地方長官に對し通牒せられたる所の則り地方當局關係各團体と聯絡協調の上萬全を期すこと。

2、勞力補充困難なる場合に於ては漁業組合の自己經營其他共同經營等の方法によつて應急の處置をなす樣注意すること。

3、應召漁家の家族に適當なる副業を奬勵する等、授産の方法を講ずること。

4、應召家族に對する會費、手數料、其他の負擔を減免すること。

5、漁業勞動に對する貨銀、配當金等に付いては、事變に拘らず支給せしめられ應召漁家の生活を保障する樣にすること。

6、應召漁家に對しては、漁業組合其他水産關係團体に於て見舞金其他を贈與する等必要に應じて適宜の救恤的措置をとること。

醫師會の活動

醫師會

一、協議事項

今次の支那事變に際し、政府當局の方針を支持應援して、醫業報國の實を擧げるため、昭和十二年七月二十三日臨時總會を招集して、左の實行項目を協議決定した。

1、出動軍人、軍務公用者をして、後顧の憂をなくするため、其の遺族に對して、市當局、在鄉軍人分會、軍友會、等と連絡協調して適當な救療をなすこと。

2、廣義國防の完璧に備へるため、傳染病の豫防撲滅に一層の關心を以て、出來得る限り力を盡すこと。

3、一定計畫の下に救護班を組織して、必要に應じて機宜の活動をなすこと。

二、實行狀況

1、出動軍人遺家族救療の狀況

七月二十三日の臨時總會の決議に基づいて、高知市内各診療所では、即日より、出動軍人、軍務公用者の家族全部を、無料で診療を開始した。其の後、支事變は益々擴大して、長期に亘るものと認められたため、從つて、出動軍人、軍務公用者、遺家族の診療も之に對應する必要を認めたので、更に同年八月二十三日臨時總會を招集して、

生計困難で、醫療の資金全くない者を無料とし、前項に該當しないで、且つ、醫師會所定の醫療費支拂困難と認めた者を半額とする。

と定めて施療することゝした。右二種の診療券を、發行して、在郷軍人分會長、方面委員、等の手を經て患者に交付することに決議し　醫師會は關係方面へ、本會の決議を通報すると共に、前記二種の診療券の發給方を委囑した。右は、市内在住患者を目標として決議したが、其の後、郡部方面の患者が、市内診療所に來て、施療を乞ふ者が續出する樣になつたため、更に同年九月十五日第三次臨時總會を招集して、市外在住者も、市内在住者と、同一取扱ひを爲すことゝし、即日より之を實行することに決議して、此の趣旨を、各郡醫師會を通じて縣下各町村役場、在郷軍人分會等に通知して、市内外出動軍人、軍務公用者、の遺家族患者の救療を實施して今日に及び、尙當事變終局に至る迄之を實行することにしてゐる。

更に、出動者遺家族の救護を徹底せしめ、其の實績を擧げる目的を以て、同年九月二十六日

高知市中島町土佐ホテルに、

高知聯隊區司令官、歩兵四十四聯隊高級醫官、高知憲兵分隊長、高知市在郷軍人聯合分會長、高知縣衛生課長、高知縣社會課長、高知市長代理、高知縣醫師會長

等の會同を煩し、醫師會役員、及救護班長、等出席して座談會を催し、隔意のない意見及要望する所を拜聽した。事變發生以來、本年（昭和十三年）五月末迄の成績は左表の通りである。

（報告漏多數ある見込）

種別	救療人員	治療延日數
無料	六九〇	六三七一
半額	八九八	七九四四
計	一五八八	一四三一五

右表の外、同期間内に於て軍事扶助法、軍事援護會、日本赤十字高知支部扶助條規、濟生會等の救護券に依る取扱患者數は、左表の通りである。

種別	救療人員	救療延日數

恩賜財團濟生會	五六	一三三九
日赤支部救療	二四	三八二
軍事扶助法	二五四	四七〇〇
軍事援護會	二二三	二七八
計	三五七	六六九九

2、救護班組織と其の活動狀況

昭和十二年七月二十三日の臨時總會決議に基づいて

△非常時態突發の際

△軍隊出動の際

△應召軍人、軍務公用者の治療を必要とする際

△戰傷病將兵の治療に應援する必要の生じた際

に於て醫療奉公の誠を致すため、同年九年八日左の救護班を組織した。

イ、救護班本部

部所　高知市本町公園通り高知市醫師會館内

部長　退役陸軍々醫少佐　笹村駒太郎

部員　醫師一七名、藥劑師二名、書記二名

看護婦一〇名

ロ、第一班

所在　高知市中島町　縣廳通山崎病院内

班長　山崎　庄吉

班員　六二名、看護婦六三、書記一名

ハ、第二班

所在　高知市玉水新地　田村病院内

班長　田村　稔

班員　二〇名　看護婦二一名

ニ、第三班

所在　高知市蓮池町　八井田醫院内

班長　八井田　稔

班員　一八名　看護婦一九名

ホ、第四班

所在　高知市掛川町　　水野醫院内

班長　　水野於兎彦

班員　一二名　　看護婦一三名

尙軍隊出動に際しては、第一班は本町筋五丁目へ、第二班は桝形へ、本部は本町公園通へ、第三班は高知橋元へ、第四班は四國銀行前へ、出張して萬一の場合の救護に備ふることを決定した。

以上の組織をなしてゐるが、其の後團体的に出動する機會がなかつたが、應召軍人、軍務公用者の治療は無料を原則として、各救護班員が、各其の診療所に於て之を爲したが、本年（昭和十二年）五月末日迄の治療成績は左表の通りである。

治療人員	治療延日數
五三三	一四八四

更に、醫師會は、傷病將兵治療の應援をしたいと、同年九月二十三日陸軍大臣及第十一師團長に對し申請したが、軍部の治療機關が充實せるため未だ其の機會に接しない。

申請書

今ヤ日支事變ハ益々擴大シ我ガ皇國ノ重大時機ニ直面シ國務多端ノ折柄閣下愈々御多祥御情勵ノ段邦家ノ爲メ慶賀至極ニ存ジ奉リ候

我ガ皇軍ノ各地ニ於テ暴戾極リ無キ支那軍膺懲ノ戰績ハ實ニ目覺シキモノアリテ吾等國民ハソノ勞苦ニ對シ衷心感謝ニ堪ヘザル所ニ御座候

皇軍ノ身命ヲ屠シテ外ニ活動スルノ時吾等國民内ニ在ツテ一致團結以ツテ銃後ノ護リノ完璧ヲ期スベキ秋ナリト確信仕リ候

茲ニ於イテ當高知市醫師會ハ支那事變突發スルヤ或ハ國防献金ニ或ハ傳染病豫病對策ニ或ハ應召軍人軍務公用者ノ遺家族ノ救療ニ奔走スルト共ニ非常事態突發其他軍事醫療救護ニ備フル爲救護班ヲ組織シ機宜ノ活動ヲ開始シ居リ候ノミナラズ戰地ヨリ歸還スル戰傷病者ノ診療ニツイテモ極力應援奮鬪致シ度ク當醫師會ノ決議ヲ以テ既ニ決定致シ居リ候

然ルニ最近高知聯隊ノ戰傷病者續々歸還スルニ及ビ之レヲ慰問スルコト數度其ノ痛シキ勇姿ニ接シコトニ此等將兵ガ一日モ速カニ恢復再ビ戰ビ戰地ニ立タントノ念願熾烈ナル有樣ヲ見感激措ク能ハズ今ヤ開業醫ガ平素抱懷スル刀圭報國ノ赤誠ヲ披瀝スベキ千歳一遇ノ機會到來セリトノ思念勃然トシテ湧キ來ルヲ禁ズル能ハズ候

素ヨリ軍部備フル所ノ醫療設備ハ萬全ナランモ當醫師會員ハ此際進ンデ治療衛ニ當リタキ熱情モダシ難ク依ツテ陸軍病院長ノ指揮ノ下ニ忠勇ナル將兵諸氏ノ診療ヲ應援シ以テ奉公ノ誠ヲ致サンコト願望ニ堪ヘズ候

就テハ何卒吾々ノ意アル所ヲ御採納ノ上何分ノ御沙汰相成度ク此段及申請候也

昭和十二年九月二十三日　　高知市醫師會長　乾　政　明

3、慰問の狀況

イ、昭和十二年九月五日傷病兵慰問の爲め衛戍病院を會長以下六名の代表が訪問した。

ロ、陸軍病院訪問

昭和十二年九月十四日　乾會長外六名代表訪問

昭和十二年九月廿一日　同　上

昭和十二年九月廿八日　安並氏外二名代表訪問

昭和十三年一月一日　會長外四名　代表慰問

昭和十三年五月二十八日　會長以下四名訪問しハンカチ百打を贈呈した。

ハ、赤十字病院訪問

昭和十三年一一月一日　會長外四名代表訪問。

昭和十三年五月廿八日　會長外三名代表訪問。

二、昭和十三年三月五日傷病將兵慰問の爲め、善通寺病院を訪問して、慰問品としてタオル四百二十筋を贈呈した。乾會長外三名代表訪問。

ホ、昭和十二年十月十一日戰死將兵出迎の爲め朝倉驛に參向。佐藤氏外二名代表出迎。

ヘ、戰死者遺骨出迎の爲め、高知驛に參向。

昭和十二年十一月十三日　乾會長外二名代表出迎。

昭和十三年二月二十一日　會長外五名代表出迎。

ト、高知市戰歿者葬儀に參列

昭和十三年四月八日　澤村氏代表參列。

昭和十三年六月九日　乾會長代表參列。

4、國防獻金等

△國防獻金

昭和十二年八月七日高知縣醫師會を通じて、應召會員を除き、壹人宛壹圓金壹百四拾七圓を國防費に獻金した。

△昭和十二年十月三十日朝倉陸軍病院病舍新築落成式を祝して、椅供壹脚祝餅壹斗を寄贈した。

△担架輸送機献納資金寄附

日本醫師會の主唱により、陸海軍に献納する担架輸送飛行機献納資金として、昭和十二年十月四日會員壹名宛、貳圓合計金參百拾貳圓を、日本醫師會に送金寄附した。

高知税務署の活動

高知税務署

一、支那事變特別税

政府は、昭和十二月八月今次の事變費の一部として、北支事件特別税を臨時税として設置し、同月十二日より施行した。（施行期は大体一ケ年限りでそれには所得特別税、臨時利得特別税、利益配當特別税、公債及債社利子特別税、物品特別税等で増税額一億百五十四萬圓）一方從軍々人及軍屬に對しては、租税の減免徴收猶豫等に關する法律を新につくられ、九月十三日より施行せられた。これは、從來の戰爭に其の例を見ない新立法である。政府が、今回の事變に對し、銃後の施設に心を勞してゐる一端を窺ふことが出來る。尙事變は長期戰へ入つたため、軍事費財源の一部に充てるため、北支事件特別税を廢止して、新に支那事變特別税を設け、増税額を一増加し、別に新税として左の諸税が實施せられることになつた。（昭和十三年四月一日より實施）

△、入場税及特別入場税

△、物　品　税

△、通行税

右の増税は事變費の一部にあてるは勿論であるが、然し、政府の希望するところは、主として、國民の重大覺語を促すためである。

二、特別税法施行にあたつて

1、税務署は先づ内部の改革に着手

當署は一般民衆と接觸の機會が多いため、特に窓口の改善を行つて民衆化をはかり、親切丁寧を目標として、簡單な書類は無料で代書してやることにした。

2、一般民衆の理解へ

政府の方針を一般民衆に理解さすため、先づ當關係者を十數回税務署階上に招集して、新税其の他について、種々研究協議を遂げた。尚係員を地方各所（伊野、長濱等）に出張せしめて、指導懇談の會合を數回行つた。

三、國税納税成績著しく向上

大阪税務監督局管内（二府十縣税務署七十五）中、高知税務署管内の國税納付成績は、昭和十年

以前は最も不良で最下位を示してゐたが、事變勃發このかた、舉國經濟抗戰への心構へが周知徹底のためと、税務署當局が町村當局と協力の結果、現在は五、六番の好成績を示し滯納額は斷然減少の嬉しい數字を見せてゐる。

殊に出征遺家族の家庭は、更に、良結果を示してゐる。此の緊張、此の精神、土佐魂の現れでなくて何でありませう。

年次	滯納額	滯納者數	納税人員
昭和十年度	一四〇三四一圓	六三九〇人	二〇六〇八六人
十一年度	三一六七一	六三二	二〇七四九七
十二年度	四〇九三五	六三〇	二〇九五八九
十三年度（十月末迄）	四五四六	一六四	五八七八三（七月末現在）

四、署員の活動

1、醵金實行

大藏省銃後々援會が設立されると、署員一同は直に會員となつて、左の率で毎月夫々醵金を實

行してゐる。高等官三百分ノ一、判任官五百分ノ一、又出征軍人軍屬及在支警察官並に其の遺族等の慰問資金として、二ケ月毎に夫々醵金してゐる。高等官百分ノ一、判任官二百分ノ一。

2、貯　金　奬　勵

從來實行してゐる國民精神作興貯金の外に、今回貯蓄强調のため、大阪稅務國民貯蓄組合が設立せられ、署員は夫々貯金を勵行して、退職の場合以外は絕對に預金の引出しをしないことにしてゐる。

3、研究會並に修養會

國民精神總動員の主旨によつて、毎月二回、署内に於て研究會を開催し、事務上の研究をすると同時に、署長より修養並に生活改善上の諸講話を受けてゐる。

4、体　位　向　上

精神作興と貯蓄の勵行には健康が第一と考へ、先づ廳舍内外の清潔保全に留意し、又署内に運動部を設けて、野球、ピンポン、登山、等各種の運動を實行して、体位の向上をはかつてゐる。

高知刑務所

一、防空施設の完備を圖る

國家があらゆる部門を調整し、動員し、如何に秩序良く、而も長期戰に耐ふる樣に總國力を運用するかが問題となつて來たのである。

良民も、受刑者も一丸となつて非常時對處の大方針の旗下にはせ參じて、協力一致國策遂行に邁進すべき時が來たのである。

高知刑務所非常時對處の記錄としては、敷地一萬六千余坪、建造物延三千九百余坪の中に、收容人員約七百人、此れが檢束を確保せられ、市民の不安を一掃せられ、各種の作業を經營し、官業收入の增加と、收容者の職業訓練に努力せられつゝあるのである。

特に時局に處して防空施設に意を用ひ昨年來縣市の燈火管制に呼應せられ、工場、舍房、其他必要と認むる箇所に遮光幕七百米、遮光紙二百六十五枚、電燈カバー百枚を設備し、尙構内各所の電燈は直ちに消燈し得る樣工作を施さるゝ等防空施設に充分の留意と準備をなされつゝあると

のことである。

二、國民精神強調に留意せらる

皇室の御聖德を敬仰し奉り、宏遠な肇國の理想と、國体の尊嚴を自覺をしめ、敬神崇祖の思念を徹底せしめ、國民精神を強調することは、過去の一切を清算し、新しき人生へ、社會へと生れ出ださしめんとする、非常時局下の刑務所として最も必要な事であらう。

刑務所に於ては司法大臣の認可を得、構内清淨の地に神祠を建築し、皇大神宮大麻を奉戴し、一三年五月一日八幡宮竹崎社司によつて嚴肅なる奉還式擧行以來、職員は毎日隨時參拜し、收容者は恩典式、其他擧式の際參拜する外、毎月二回全員參拜して、清き心にひたすら皇軍の戰勝を祈願せらるゝとのことである。

又所内より應召者ありたる場合には、全員參拜して武運長久祈願をなし、應召者を激勵出發せしむると同時に收容者全員をして神の御前に清き心の再生を誓ひ、敬神崇祖、國民精神体得に努力せられつゝあるのである。

三、時局認識に努む

事局を認識せしめ時艱克服の精神を培養せられる事の必要なるは言ふ迄もないが、刑務所に於ては定例の教誨には、事變地圖を揭げ、戰況並に忠勇義烈の皇軍の活躍と銃後國民の自覺緊張を說示せられ、又陸軍記念日には高知聯隊區司令部井手中佐、海軍記念日には北村大佐の軍事講演を職員並に收容者全員に聽講せしめ、多大の感動を與へらるゝ等、時局認識に努力せられつゝあるのである。

四、献金及び寄附金

精神の緊張、時局の認識は銃後國民の献金となり、寄附となつて、事變下物的資源の援助となるのである。

所内職員は出征軍人、軍屬及び在支警察官、其の遺家族慰問金醵出として、高等官同待遇者は俸給月額百分の一を、判任官待遇者並に雇員は俸給月額二百分の一を各二ヶ月毎に、司法大臣官房秘書課長を經て醵出せられ、此の金額（十二年八月ヨリ十三年六月）百八十壹圓四拾五錢となると言ふ。

其他和知部隊兵器献納資金へ弍拾圓、高知縣軍事援護會へ金貳拾圓、國防献金として拾五圓を

職員によつて獻金及寄附せられたのである。

尙收容者は時局認識の徹底に努力したる結果、一般に自覺緊張し、紀律違反等全く絶滅せられ、所内作業に新生の氣分を以て孜々勉勵し、國費の一部を償はんとする意氣旺盛となり、進んで汗の結晶とも言ふべき、作業賞與金の内より献金を申し出づる者續出し、第一回六百十五人より金九百圓九十二錢第二回三百三十一人より、金三百七拾九圓拾錢、合計一千二百八十圓二錢を献金せられ、全國各刑務所よりの分を取纒め、陸海軍兩省へ提出し、各々飛行機一台宛を献納せられたる等、國家の一日もゆるがせにする事の出來ない國防への勵員、物的支援の上に、大なる援助をなされつゝあるを聞く時、感更に深き覺ゆるのである。

五、應召者の歡送

刑務所職員中應召せられたる者〇〇名に對しては、職員一同より各々金壹封宛を贈呈せられ（總金額六百四拾七圓八十錢）出發に際しては、勤務上差支ない限り多數の職員見送をなし、勇躍入隊に努めらるゝ等、精神的に、物質的に、其の至誠も亦銃後の美しい心の表はれであらう。

尙收容者中召集令狀に接したる者の中、改悛の狀顯著と認むる者三名に對しては、假釋放の恩典に浴せしめられ、出發に當つては所内神社前にて、嚴肅なる式典を擧げ收容者一同軍歌を齊唱

して門出を祝し、所長よりは激勵の訓示を與へられ、尙職員一同より金壹圓を餞別せられ、應召者も亦今更の如く、聖恩の有難さに胸迫り。欣喜雀躍聖戰參加を誓ひて出發せられたと言ふ。

六、應召者の慰問

應召者には所長其他幹部同僚より隨時慰問狀を發送せられたる外、前後數回職員一同より慰問袋を作製發送せられ其の慰問に怠りもないのである。

應召者は退職せしむる事なく、本俸より軍隊支給額を控除したる金額を支給せられ、家族生計に支障なからしめ、所長夫人、其他幹部職員等交々應召者の家庭を訪問し、慰問に努められつゝありと言ふ。

七、戰沒將兵弔慰

應召職員にして現在迄（十三年六月）に戰病死者は〇名で此等護國の英靈出迎へに際しては、所長以下職員及び職員家族は着驛に出迎へられ、其の葬儀には多數參列敬弔の意を表せられつゝあると言ふ。

尙名譽の戰死者に對しては在職員の功績を考査し、進級增俸發令、弔慰料並に特別賞與交付手

績をなされつゝあるのである。

又司法大臣を總裁とせる、刑務協會よりは弔慰金及び共濟金（六百圓五十錢）を贈與せられ、更に大阪控訴院管内刑所所職員（大阪、神戸、滋賀、奈良、姫路、高松、徳島、高知）よりは花輪一對金一封を贈られ、所内職員よりも花輪、香花料を贈呈され、當日は所長自ら靈前に弔詞を捧げ、司法省、全國各刑務所より弔詞弔電を受け至極厳粛裡に葬儀を行はせられたりと言ふ。

此の眞心の程に勇士の英靈も感激しつゝ安らかな眠りに入られたことであらう。

八、貯蓄報國

長期戰に備へて貯蓄報國の高唱せらるゝ時、刑務所に於ては所長以下傭人に至る迄、全職員を組合員とする規約貯金を勵行し、毎月一人一圓以上貯金し、拂戻しは疾病其他已むを得ざる時と言ふ規約の下に、現在組合員百四十三名、一ヶ月預金四百四十五圓、現在總額一萬五千圓を超へ、今回の支那事變公債購入も一千八百七十五圓、貯蓄債券八百九十圓を立所に買ひ取る等、報國貯金のラインにピッタリト添はれてゐのである。

尚六百五十余名の受刑者には、特に定められた勤勞を、眞面目に務める樣訓戒し、悔悟、善良に向はれつゝある者に對しては、賞與金の名目で勤勞に應じて合計で貯蓄し、刑期滿ちて釋放の

際彼等に與へられるのであるが、此の貯蓄中第一回、第二回と多額の國防献金をなし、尚現在豐萬圓に近い貯蓄があると言ふ。

かく職員も、收容者も一意貯蓄實行に努力し、貯蓄報國に一層の拍車をかけられつゝあるのである。

神社、寺院、教會の活動

神社、寺院、教會

事變と神社

今次事變勃發するや敬神崇祖の我が美風は增々高揚せられ、國民齊しく皇國の國威宣揚と祖國日本のため火線に立つて戰ふ忠勇なる皇軍將兵の武運長久を祈つてゐるのである。

出征者の父母、妻子、一族の者は言ふまでもなく、其の町內の者達は寒暑の別なく、朝は未明より夜は眞更に至るまで引も切らず各氏神に、或は五社に、十社に、千社に、八百萬の神に詣でゝは國威宣揚武運長久の祈願をなしつゝあり。

市內に主なる神社の一日平均參拜者は數千に及び、例祭日には、其の數、萬を算する熱誠振りである。每晨お百度を踏み淸掃奉仕をなす老母あれば、幼き小學生をはじめ女學生、中學生の淸掃奉仕團ありて各神社共に塵一つ見られぬ淸淨さである。

神かけ賴む國民の熱誠は神意にかなつたか幾多の靈驗が傳へられてゐる。殊に今次聖戰の赫々たる戰果こそは神國日本を護り給ふ神靈の御加護の賜といふべきであらふ。

國威宣揚武運長久祈願

事變勃發以來國民は朝野を擧げて、暴支膺懲の熱意に燃え、勇躍戰地へ向ふものと相競ふて銃後の護りに其の熱誠を示してゐる。

別格官幣社山內神社の大鳥居前には事變勃發と同時に小林縣知事筆「國威宣揚」坂本中將筆「武運長久」の二流の大幟が立てられたのである。

同社に毎日の如く來る官公衙、學校、其の他各種團体の武運長久祈願は同社神職奉仕のもとに嚴修せられてゐる。

同社は毎月の月例の國威宣揚武運長久祈願祭は勿論、毎晨出征將士の武運長久を祈念し、殊に勅令により定められたる祭祀日や大祭日、祝祭日、記念日等には官公衙、學校、各種團体等の代表者並に一般市民の參集を求め、盛大なる祈願の大祭を執行してゐる。昭和十三年四月六日の高知市主催の除隊兵報告祭をはじめ高知街軍事援護會主催の應召出征兵の武運長久祈願、除隊兵報告祭等も同社にて行はれたのである。

縣社山田町八幡宮　潮江天滿宮、藤並神社、其の他の神社もそれ〴〵山內神社と同じく勅令による祈願祭、月例祈願祭、毎朝の祈願等が行はれてゐる。

殊に事變勃發當時は晝夜の別なく、出征應召ある毎に武運長久の祈願をなし、其の上肌守札をも授與し來つたのである。

次に中島町高野寺に於ては昭和十二年十月七日、縣下全眞言宗寺院に呼びかけ、午后七時全住職の參集を得、谷住職導師の下に、高野寺檀信徒、大師講中、金剛講員、密敎婦人會員、出征軍人家族等多數參集の上、宗祖大師の修する所の國禱に準じて、敵國降伏皇軍必勝の祈願を凝したのである。

又乘出の日本基督敎會にては毎金曜日の定期的集會は勿論のこと其の他の集會毎に皇軍將兵の爲に祖國の爲に東洋平和の爲に默禱祈願を怠ることなく繼續してゐる。其の他金光、天理、黑住、大社の各敎會にても所屬信徒の參集の上、毎月或は毎晨國威宣揚武運長久の祈念を絕えず行ひ、出征者には武運長久の守札を授與してゐるのである。

講演會

前述の如く銃後國民は日夕國威宣揚武運長久を祈念しつゝあるも、事變は更に進展し事態は益々重大性を加へ、昭和十二年十月には國民精神總動員の實施を見るに至つたのである。正に銃後國民として愈々日本精神を發揮し、皇國の大義を顯揚し盡忠報國の至誠を表すべきの秋である。

こゝに於て寺院、教會等に於ては屢々講演會、座談會を催し檀信徒の一段の覺醒を促してゐる。各神社に於ては祈願祭後參拜者に對し神職乃至は名士より時局講演をなしてゐる、就中高野寺の如きは、横山首相秘書、砂田政友會幹事等の名士の來縣を機會に板垣會館に於て各々專問の立場より座談會を開きて、時局認識に資し、或は深瀬、宮崎等新聞記者か南北支那視察又は從軍して歸省に當り同館に於て、其の報告を聞き出征將兵が困苦缺乏に耐へ、惡戰苦闘せる模樣を聞き、又安岡大佐等の軍人の話を聞くこと數次。昭和十二年八月一日より三日間には東京智山專問學校教授高神覺昇師の來縣を煩して夏期講習會を開き、銃後の護りを善くし萬遺漏なきやう努め、同十二月十八日には眞言宗泉涌寺派管長椋本龍海僧正七十余歳の老体を煩し、同じく板垣會館にて長時間に亘り懇篤なる講話を受け多數の聽集を感激せしめたのである。

金光教高知教會長道願政治郎氏は同教信徒に對して、昭和十二年七月二十四日「事變と國民の覺語」八月十六日「日本精神の發揚」九月十日「我が身は我が身ならず」同廿二日「神國の大恩」十月三日「戊申詔書を拜して」十三年二月十日「慰問報告」四月三日「八紘一宇の聖旨」五月十日「滅我奉公」六月十六日「貯金報國に就いて」又今非富之助氏は十二年十二月十日「國民の進むべき道」十三年一月三日「時局に對する祈に就いて」「三月廿二日「祈りを一つにして」五月廿二日「健康報國に就いて」說話し、なほ昭和十二年十月十七日には土陽新聞社特派從軍記者西内常吉氏を

して戰況報告の講演會を開いたのである。

黑住教會では七月七日の支那事變勃發直後の同月十五日午後坂本政右衛門中將を招待し講演會を開催した。人心極度に興奮せる際なれば、聽衆堂に滿ち多大の効果を收めた。又同教會は毎年廿二日を以て武運長久祈願日と定めて軍事講話を爲し、銃後國民の覺悟を促してゐる。即ち細木橋大佐定岡速水、西川清水兩中佐をはじめ其の他在鄕軍人或は從軍記者に講演を委囑して、日支事變の原因並に目的又は防共の趣旨徹底に力め時局の認識を深めてゐる。更に同教會の大祭日たる十二月廿二日の冬至祭の當日は、數千の參拜者に對し、國民精神總動員の趣旨に就て山口縣教育課長より、上海戰線現地狀況に就て衆議院慰問團員大石代議士よりそれ〴〵講話を聽いたのである。

天理教會にては七月廿日西源氏、八月二十日細木大佐、九月二十日今井少將、十月二十日井上大佐、山口縣教育課長、十三年二月十一日島村熊之助氏、四月二十九日關田水遊亀氏を聘して講演會を開催したのである。

日本基督教會は日曜學校に於て少年少女に對し事變に對する認識と覺語を徹底せしむるやう努め、精神作興週間には特に縣外より名士を聘して、教徒に說教し該週間の目的達成に資したのである。

刊行物頒布

各寺院教會は講演會或は座談會等によりて、信徒一般民衆の覺醒を促しつゝあるが更に刊行物を頒布して、時局の認識を殺め、銃後の護を益々鞏固ならん事を計つて居る。高野寺は祈願文

至心發願　奉唱經典
今上陛下　玉體安穩
御願圓滿　國威發揚
武運長久　文武百官
身心堅固　傷病將兵
速疾平癒　戰死英靈
頓證菩提　同心戮力
資生產業　願意成就
天下泰平　乃至法界
平等利益

を發行屢々信徒に配布し、毎晨東方に向つて禮拜し拍掌、更に先祖の靈前に鐘を鳴らし合掌禮

拜、經を讀み眞言を唱へ右祈願をなし、又鐘を鳴らし合掌禮拜し靈前を退下し、各自の業務に精進して消費を節し生產を擴充し四恩に奉答せしめてゐるのである。

出雲雲大社土佐分院は、いろは俗謠のびらを作り信徒に配布して、銃後國民の警醒實踐に資してゐる。

金光教會は「御慰問」約一千九百部を出征家族を主とし其の他信徒有志に「時局に處する本教信者の信念」約五部を主として信者に「國民の進むべき道」約一千部を一般人を主とし縣、市當局に各二百部、各學校に十部宛、其の他有志各種團体、信徒、出征家族にそれ〴〵を頒布し、「我身我ならず」約六百部を傷病將兵を主として他有志信徒へ、「貯金報國」約三百部信徒、一般有志に、又ポスター「國民精神總動員」「協力一致銃後の固め」「働け身の爲家の爲」「食物を粗末にするな國の爲」「早起早寢」等を頒布したのである。

警醒いろは俗謠

イ　いつまで經つても礎え堅く動きやせぬぞよ日本國
今の戰さは烟りが黃金烟り造るに骨をおれ

ロ　勞働してこそ食事も味ひそして體は强くなる

ハ　はでな姿は人目はよいが造る姿にや無駄な金

ニ　賑ふ街には足踏み向けな知らぬ魔風に吹込まる
ホ　放蕩さんみにふけりし國は昔は羅馬がよき手本
ヘ　へんに匂ふとふと眺むれば厚き化粧は富士の雪
　　紅も付けない化粧もしない木綿姿が金を産む
ト　遠い西洋の品さえ見れば良しも惡しきも買いたがる
　　どんと一發打つたが最後五錢貨幣が烟となる
　　どんどん打て〳〵戰に勝てよ彈丸はわしらが手で造る
チ　ちつと心にお國を思やいやな洋物買はしやるな
リ　悧巧な人じやと思ふて居たに西洋かぶれの阿房もの
ヌ　主の生れは日本國よ世界を作りし神の國
ル　流浪するのはなまけのあげく働きや安樂目のあたり
ヲ　親が汗水流してためた金を湯水に使ふ奴
　　親は學費と思ふて送る子供笑ふて茶屋遊び
ワ　我々日本に生れしものは君の爲なりや身を捨てる
カ　金は取りたし仕事は嫌よそれで浮世が渡りようか

　　神の造りし日本の人は一人のこらず神の胤
　　髪を縮めて錦紗の衣物しやな〳〵往く奴ちや國潰し
　　神に祈願をかくると共に時間造りて金ためよ
　　紙屑捨ふて飛行機造れ神が世界を左右する
　　學事進まず放蕩すゝみ身をも家とも皆潰す
ヨ　能く〳〵守れよ金なる時を時は金産むお母さん
　　良き品造りて異國に出してそして異國の金を取れ
タ　たつた一錢二錢と云ふな數が重なりや數万圓
レ　禮儀作法が正しくなけりや家も國をも皆亂る
ソ　そこのけ親父と子供は威張るかゝる子供は親不孝
ツ　勤め樂しむ心でなけりや家をも國をも富はせじ
ネ　年中休まず働くなれば出來ない貯金もよく出來る
ナ　何んと云ふても儉約せねば其日暮しじやむつかしい
ラ　樂をしよふと思ふたならば勵け〳〵若いもの
ム　昔は財布に貯めたるお金今は貯金の通帳

ウ うつら〳〵と眠りて居では浮世渡りはむつかしい
キ 一杯呑むだと思ふて金を入れよ筧筒の小引出、
ノ 後の榮えを思ふたならば日々の暮しに無駄するな
乘るな自動車人力電車足も身体も弱くなる
オ 思へばお日さん東に出で丶西の國をば皆照らす
ク 國の富むのも貧乏するも個々の心の持どころ
ヤ 大和民族榮えにやならぬ八紘一宇が基じやもの
マ 祭りするのは御國の習ひとれで日本は千代八千代
ケ 今年は祝ひ日日の旗立て丶祝へ民草忘るゝな
フ 古釘拾ふて軍鑑作る意氣を揚るは今ぞ今
コ 心誠に盡くせよ民よ國の根元に培ふて
エ 榮耀榮華に暮した人は親に離るりや居候
テ 天に太陽地に日本國二つないぞや氣を付けて
ア 惡魔が嘴揃へて來たら大和刀で斬り棄る
阿房云ふなよ日本の人は利慾離るゝ仁侠（にんきょう）

サ 酒を呑むのも貰をすうも限りわすれな心して
キ 屹度是より心を締めて無駄なお金は使ふまい
議論するより實行しやんせぎろんは仕事の邪魔となる
ユ 云ふて甲斐なき昔の驕り今は後悔をかむ
メ めい〳〵揮しつかり締めて造れ八十餘億圓
ミ 見えを飾るな今日此頃は質素倹約一大事
シ しみ〴〵心に思ふて見れば奢侈のたゝりはおそろしい
白いゑぶろんぬがして見ればしたは錦紗のよき衣物
エ ゑびす顔してにこ〳〵笑ひ笑つて働きや家は富む
ヒ 晝は遊山に夜は活動と遊び暮せば内は暗み
ひどい事とじやと思へば今は酒も貰も減してのめ
モ もしも緊縮節約せねば銃後の勤はむつかしい
セ ぜひに及ばぬ今度の戰さかゆをすゝりて金造れ
是非を云はずに働かさんせ働きやお金は湧いて來る
ス 濟んで仕舞へば一夜の夢と後は苦勞の物語り

護國の英靈

胸に戰線の曠野を畫き、勇躍暴支膺懲の征途に上る將兵の見送りに、或は久聖戰の第一線に活躍奮鬪幾多の武勳を樹てゝ傷いた白衣の勇士の歸還に、其他出征歸還の就れを問はず各神社、寺院、教會の職員は勿論檀信總代、役員、所屬婦人會員、青年會員は逸早く驛頭に或は沿道に馳せ集りて熱誠なる歡送迎をなしてゐる。殊に今次事變に勇奮火線の中を馳驅し挺身護國の華と散りし英靈の無言の凱旋には常に增す群集も寂として聲なく唯涙の裡に迎へてゐるのである。

英靈驛に到着すれば神官或は僧侶奉仕して嚴肅なる驛頭祭が執行され一般出迎者は齊しく弔意を表してゐるのである。

戰歿者の市葬、慰靈祭に際しては多數の神職僧侶の奉仕は勿論各教會は其の所屬信徒各代表者を參列せしめ金光教會の如きは本部名義による弔辭玉串料一封を英靈一柱每に贈供してゐる。又英靈供養として高野寺は、屢々戰歿者遺族の參詣を煩はし供養法要を營み頓證菩提を祈り、或は每月忠魂墓地に參詣し掃除後讀經し英魂を弔つてゐる。昭和十二年十一月二十一日には高野山大師教會本部より布教師長尾龍範僧正の來錫を煩し、大土砂加持秘法を修し戰死英靈の大菩提を祈つたのである。

驛頭祭

軍用家畜慰靈

江南北支の戰場にて我が皇軍の影に隱れて嘶かしき武勳を樹て戰場の露と消えし物言はぬ軍馬、軍用犬、軍用鳩の慰靈に付てはやゝもすれば等閑にされつゝある感あるも高野寺は、昭和十三年三月三十日午後七時より板垣會館に於て、第十一師團獸醫部長代理、將校婦人會長和知夫人以下愛國、國防兩婦人會員、縣畜産組合員其の他檀徒參列の上馬頭觀音秘法供を修し、軍馬、軍用犬、軍用鳩の離苦得榮頓證菩提を祈り法會を營んだのである。

報國托鉢

風雲急を告げる時局の重大性を鑑み高知縣佛教聯合會は、「佛教報國」目指して、高知市附近二十寺

院の僧侶を動員、皇軍感謝、銃後後援の報國托鉢を勤行した。即ち昭和十三年九月十五日午前八時市内二十余寺の住職僧侶約四十名は墨染の法衣に草鞋がけ讀經の聲も嚴かに先づ縣廳、市役所を訪問、本町を東へ木屋橋まで、それより逆行市の繁華街、種崎町より京町帶屋町に銃後の赤誠こもる托鉢を續け本願寺別院に歸着したが、沿道の篤志家は奮つて淨財を喜捨し、護りも固い銃後異風景を街頭に点描した。

なほ同托鉢隊は護國英靈遺家族の門前通過の際はねんごろに讀經禮拜し戰歿勇士の心からなる冥禮を祈つたが、この托鉢によつて得た淨財は高知聯隊區に寄託、國防費、傷病戰士並に第一線勇士の慰問費として献納したのである。

慰　問

故山遠き北支或は江南の野に酷暑から嚴寒へ、高粱の葉隱に露營の夢を結び、或はクリークの水に敵彈をさけ、惡戰苦鬪を續くる皇軍將兵は、知ると知らずにかゝはらず故國の同胞からの慰問袋や心をこめた手紙を如何程か喜んだことであらう。戰場の將兵慰問のみならず、病院に再起の日を待つ傷病兵の慰問に、さては遺家族の慰問に感激的な幾多場面を展開してゐるが、これこそ銃後國民の最も自然的な眞心の發露である。

高知縣神職會員は、高知陸軍病院は勿論の事、昭和十三年一月一日多數會員打揃ひて善通寺に白衣の勇士を慰問した。これを第一回に續いて三月、六月と數回に亘りて慰問し、更に各神社は氏子中の出征者家庭を訪ひて遺家族の慰問をなしてゐる。殊に昭和十三年七月七日事變一週年記念の當日、山内神社は、傷病兵〇〇〇名を同社に招待し、事變一週年報國と傷病兵病氣平癒の祈願を執行し後傷病兵に神酒、直會の接待、御守札、御供物、同社繪葉書等を授與し、更に雅樂詩吟等の余興を催して、心からなる慰問をした。又應召出征者子弟への意義深き修身教科書の頒布奉告祭を十三年三月執行し、約三千二千冊を縣下小學生に頒布した。

中島町高野寺は本山の援助の下に、毎月一回或は二回陸軍病院に白衣の勇士を慰め今日も尙繼續してゐる。昭和十二年十二月九日同時教化部、密教婦人會員は、禮札、菓子等を携へて陸軍病院に傷いた勇士を勞はつた。

浦戸町金光教代表者は昭和十二年〇月〇日出動の前日和知部隊長を訪問し金一封を贈り送別の辭を述べ、十月には出征部隊に晒木綿十五反を贈り、十二月には所屬信徒、各學校生徒兒童作の慰問手紙二千五百通を出征將兵に送つた。又白衣の勇士慰問として、九月七日教會長、道願改次郎氏は本部慰問使として陸軍病院を慰問の上、金一封を呈し、十月十六日には所屬婦人會幹部十一名陸軍病院慰問、金一封を、十一月十三日には信徒總代四名同じく陸軍病院慰問、金一封を呈し、十三年

六月七日には教會長慰問の上冊子三百六十部を呈したのである。更に遺家族慰問のため九月下旬より十月初旬に亘り、信徒總代、役員、婦人會幹事等各區分担して市内出征軍人家族全戸を慰問し「御慰問」の冊子を贈つた。尚信徒は最寄を以て各自夫々慰問をなし特に戰死者遺家族を機會ある毎に慰問し弔意を表してゐる。

天理教時局委員會より現地看護婦が派遣せらるゝ事となり高知大教會は大利政美、二宮シゲノ、緒方クニヨ、谷本フジ、の四名を選拔の上送り、尚河野、前田兩名を軍部雇用給仕として其の任に當らしめたのである。同教會も數度朝倉陸軍病院に傷病兵を慰問し其の上慰問金を贈り、所屬婦人會は慰問袋を作成する等皇軍慰問に絶えず努力を拂つてゐる。

日本基督教會にても出征將兵に慰問袋を送る事數回に及び、一回約二百個を送つてゐるのである。

又同教所屬清和女學校並に清和幼稚園に於ては、時々陸軍病院を慰問し、特に幼稚園に於ては園兒の遊戯唱歌等を以て入院中の將兵を慰めてゐる。

献　金

今次事變勃發以來、國民銃後の熱誠は彌が上にも昂揚し眞に涙ぐましきものがあり、正に日本獨特の美しき面目が遺憾なく發揮されてゐるのである。其の一として献金の上にもその事實が如實に

表はれてゐる。

高知縣神職會は事變勃發するや直に總會を開き、會員各自特別負担金を醵出し、時局關係諸經費に充當する爲、特別會計を設置し、別に國防献金を會員より取纒め全國神職會、高知縣神職會を經て其の筋に献金したのである。

朝日新聞社の軍用機献納資金募集發表あるや、天理、金光兩教は其の趣旨に贊同し之に應じた、就中天理教青年會員より壹千餘圓の献金を見たのである。

資源愛護

昭和十三年五月五日より、國民の勞力と國内の物資を動員する目的の「國家總動員法」の實施を見たのであるが、この法を待つまでもなく銃後國民は擧つて祖先傳來の尊き日本精神を日常の生活に活かし、生産を擴充し、消費を節約し、貯蓄を增加し、資源を愛護し以て國策の遂行に協力しつゝあるのである。

各神社、寺院、教會等に於ては講演に刊行物に、あらゆる機會にあらゆる方法にて檀信徒をはじめ、一般民衆をして國策線に副はしめ貯蓄に勞力に總て資源愛護に參加せしめ、今や愛國貯金組合、勞力奉仕團等の設置を見るに至つたのである。

一般美談

一、驛頭の感激譜

皇軍が一度起つて正義の旗を翻すと、全國津々浦々に非常時美談は花と咲き、勇しい軍靴の響と日の丸の怒濤の交響樂の中から、感激の嵐は果しなくつゞく、これは銃後國民に贈る軍國純情の教訓である。

わつと揚る喊聲の中を、威風堂々暴支膺懲に上る〇〇聯隊が、晴渡る秋空を厭し見送りの群集の堵列に送られて、粛々と〇〇驛に着いたのは〇月〇日の午後一時頃だつた。驛頭の群衆は熱狂して万才を叫びゴツタ返しの有様である。その中を警官は飛び廻つて整理に當つてゐる。

戰線へ急ぐ勇士は今丁度休憩時である。此の時驛前派出所にゐて部下を指揮してゐた縣特高課次席乾警部がふと見ると、これは又何事ぞ。屈強の一兵士が、交番のかげで人目をはゞかる如く泣いてゐるではないか。精悍剛毅の乾警部はキツト近寄り、

「此の期に及んでおくれをとつたのか。大事の門出に涙を見せるとは、卑怯未練な腰抜奴！」

と語氣するどく詰問の矢を向けた。兵士はハツト直立不動の姿勢をとり、尚も涙に咽びつゝ

「これには深いわけがあります。御覽下さい。」
と二通の手紙を差出した。

× ×

この兵士は、幡多郡宿毛町出身の陸軍歩兵上等兵長崎隣一君で、さきの上海事變にも出征に上つた事のある勇士である。

支那事變の進展につれて再び應召され、臨月の妻と水盃を吸み交して入營し、一旦市本丁筋五丁目の表具店宮崎氏方に宿泊して、出征の日を待つことゝなつたのである。

「御國の爲です。御世話させていたゞきます。」と、宮崎氏夫妻が眞情こめて歡待すれば、二少女晴子さん都三子さんも無邪氣に接待した。我が子か兄弟の樣に、心をこめて慰め勞はる其の眞情に、多感純情の長崎君は唯々感激するのみであつた。

あこがれの入隊日には、親子五人が知るべ少い勇士を圍んで營所まで見送つた。入隊後は天使の樣な二少女から、血のにじむ樣な優しい激勵の手紙が送られる。かくて知らぬ他人の熱い情を身に受けながら、勇士は感謝の數日を出征の準備に忘殺されたのである。

おゝ膺懲の門出は來た。我等の部隊は、伍堂々營門を出發して市中行進、見送りの旗の波もを押分けて驛にと向つた。思ひ出の五丁目にさしかゝる。宮崎氏一家は沿道に待けて別けをつげ、家族一

同記念の日章旗を送れば、一少女も亦激勵の手紙二通をを手渡した。

長崎君は、これ程人の情を強く身に感じた事はなかつた。驛に着いた。休憩ラッパが鳴りひゞいた。餘りの嬉しさ感激の極に達した勇士は、交番所のかげてそつと手紙を開いて見た。あゝ、これが泣かずにゐられやうか、立派に働いて見せます。お國の爲だ死んで見せますと、強く心に誓ひながら、男泣きに泣いたのである。

× ×

軍民一如のこの物語りに感動してゐる乾警部に向つて、

「どうか其の手紙は少女に歸して下さい。戰爭に金はいりません。少女に雜誌でも買つてやつて下さい。又國の爲に死ぬ覺悟だと親切な一家に傳へて下さい。」

「激勵の手紙だ。身につけておくがよい。金はきつと引受けた。十分働いてくれ。」

此の時集合のラッパは鳴りひゞいた。其の時おそく馳せつけたのは宮崎一家の者であつた。

「はや整列だ。おゝ列車に乘る。」

「お、宮崎のお父さん。」

それも一瞬、互に手を振り旗を振つて別れたのである。

乾警部は、此のうるはしい宮崎一家を訪ふて金子を手渡し、勇士の決心を物語つた。やがて此の

金子は宿毛の長崎家に送られ、出征數日前に生れた次女の產衣となつて肌身につけられる事となつた。

物語は中支戰線に移る。長崎君は敵前上陸以來、常に○隊の先頭に立つて、輝く武勳を建てたのであつたが、秋深み行く江南の戰塲に於て、下幸敵彈の見舞ふことなり、立派に銃後への誓約を果し、二十八才を一期して、その感激的な生涯を終へたのである。

宮崎家では深くその死を悼み、遺骨が無言の凱旋すると、引取りに來高した遺族に乞ふて、尊い御靈を同家に招き、祭壇に安置して涙の對面をした。かくて遺族と共に勇士の追憶に、一夜をしんみりと語り明したのであるが、其の夜長崎君からの最後の便りがひもどかれ、今更のやうに宮崎家の眞情に遺族たちは感泣したのである。

前略、御なつかしい晴子樣都三子樣、御變りはないでせう。益々御勉强に勵んでゐられる事と思ひます。私も至極元氣で皆樣の御期待に添ふやう一生懸命働いてゐます。もう激戰を幾度となく經て來ましたが、身にはかすり傷一つ受けません。とれも皆樣方の御心盡しの賜と、感謝の涙にむせんでゐます。毎日敵彈の洗禮を受け、汗と土と血にまみれての生活の中で、やさしくしていたゞいたお家の皆樣方の事を思ひ續けてゐます。

灰色の江南戰線○○壕塚の一隅にて十月十日

尙次の、未知の一戰傷兵からの手紙を見ても、宮崎氏一家の眞情が、如何に長崎君の心を捕へていたかが窺はれるのである。

初夏の候、高堂益々御清昌奉慶賀候

陳者、昨年事變遂に江南に及び、我々勇躍征途に就きしが、其の記念日漸く來らんとする時、小生戰友長崎隣一君の事ども追懷して、江南戰線の思ひ出湧然として今に甦り申し候。長崎君とは高知出發後香川縣多度津宿泊以來、尤も仲睦しく行動を同じくし　戰地に於ては勇敢無比、眞に軍人としてさの恥辱なき奮鬪の結果、遂に名譽ある江南の華と散り候。

御貴家に宿泊中格別の御懇情竝に御世話樣相成り候事は、○○○港出港以來口くせの如く語られ居り、小生等始終其の噂を承りたる者に候間、仝君戰死の直前まで、右の御氣持の有りし事御傳へ申し上げ、長崎君の御冥福を祈る次第に御座候。

先は右突然ながら、故人最後迄の貴家に對する感謝の氣持、御紹介申上げ候。

昭和十三年六月七日

○○陸軍病院にて　井澤　昇陸

現住所　高知市本丁筋五丁目一三二

氏名　宮崎忠次郎

生年月日　明治二八年五月七日
職　業　表・具　師

二、職業戰線の女性

止むなき歸郷。

垣内一郎氏と妻松子さんは、大阪市北區野田町に一家を構へて商賣を營んでゐた。大都大阪にも深み行く不況の波は荒れて、余り好景氣には惠れなかつたが、夫婦暮しの生活には、何の不安も不自由もなかつた。

然し突如其の店を閉ぢて、鄕里に歸る事となつた。それは一郎氏にも譽の召集令狀が交付せられたからである。事變が始つて以來、一人心の奥にうす〳〵覺悟はしてゐないでもなかつたが、突然召集令狀を手にした一郎氏は、一刻の猶豫もならず、取敢ず荷物一切纏めて、鄕里の兄の家田淵町五番地に身を寄せた。

そして昭和十二年〇月〇〇日〇〇聯隊に入隊して、〇月〇日百田部隊に加はつて勇躍征途に上り、爾來今日迄一年有半、同行の戰友も多く歸還したのに、戰地に踏止まつて、彼の地に武漢の陷落を聞く迄になつた。

松子さんは夫を戰地に送り九月十四日、單身大阪に赴き、店の後始末、家財道具の整理一切を女手らも終へて十月歸郷した。

一家の不運。

當時兄は不幸にして妻に死別し、母芳子さん（七〇）とわびしく暮してゐた。

門出の酒を汲み交し乍ら、明日にもわからる身の上の事も知らず、兄弟は睦まじくお互の思ひを語り明かした。

「兄さん厄介な松子ですが、他に頼る所もないのでどうぞ、松子は置いてやつて下さい。」

と妻を案ずる弟の言葉を打消すかの樣に。

「後は心配するな、松子さんには氣の毒だが、炊事や洗濯でもしてもらへば、年取つた母もらくだし。」

と。やさしく言つて下れた兄が、一郎氏の出征後、いくばくもなく、然も弟の戰地からの便りも聞かず、不歸の客となつた事は、松子さんに取つて此の上もない運命のいたづらであつた。

勇ましく職を求めて。

慕ふ夫は戰地に、頼る義兄は他界、年老ひた姑と二人取殘された松子まんは、深み行く秋にも増して淋しさを加へられたのである。

唯借猫の樣な淋しさに、ひたすら戰地の夫の武運長久を祈り續けたが、いつまでも弱い松子さんではなかつた。

義兄を失つた後の二人は、姑の持ついくらかの貯金に生計を委ねるより他に道はなかつた。それは義理として、若き軍人の妻として出來ない事だと考へた松子さんは、奮然起つて職業戰線に進軍した。

職業戰線異常あり。

十月も始め高知職業紹介所を訪れた松子さんは、身の上一切を語つて職を求めたのである。

「戰地の夫にかはつて、どんな仕事でも働きます、一生懸命勤めて見たいと思ひます。」

と働く決意をもらした、松子さんに感動した係員は早速取調べてくれ十月十二日から高知縣廳保安課へ臨時雇として奉職した。

他人の中に交つて働く樣になつた、松子さんは色々と氣兼ねもあり、淋しさもあつたが、それも日增しにうすれて、いつか朗かに働く樣になつた。

かうして働く内にも、夫の健在を神かけて祈らぬ日はなかつた。然し臨時雇のはかなさは、奉職後貳ヶ月足らずで解職となつた。

然し失望はしなかつた、再び職を求めて、十二年も暮れ近い十二月二日から、生魚株式會社に臨時雇として採用せられた。日給は前職よりも低くはあつたが、精勤は益々はげしく、十二年も暮れて、聖戰下のお正月を迎へ、一月、二月、三月と水凍る嚴冬から、若草の四月一日迄一日とし休むことなく、老母をいたはりながら働き續けた。

こゝでも永續は出來なかつた。四月十六日生魚株式會社を辭した松子さんは、曾ての精勵と技術を認められてか、再びもとの、縣保安課に、書記として就職することゝなつた。

かくて異狀ある職業戰線に、雨の日も、風の日も夏から秋へと、一日の如く欠勤もなく働き續けられてゐる。

姑に盡す孝養。

夫の出征、義兄に死別して以來、他から何等の補助を受ける事もなく、自己の力に家計を維持し夫に對しては家庭に對する憂を毫も掛けず、後顧の憂を斷つて奮戰活躍せしめつゝある一方、孝養も亦怠らない。

洗濯、炊事は勿論、暑ければ暑いで、寒むければ寒いで、衣食住の上にも何くれと面倒を見る

事を怠らなかつた。

日毎の食膳に母の好物を上せ、四方山の話に母を慰めるである。

殊に給金日などには母の喜ぶ物を買つて來て

「お母さん、これを買つて來ました、一つお上り下さい。これならやはらかくて、お母さんもあがられると思ひます。」

と眞心こめたた松子さんの心に、母も涙を流して喜ぶのである。

こうした松子さんの、異狀ある職業戰線に轉戰しつゝ、孝養を盡す健氣さは、町内は勿論、一般の人々をして、軍人の妻、銃後婦人の模範であるとの噂を高めたのである。

◎ 非常時の身の憂事(ウキゴト)にあひてこそ

人の眞實(マコト)はあらはれにけれ。

現住所　高知市田淵町九五番地

氏名　垣内松子

生年月日　明治四三年一二月二〇日

職業　高知縣廳保安課書記

三、帶留は光る

昭和十三年六月九日、四國銀行の窓口に

「貧しい暮しをして居りまして、金と名のつくものは何一つありませんが。たゞ一つ三十年前に買つて貰つた結婚記念の帶留、どうぞお國の爲に役立たせて下さい。」

と、惜しげもなく、金の帶留を献納する一老婦人があつた。

姓名も告げずに立去らうとするので、受付の者が追かけて聞いたが、

「本當にお恥かしいことです。お國の爲になりさへすればそれでよいのですから。」

とのみ容易に答へやうとしなかつた。

一生の記念の帶留を献納して、名も告げずに立去らうとする奥床しい心の持主、薪を積んだ荷車を引く老婦人こそは、新屋敷町、星章も輝く出征の門標のかけられた家の宮部留野さんとよぶ軍國の母だつた。

主人政民氏が大正九年税務署官吏を退職すると、養鶏を業とせられてゐたが、長男は滿洲國の警

察官に、次男は川崎造船所に就職し、一女も又嫁いだので、養鶏もやめ閑日月を送つて居た。

しかし、この非常時に遊んでゐては申譯ないと、二人は薪商をはじめた。政民氏は薪の買入れ、荷造りに當り、留野さんは荷車を引いて街頭に行くのである。その中に二男政隆君も應召第一線に奉公の身となり、夫妻の決意は更に強められたことは言ふまでもない。兵士に劣らぬ銃後の御奉公は念じながら仕事をはげんでゐる。

行商からかへると、夜はおそくまで思ひを遠く大陸にはせ、皇軍の戰勝と愛兒の武運を祈りつゝ軍手を編んでゐる。國防婦人會の役員も近頃は務められトゐるとか。何事によらず進んで眞劍に働いてゐるお母様である。

宮部さんは語る。

「金は少々ありましたが、不要なものですから値のする時大半賣つてしまつてたつた一つ帶留が殘つてゐました。大阪毎日新聞社が金献納を募集してゐるのを知りまして、家においてもいらないものだし、お國の爲に役立つのだからと思つて差し出したまでゝす。一つしかなくなつてゐて殘念でした。」と。

主人政民氏も七月一日、この非常時に何とかと考へられて、「税金はお國の血液である。」として滯納を防ぐ爲に納税組合を町内に結成した。市より受ける奬勵金は、出征將兵の慰問費、遺家族の

救護費として使用する樣に計畫してゐるさうである。

毎月の樣に來る切符は宮部氏から配られるばかりでなく、集金も同氏が當られてゐる。

まことに二人揃つて、この非常時突破に奮鬪せられてゐる事は、敬服の至りである。

帶留にかゞやく銃後の光、

この母、この父、まことに軍國の父、軍國の母と呼ぶべきであらう。

現住所　高知市新屋敷町一五八番地
氏名　宮部政民
生年月日　明治十一年六月五日生
職業　無職
右妻　宮部留野
明治十八年八月一日生

四、應召一家に集まる仁俠

山田作太郎（假名）が〇〇〇聯隊に入隊すべき召集令狀を受けとつたのは昭和十二年〇月〇〇日仝

午前二時であつた。時日は既に切迫して居た。當日午前十一時四十八分の上り列車にはどうしても乘らねばならない。然るに本年春の南國土佐博覽會を目あてに唯漂然と職を求めて來高した彼には余裕のある生活は出來やう筈もなかつた。其の上家庭には六歳と三歳になる幼兒あり而かも妻は姙娠中である、頼る邊なき妻子を殘して遠く入隊する彼は先を思ひ後に案ずる時唯焦躁と不安に惱まされた。

これを知つた在鄕軍人南街分會、國防婦人會等は早速餞別を贈り、後事を引きうけて彼を激勵し感奮出發させた。

この氣の毒な家族を慰め肉親もたゞならぬ溫情と救助を與へてゐる人がある。

醫師　水野於兎彦氏の義俠

母子三人、人の情に心細くも生活する山田家庭に病魔の災は次から次へと一家の者を苦めた。應召後一週間、二女急性胃腸カタルにて病臥、かくと知つた水野氏は早速其の家に往診心からなる溫情を以て治療に盡し妻女を慰めそれよりは毎日の如く往診投藥九月二日快復するや長女感冒に臥し十二月二十一日には二女復感冒にかゝり翌年一月廿五日には長女亦感冒に臥し全快したかと思へば又二月二十日より發熱、この間に母親十日余り急性氣管支炎、引續き產後約一ヶ月の病床、同氏はこの不憫な一家の爲に常に往診醫療につとめた。

一家の災はこれに止まず醫療に遠ざかる暇なく五月五日より長女麻疹を病み肺炎を起し、續いて二女も麻疹に臥し更に食餌中毒を併發して姉妹枕を並べて五十余日、この間に母親も感冒に臥すこと五日、更に入學適齡なるも病弱の爲本年猶豫せる長女は八月十四日より左中耳炎並に漫性氣管支炎にて現在（十月中旬）に及び治療中である。

夫應召出征以來一年有余、さなきだに不憫なこの一家に病氣の絶え間なくなることに痛ましき極なるも年余に渉り引き續き之が治療につとめいさゝかも醫療謝禮を要求するにあらず心からなる愛と情を以てこの一家の爲に救護を續けられる水野氏こそまことに仁醫と申すべく。氏の義俠はこの一家に止まらず尙他の氣の毒な應召家族にも及び高價な注射を何十本となく施してもいさゝかも藥價を要求せず。

その醫療報國の赤誠は氏の日頃の義俠と共に感謝と感激を以て仰がれてゐる。

現住所　高知市掛川町二四番地
氏名　水野於兎彦氏
生年月日　明治三〇年九月六日
職業　醫師

岩貞愛藏氏の溫情

應召其の日より生活に困る山田一家の世話を引き受けて賴るべなきこの一家に溫き情と救助の勞をとられたのは岩貞愛藏氏である。

氏は取敢へず米屋を奔走して五升或は一斗と寄附を仰ぎ忽き六斗程を得て之を贈つた。西山合名會社主人の如きはかゝる應召家庭に普通米は贈られぬと特に上米二斗を快く差出した。

尙ほ氏は現在の非衛生的な住居を他に轉宅させる事にまで心を配り、方々詮議周旋して自家の近くに轉居させた。爾來何かと一家の面倒を見て陰に陽に救護に力め、さうして隣人其の他特志家よりこの一家に惠み與へられる同情を氏は我が身に受けるが如き感謝と感激を以て一々之を記錄して殘しおくなど肉親も及ばざる眞心を竭してゐるのである。

人の情を謝するは人の道である、山田君の凱旋の曉に此の人々の情に感謝の誠を捧げ人の道を行かしめんとの深い慮からである、事小なるに似てその慮は實に深いものがあり、而して事易なるに似て仲々面倒困難な業でもある。

一月廿七日山田妻女出產の夜の如きは隣家の婦人等詰めかけて世話する中に同氏夫妻はあたかも我家族の出產の如き喜びと思ひやりを以て一夜中夫人は脊腰をさすり勞り勵まし、氏は自宅に在つて湯を沸して運ぶなどまことに聞くも嬉しく美はしき溫情を以てこの母子を抱擁したといふことである。

現住所	高知市弘岡町五〇番地
氏名	岩貞愛藏氏
生年月日	明治二十一年一月二十三日
職業	無

久保田猪作氏の援護

方面委員久保田猪作氏も亦この一家に深き同情を持ち救護金の支給を市當局に申請して救助を仰ぐことゝした。

方面委員として氏は月々若干の金品を支給援助するの責任を完うするに止まらず更にその家庭の生活狀態にまで溫き情をかけ時々慰問し生活狀態を見、その相談相手となつて必要に應じ適當に金品の支給をなしこの一家の家計を氏自ら引き受けて實に親身も及ばぬ面倒を見てゐる。これによつて氏の手許には支給額中よりこの一家の準備金として幾許の金が常に貯蓄されてゐるといふ。

「まごゝろ」の人ならではかゝる援護は出來難いのである而かも年餘引き續き此の一家の爲に庇護ある。

してゐるものである。

誰かその深き慮とその溫情に感激しないものがあらうか。

現住所　高知市朝倉町一〇八番地
氏名　久保田猪作氏
生年月日　明治十五年三月六日
職業　紙輸出商

五、戰友の勳功を喜ぶ母

昭和十三年四月七日河田部隊に一枚の葉書が舞ひ込んだ。此の葉書こそは江南戰線に名譽の戰死を遂げた二人の勇士の遺家族が、互に慰め合ふ麗しい軍國美談が秘められてゐた。

即ち差出人は、去る十一月〇〇戰線で、壯烈なる最後を遂げた高知市本與力町故北代信夫伍長の

お母さん「とし子」さん、宛名は故今井清香伍長未亡人靜子さんで、葉書の内容は

（前略）私はあなたの御主人様と同期の戰友故伍長北代信夫の母で御座います。信夫戰死後遺品整理中、はからずも清香様の御名前を見出し、一日も早く信夫の名譽を御傳へ申さんと存じましたが、若しや戰地に御出ではないかと存じ、差しひかへてゐましたところ、信夫遺骨凱旋の前日、私、妹より清香様は信夫にさきがけて、羅店鎭にて華々しき御働きの上、御戰死遊ばされし由聞き、信夫生前の交友の中にて、とくに御親交賜はりましたことをかへりみ、嗚呼、二人共早や天上にかと、萬感胸に滿さるゝ思ひがいたしました。……中略……

今日新聞紙上にて清香様御儀殊勳の故を以て、部隊長殿より賞狀拜受の趣き承はり、私はどんなに嬉しく存じましたか。清香様の御名譽は即ち戰友一同の名譽。數ならぬ私共迄、肩身の廣い思がいたします。ようぞ御奮鬪下された、よくぞ御盡し下されたと、忝なさ一つぱいで御座居ます。御一同様の御喜び目にみる如き心地して取り敢えず無筆を以て、かげながら喜びに打ち震ふ私の胸の内を申上げます次第……後略……

清香の薫ずる思ひけにまこと
君が武勳をたゝへたる記事

なほとし子刀自は旧山内藩家老職の家に生れ、文學者として聞えた祖父前野吉成氏の薫陶を受け、

少より歌道に造詣深く、吾が子信夫伍長の出征以來戰死したる今日までの心境を詠じたる和歌集「忘れ得ぬかげ」を近く出版するとのことである。

「忘れ得ぬかげ」中より

出征に際して

死所を得よ死所を得よかしやき太刀の土佐の男子の意氣見せよかし

徒らに輕んじますな大君のたのませ給ふ吾が身とし知り

此頃の我が心境

よくぞ生れよくぞ死せしと思ふかな吾子のうつしゑみつゝしみじみ

大君の御勅かしこみかへる日を命のかぎり母はまたなむ

金鵄勳章を頂きし嬉びをいひ越せし人にかなしさに昨日はなきぬ今日はまたたゞうれしさに咽ぶとを知れ

現住所　高知市本與力町三〇
氏名　北代とし子
生年月日　明治二十二年十月二十三日生
職業　無

六、三役を全ふして

堅く誓つて夫を送る。

岡崎曹夫さんは高知市田淵町一丁目に、材木商を營んでゐたが、昭和十二年〇月、召集令狀をうけ、妻の芳子さんの手一つでは、其の上芳子さんは身重であり、長男雅夫君を頭に六人の子供をかゝへてゐたので、到底家業の維持繼續にたへられないと思つたので、一切を整理して店を閉ぢてしまつた。

元より材木商として、盛にやつてゐたので家計は豊な方で經濟的な不安はなかつたが、妻一人に子供六人を、それにもう二ヶ月近くで生れ出る、幼な兒の事など思ふと、わけて子煩惱な曹夫さんも、一沫の不安はあつたであらう。

「此度の召集は出征をまぬがれない、自分としてもそれを心から願つてゐるが、お前一人に生れ出る赤ん坊まで頼んで行くのは、氣の毒だが、出征後はわしに變つて子供丈は充分たのむよ。

皆んなも、お母さんの言ふ事をよく聞いて、仲よくするのだよ、殊に雅夫はもうすぐ六年だから、弟や妹を世話し、勉強もうんとするんだよ。」

と妻や子供に言つたのは門出の前夜であつた。

「家の事、子供の事は御心配して下さいますな、及ばずながら、後は充分引受けてやりますから、御安心して御奉公をなさつて下さいませ。」

と惻々の感懐を胸の奥深く包んで、勇ましく夫を送り、その後凡そ一ヶ月程立つて、貴夫さんも大陸へと出征したのであつた。

芳子さんは、臨月の身重を、八月の炎天下にさらし乍ら、千人針や、千人力を作るのもいたましく思はれる程であつたのである。

母として家庭の芳子さん。

夫の出征後、一ヶ月程立つて、六男彰夫君を安産した。これで一家は雅夫（一二）健（一一）孝夫（七）宏（六）祥男（三）祐子（一〇）と共に、母と七人の子供暮しとなつた。

芳子さんは、朝は四時前既に起き出て、御飯ごしらへから、洗濯、と母としての務にいそしむのであつたが、七人の子供の着物のつくろひ、乳呑兒のおむつの洗濯は、夏から秋へ、秋から冬へと加はる、寒氣と共に其の勞苦も増して行つたのである。

獲物に集る蟻の様に、飯台を圍む子供達が、お茶と言ふ、御飯と言ふ、泣く笑ふ、戰場の様にわめいて、他人から見れば、親でもと思はれる程であるのに、芳子さんは決して子供達を、無闇に叱る事もなく、親鳥の雛を育てる様に、強く大きな愛の翼に七人の子供をしかと抱きしめて、育てるのであつた。

「お父さんは、今戰地で苦勞されてゐますよ、食べ物など、やけは言はれません、何でもがまんしませう。」

と言ふ母の言葉は子供達にも充分解るのであつた。

「お母ちゃん、僕等今日は粗食日にするよ、お漬物で結構だよ。」

と言ひ出す事も度々であつた。こんな言葉が子供達の口から出される毎に、芳子さんは母として、罪ある如く、子供達に感謝するのであつた。

夜は夜で十二時は常で、洋服、靴下のつくろひから、冬への用意にと、或は又、赤ん坊の晴着もお正月迄には一枚でもと、子に對する母の愛情は、一時二時迄も、芳子さんを起して置くことは珍らしくなかつた。

短い夏の夜など、宵から朝へと續くこともあつた。一日中働き續けて、子供達が寢床に入つた頃、ほつと一日の重荷が降りたかの様に、運ぶ針の手を止めて、靜かな夜に響く子供達の健か

な寢息を聞くことが何よりの慰めであり、樂しみであつた。
木枯が吹いて、寒い冬の夜など針の手を休めて、じつと見つめる、芳子さんの手には、大きく赤い口をあけて、血のにじんでゐる事が常であつた。
かうした自分の手を見つめる時、戰地の夫を思ひ、子供を思ふ時、きつとかみしめる口びるにも、かたい決意はあらはれてゐた。
父を思ふ子供の心。
夫からの便りがある度に芳子さんは、子供達にも讀み聞かせて、母子は共に父の健在を祈つたのである。十三年のお正月も近づいた師走の或晩であつた、いつもの如く芳子さんは裁縫に余念がなかつた時突然次男の健君が、大聲に泣き出した。
「健どうした、兄さんとけんかしたのかね。」
と母にゆりうごかされて、
「いや、ちがふ、僕、お正月にお父さんが歸つて來た夢を見て、急にお父さんに會ひ度くて、悲しくなつた。」と言はれて、胸の迫る思ひに母は思はず我が子を抱きしめて涙を流したこともあつた。
こうして夫の出征以來二度目の夏も訪れる樣になつたが、芳子さんの身邊にはいつも春風の吹

いてゐる如く朗かに働き續けたのである。
銃後の務を全ふす。
家事に忙殺され乍ら、出征軍人の見送り、白衣の勇士の出迎へ、武運長久祈願等目まぐるしい程多忙の國防婦人會の務を、ほとんど欠さない芳子さんであつた。
「胸に國防脊中に赤子。」何にか婦人會の務めのある度に、話題に上るのも芳子さんであつた。
「まあ、岡崎さん、赤ちやん負ふてたまりませんね、今日は私達が代理して來ますから、ちつとお休み下さい。」と汗だく〳〵の芳子さんに見かねた人達の言葉にも、
「いえ〳〵、あなた方にこそ、御迷惑をお掛けしてすみません。主人も御蔭樣で達者で御奉公さして戴いてゐますから、此上長く御奉公さして戴かんとなりませんので。」
と何の不平も、不滿もなく先にたつて歩くのであつた。こうした時にはいつも脊に赤ん坊を負つてゐるのである。
又芳子さんは時々、赤ん坊を負ひ、一人の子供の手を引いて、衛戍病院をたづね、白衣の勇士の着物の洗濯をされた、其の時は赤ん坊や、一人の子供は、兵隊さんがあやしてくれるので、芳子さんは人一倍働いた。實に銃後婦人の亀鑑として余り有り、聞く者をして涙を催さしめるものである。

夫の戰友を尾川村に弔ふ。

それは十三年八月も半であつた。

「今度自分達の戰友も多く故國に歸ることになつた。然し自分は部隊長から「君は体も健全だし、家庭の方も都合がつく樣だから、もう少し居殘つてゐてもらいたい。」と言はれるし、自分としても此上長く御奉公の出來ることは願つてもない事だから、此度は歸らないが、一つ殘念な事は、一人の戰友を失つた事だ、その戰友の葬儀が高岡郡尾川村で行はれる相だから、お前が代つて葬儀に參列してもらひたい。此の金は自分の小使の一部だ何にか戰友の靈前に供へてもらひたい。」と言ふ意味の手紙を送られた。早速芳子さんは、

「子供達も皆んな元氣です、一日も長く御奉公の出來ることは何よりです、家の事は御心配なく充分働いて下さい。」と子供の寫眞にそへて送つた。

そして夫の戰友の葬儀にはいつもの如く彰夫さんを脊中に、はるばる尾川村に英靈を弔つたのであつた。

夫の願であるにしても、尾川村迄の道は、然も炎天下、かなりの苦痛であつたに違ひない。さぞかし、地下の戰友も、夫の友情にもまして芳子さんの眞心の程に感激したことであらう。

神の心に通ふ人。

町内の祈願參拜は勿論、一日、十五日の兩日は、毎月八幡樣に乳呑兒と共に御通夜に行つた。

「お母ちやんは、父ちやんや、みんなの兵隊さんの爲に今夜は神樣へ御詣りに行くから仲良く寢なさいよ。」

と言ひ聞かせ、子供達の寢靜るのをまつて家を出たのである。

そしてほとんど夜通し、神の前に夫の武運長久、皇軍の戰捷を祈り續けたのである。

「よくもまあ休が續くことよ」と芳子さんの身を案ずる程であつたが、芳子さんの眞心を神も知ろし召してか、風邪も引かなかつた。こうした芳子さんの眞心は戰地の人達の上にだけでなく學校の生徒に迄注がれたのであつた。

十三年も十一月の始め、學校でも明日は六年生が縣外旅行と言ふので喜びにあふれ、講堂に集つて先生から明日の注意を聞いてゐた。突然そこに芳子さんが來て、

「先生これは介良の巖谷さんのお守です、內の雅夫も今度御厄介になるのですが、皆さんがどうぞ御無事でお歸る樣に、昨日お願をこめて御守をうけて來ましたから、生徒さんに一休づゝどうぞ……。」と百數十休のお守を差出され、先生も生徒も、感激に打たれたのである。

十市の金比羅樣、七つ淵樣、巖谷樣と、ありとある神々に、日曜日など子供を引つれて武運長久を祈られたのである。

此の芳子さんの眞心は神に通じ、戰地の夫も、出征以來既に一年有半、至極健在にて御奉公に勵みつつあるとのこと

目に見へぬ神の心に通ふこそ
人の心のまことなりけれ。

常に乳呑兒と共に七人の子供の母として、銃後の婦人として、出征軍人の妻として、涙ぐましき活躍を續けられつゝある心こそ、神の心に通ふ眞の心であらう。

◎ 此の眞實(マコト)銃後にありて動かずば
大和島根の國はゆるがじ。

現住所　高知市田淵町一丁目
氏　名　岡崎芳子
生年月日　明治三八年五月一〇日
職　業　無職

七、よし俺が引き受けた

農人町堀川の渡し場の物かげに打ち沈んだ二人の男女がある、まだ人通りとてないこの早朝、何か深い事情がありさうである。

偶然此處に來かゝつた藤田竹吉氏は二人の語らひに心を止めた。

「……もうかうなつたからには死ぬより外に道はない……。」

死の語らひである事を察知した藤田氏は、そのまゝ見過ごす事は出來なかつた。

「立ち聞きして甚だすまないが……聞けば仲々仔細のある樣子、私もこゝに來かゝつたからには乘てゝはおけない、かまはなかつたら事情を明かしてくれないか。」

突然思ひがけない人の出現に驚いた二人は、靑ざめた顏を力なく沈めて語らうともしない。

「出來る事なら力にもならうが……。」

藤田氏の誠意に動かされた二人の語る所は次の樣である。

この男は山村鄕太郎（假名）と云つて發動機船の機關士として太洋丸（假名）に乘組んでゐる船

員であるが、鰯を積んで朝鮮へ向ふ途中下關へ寄港した時、召集の電報を受け取つた。

船乘稼業の常として何の蓄へも用意もなかつた、併し入隊の日は既に接迫して居り今は一刻の猶豫も許されない、彼は船主である船長より高知へ歸る迄の旅費を借つて急ぎ出發した。昭和十二年八月〇〇日である。彼の入隊地は善通寺である、高知迄は歸つたものゝ郷里に歸る時日も既になく、旅費もなければ、親兄弟に別れを告げる事すら出來なかつた。併し現在の彼には善通寺に到る旅費をどうして得べきかに苦しみ、他の何事をも考へる暇は無かつた。

高知には彼の遠縁に當る叔母唯一人在るも、その日〳〵を漸く糊塗するこの叔母に旅費の相談の出來やう筈もなかつた。彼は意を決して船主の家に到り旅費の貸與を願つた、けれ共何故か妻女はこれを拒絶した、明朝の入隊、心は焦れども旅費の工面は出來なかつた途方に暮れ焦悴の彼はその夜はどこにどうしたか、既に入隊の期限は切れた、旅費はなし、遂に死を決した彼は最後の別れをこの叔母の許に告げたのであつた。

事情を聽いた藤田氏の義心はむら〳〵と湧いた。

「よし俺が引き受けた。」

氏は二人をつれて再び船主の家に到りその妻女に旅費と若干の金の貸與を交渉した、

然るに前と同じく

「これ迄に色々迷惑をうけてゐる事もあるし、それに主人も留守であり、又目下手許には金もありませんので……。」

とすげなく拒絶され、憤然とした藤田氏は

「よし、それでは俺が拾つてやらう、捨てた命だと思つて俺の子になれ。」

と自宅につれ歸つた。

當時藤田氏は自己所有の帆船を積荷と共に沈沒さして莫大な損害を蒙り、其の上、身は四十余日間病床に苦しみ、此の頃漸く醫師より朝夕の散歩を許され、今朝偶ま、この渡船場に來合せたものであるが重なる不幸災難に經濟的にも可成り苦痛を感じないでもなかつたけれ共、義の前には自己を顧みる余裕はなかつた。

早速赤飯の準備をすると共に酒肴の用意を命じ、服裝を調へてやり、身は病後保養中に在りながら自動車を飛ばして憲兵隊に出頭、事情を具申して失期の手續を執り入隊の許可を願つた。

これを知つた隣家の人々も藤田氏の義俠に大いに感激すると共に寄り集まつて盛大に彼を送り激勵した。

彼は藤田氏を心から「お父さん。」と呼んだ。

さうして感謝の涙の中に一死報國を誓つて勇躍出發した。

この藤田氏の義舉はまことに銃後日本國民の意氣を代表したものといふべきである。

現住所　高知市若松町八九番地
氏名　藤田竹吉
生年月日　明治二十一年十月二日
職業　船員

八、豆腐賣りの少女

お父ちやん、お寒くなりました。御元氣ですか。内もお祖母ちやんもお母ちやんも皆元氣です。私も朝早くから手傳をして、喜以ちやんと仲よく學校に通つてゐます。幸子も大きくなりました。

お父ちやんが居た時よりもお豆腐もよけい賣れ出しましたから、内の事は心配するにおよびません、どうぞ人に負けぬ様に手柄を立てゝ下さいお願致します。

淑子より

父上様

塹壕の中、ぼの暗い灯の下で、國に遺した愛兒からのこんな手紙を受取つた親を御想像下さい。僅か十三歳の少女にしてこれだ。銃後にある親が、妻が、すべての國民が此の一つ心であればこそ、日本の軍人は。安んじて身命を捧げ得るのではなからうか。

昭和十二年八月上旬、突如下された召集令に、國内は引き締つた。國民の熱血はたぎつた。國防献金、兵器献納等各人其の分に應じて赤誠こめた献金はなされ、多くの美談は世人を感動せしめた。この手紙の主、當時江ノ口小學校六年生高橋淑子も亦其の一人で、隣に住む同級生寶千代子と圖り、淑子の母から教はつた七夕様のお飾りを作つて、街の家々を賣り歩き、得た金を聯隊區司令部に献納したのであつた。

事變は愈々擴大した。淑子の父親某病院に車夫を勤めてゐる虎之助も、遂に應召した。

卒業を數ケ月後に控えた少年少女の憧れの的である上級學校への入學—試驗に通りさへすればと言ふ親達の言葉に勵まされて、受驗勉强に餘念のない彼女であつた。

「お父様が居なされば、どうにか女學校へも行かれますが、お父様が出征なされたから、お氣の毒ですが試驗を受けるのは止めなさい。」

宣告する母、宣告される淑子。眼前に迫る入學試驗。

「はい。」總ては知り盡してゐる彼女だ。やつと只一言だけさう言つて母親に心配をかけまいと返事はしたものゝこみ上げてくる涙ー耐えかねて隣の部屋へ行つて、机に泣き伏し忍び泣きに泣くのであつた。

「お父様が居なくても女學校へ行かれるお友達が羨ましい。折角今迄樂しみにして勉强してゐたのにー。」淑子は惱んだ。そして遂に或る決心をした。そして或る日。

「お母さん。私を女學校へやつて下さい。その代り私は一生懸命働きます。」お豆腐は私が配ります。朝はお母様やお祖母様と一しよに起きてーそして、今よりよけいお豆腐が賣れるやうにします。それでーそれでどうぞ女學校へ行かせて下さい。お母様お祖母様。」涙と共に哀願する淑子を見て、もとより可愛いゝ娘の、孫の事である。

「淑子があんなに言ふのだから、やれる所までやらせて見やう。」と相談一決。その時の淑子の喜び！翌朝から淑子は祖母と母とが作つた豆腐をー前から祖母と母とは內職にしてゐたー乳母車に積んで、お得意へ配達して歩いた。

受驗期は迫つた。折角の娘の希望を挫いては可愛想だと、母も自ら配達すべく自轉車を仕入れて稽古をはじめた。淑子も、母にさせてはすまないと、一心に稽古してすぐ乘れる樣になつた。

此の眞劍な一家の姿を見て、出征軍人の家族ではあり、傳へ聞く人々の同情も加はつて、父の居ぬ前と大した家計上には變化はなかつた。

淑子も望叶つて高坂高等女學校に入學する事が出來た。

聖戰幾閱月、武勳輝く聯隊旗と共に、父も無事第一次歸還、間もなく召集解除となつた。けれども淑子は相變らず自轉車のベルの音を未明の街頭に響かせながら豆腐の配達を續けてゐる。

現住所	高知市愛宕町一丁目一三一番地
氏名	高橋淑子
生年月日	大正十四年十月十七日生
職業	無職

あゝサイレンだ、火事はどこだらういつもの山崎（國雄）さんが知らせてくれたのだ。

町内切つての眞面目者であり、責任觀念の強い山崎さんはこの事變のため、昭和十二年〇月〇〇日名譽の應召となつたのである。

「火事の時にはどうしやう。」

「消防自動車は誰が運轉するのだらう。」

「あんなよい方は珍らしいのに。」

とは、町組合皆の者達の話題であつた。

× × × ×

往々にして困窮を理由に保護や救護を受けるのを、さも當然かの樣に誤解さる向のある世の中に、我が山崎さん一家こそ、不撓不屈、徒らに救護機關に頼ることなき、立派な心掛の方だと思ふ。

山崎さんのお家は旭町二丁目といふから市では先づ西の果である。冬はうどん屋、夏は氷屋さんといふ、ささやかなお店である。一家揃つて實直に働くので、お店は段々繁昌してゐたが、奥さんの茂代さんは三年越の入院生活、長女嘉子さんは入院後本年應召前死亡次男昌平君も長らくの病院

生活、なほその上既に他界されたお父さんの事業の後仕末など、次から次への打續く御災厄、御不幸のために、其の日常はお氣毒な經濟狀態であつた。近所の者達はこの有樣を見て、

「あれ程働くのに可愛想だ。」

と、心から同情するのであつた。

× × ×

應召〇月〇〇日、令狀を手にされた山崎さんは、

『お母さん僕が行くことを茂代にはいはないでね。』

かういはれたさうである。當時妻の茂代さんはとてもの重態であり、意識さへ明瞭を欠いでゐられたのであり、この期に大きな衝動を與へたくないとの、やさしい心遣であつた。

妻に對する細やかな心情に、お母さんは心から泣かされたものであつた。茂代さんはお母さん光衛さんの育ての愛兒であり、夫の國雄さんはこの御養子として來られた方なのである。

わけても思ひやられるのは、應召出發の前夜、病院一室の看護が生死の最期となつたとは。

應召後十一日目になくなられた妻の茂代さん、今ぞ草場のかげで、生前やさしかりし夫國雄さんの武運長久をお祈りしてゐる事であらう。

前夜の別れは其ればかりでなく、腹膜の重態であつた次男昌平君の手をとつて、

『早くよくなるんだよ。』

と、いたはる様に、祈るかの様に頬ずりした山崎さんの眼には男涙が宿つてゐた。

二ヶ月前に長女を失つた事でもあり、格別に子煩悩な山崎さんは昌平君を目に入れてもいたくない程であつた。

× × ×

赤襷の姿も勇しく驛頭に立つた山崎さん、そこには三年生の長男誠一君とお母さんの二人、愛妻と次男は病院に、長女は地下に眠つて姿を見せないのである。見送人の方々は、

『國雄さん内の事は心配しなよ。』

『昌平さんもいまにきつとよくなりますよ。』

『御心配なく、』かう心から呼びかけるのであつた。

物堅い山崎さんの眼には、感謝の涙が光つてゐる。やがて出發の汽笛一聲天神山にこだますれば

『山崎君万才〳〵〳〵。』

旗の波、歡呼の聲に車中の山崎さんは元氣よく、舉手の禮、

『いつて參ります。』

と力強く御挨拶をされた。見送るお母さんの眼、誠一君の打振る國旗。見送る母と子、涙こそ見せないにせよ、其處は複雜した感情の交錯であつたのであらう。私達は今まで幾度かお見送りの驛に立つたのに、これ程強い感激の場面にあつた事がなかつた。

× × ×

應召後お母さんの奮闘は町内での評判であつた。殆ど滿足に眠る暇などはない程であらう。

『まことに働く人だ。』

『あれ程無理をしてかまはないかしら。』

こんなに言はれる程、文字通り一生懸命に働き續けるのであつた。

× × ×

應召後十一日目の二十九日夕陽の沈む頃、妻の茂代さんは眠るかの様に、お母様の手と、近親の者の手を夫國雄さんと信じながら他界されたのであつた。

永年の病人續きに加へ、柱とも頼む國雄さんの應召でこの一家の生活はとても〳〵容易ではなかつた。軍事援護會では金五十圓を以て、この母、光衛さんを訪ねたのであつた。するとお母さんの光衛さんは、

『まことにありがたう御座います、お志は死んでもお忘れ致しませんが、どうもいたゞかれませんので。』

『いやこれは援護會の方からですから、御遠慮や御心配は入りませんよ。』

と援護會の方は親切に附け加へられたのであつた。

すると光衛さんは、

『御同情はまことに忝なうございます。實は國雄が出發の日、『お母さん石にかじりついても人樣に御厄介をおかけしない樣に、世の中にはもつと〳〵困つてゐられる方があるから、給與などは他の方に廻してやりなさいよ。』『たとへ店の道具は一切賣り拂つてもね。もし私が生きて歸へつたら素より、戰死しても、やがて誠一がきつとお母さんの行末は見ますから。』かういはれてゐますので。』

『やせ我慢の樣で恐れ入りますが。』

かういはれながら、ワツト聲を上げて泣かれた想である。これこそ母、子、孫の間につながる信頼の純情と援護會の同情に對する感謝と感激の表はれである。

× × × ×

出發後早や四ケ月の昨日（九月〇日）山崎さんのお内を訪ねて見ると、いつもの通りせつせと働いていられたお母さんは、愛想よく私を迎へ、如何にも嬉しさうに、

『先生、出征してゐる國雄からこれを送つて來ましてね。』

といはれながらお手紙にそへ十圓の爲替を見せられたのであつた。

聞けば今まで茂代さんや、嘉子さんの御位牌にお祭りしてあつた想である。

あゝ、何といふ優しいお母樣であらう。私は餘りの感激に『國雄さん!!』かういつて急に胸がふさがつて失つた。ふと見上げた光衛さんの眼からはとめどもなく涙が落ちてゐるのであつた。

× × × ×

其の歸途私は援護會の某氏にお目にかゝつた節、山崎一家の寫眞も戰地に送つたのだが、よし奥さんの姿は見えないにしても、元氣をとり戻したあの昌平君の姿を見たら、山崎も餘程なぐさめられる事だらうと言はれてゐた。

× × × ×

附記

其の後この哀れな一家に對して山崎さんと同鄕の御出身で、市本丁筋に醫院を開かれてゐる高橋一男氏は敢然立つて、

『昌平君の病氣は僕が快して上げませう。』

應召軍人に心配をかけては銃後を護る者の不名譽だ、と醫師の本然的使命に立たれて、醫療費は素より、献身的な活動をなされたのであつた。其のかひがあつて、あれ程の衰弱と重態であつた昌平君は今はピチ〳〵と元氣に遊んでゐる。

光衛さんは常に高橋先生は私達の命の神様だと語られてゐる。

現住所　高知市旭町二丁目

氏　名　山崎　國雄

生年月日　明治三十九年十一月八日

長男　〃　誠一　十一才

次男　昌平　七才

母　光衛　四十二才

妻　茂代　死亡

長女　嘉子　死亡

職業　商業

十、八十四歳の愛國婆さん

京町の中西珊瑚屋に愛國婆さんで知られた久さんがある。久さんは昭和八年將に八十才にとどかうとする高齢で、珊瑚の行商してたゞ一人で朝鮮北海道から、遠く滿洲支那にまで赴き、皇軍の苦勞を見聞して、其の利金壹百圓を滿蒙の地に活躍中の皇軍將兵の爲にと献金した。

又翌九年には、慰問品として手拭二百五十筋、キヤラメル二百五十箱を献じ、後、また金參拾圓を献金し愛國婆さんで知られるやうになつた。

今次事變の起るや、報國の至誠を以て夜も寢ずに自ら白木綿を縫うて、褌六十三枚を仕立て、之に經節一貫七百目と、珊瑚華三百袋（價格四十五圓）といふ第一線勇士をして感泣せしめるに足る思ひ遣りの品々を献納した。又、金光教會の手を經て、美人繪入のマッチ八百余個を送り、昭和十三年三月には金五十圓をも献金した。その他各種婦人會へも寄附し、國防婦人會では最年長者として、八十四才とは見えぬ元氣さで活動してゐるといふ。同家を訪ふと家族の方は

『至つて元氣で、若い時からの珊瑚行商をしてはその利益を献金してゐますが、私達は殆ど知りません。』といふ。愛國婆さんに面會を求めると、本當より二十才は若く見える髮鬘さで、

「そんなに問はれますと困りますが、私は自分で働いて勝手にやつてゐますから家の者も知りますまい。」と、文字は讀めないが、家の者にも渡さないといふ秘藏の、裏打はしてあるがぼろ〳〵になつてゐる新聞の切抜や、領收證を出してぽつ〳〵と語る。

「私は平素小遣も節約し、自分で働いて集めた金を少しでもと思つてお國の爲に出してゐます。いつかラヂオで機關銃を拭く布もなく、褌で拭いたといふ事をきいたり、泥水で褌を洗つてゐる寫眞を見て、軍人さんの苦勞を思つて手拭や褌を送りました。一三年前あの滿洲から支那を見て來た私は、軍人さんの苦勞が身にしみ、(少しでも長い褌をと)心をこめて夜もねずに縫ひましたよ。

私の生れは多度津ですが、もう七十年にもなりませうか、高知に來ましたのは。今の珊瑚屋をはじめたのは明治十年と覺えて居ります。若い時から金光樣を信じ、今でも毎朝五時に起きてお參りして兵隊さんの武運長久を祈つてゐます。おかげで私も大元氣で、旅行が何より好きで冬は台灣夏は北海道と、もう五六回も行きました。また先程申したやうに滿洲から支那の方へも行つて兵隊さんの爲にもつくして來ました。

子供等にも、わしに孝行しようと思ふなら氣まゝに旅をさしてくれと言つてゐます。まだ〳〵お國の爲に盡さねばならぬと思つてゐます。」

と、血色の好い顏を電燈に光らせて語られた。

現住所　高知市京町三十五番地
氏名　中西久
生年月日　安政二年十二月廿一日生
職業　珊瑚商

十一、至誠一貫

天地寂然として鷄鳴未だ曉を告げず、人々は猶ほ安き眠りにある時、凜烈たる寒風に曝されながら點々として鎭守の森に急ぐ男女青年の一群がある。それは事變勃發以來皇軍の戰勝と、出征將兵の武運長久を祈る殊勝なる初月男女青年團の一隊である。毎週二回の早朝祈願、それは雨が降らうが風が吹こうが、晴雨寒暑を論ぜず、いまだ一度もかゝした事はない。

然るにこの若き男女の一群の中に頭丈髪鑠の一老人が交じつてゐる。青年團の參拜の都度影の形に添ふ如くこれ又一度も休んだ事がない。此の老人こそ誰れあらう嘗て初月村長として令名を馳せ、二十年近くも勤續して自治の爲め、多大の功績を遺された志和壽之助翁其の人である。翁齢今や七十に垂んとするも心氣益々旺んで、全く壯者を凌ぐものがある。

翁は今次事變の勃發するや縣下他町村に先んじて、軍事援護會を組織し、選ばれて其の長となり日夜東奔西走、銃後の護りに任じて殆んど寧日なく、或は傷病兵の慰問に、或は出征軍人留守宅見舞に、將又武運長久戰捷祈願に或は出征將兵の歡送に、又歸還兵の歡迎に殆んど寸暇なき有樣である、翁嘗て笑つて曰く「浪人暇なし」と。

又翁は獨り軍事援護會長のみでなく、其の他にも或は初月自治會長、小學校後援會長、初月軍友會長、初月產業組合長等の要職にある外、尙町總代方面委員をかねる等、數多の公職をおび殆んど一身一家を顧るの暇とてはないが、聊かも憂ふるの樣子も無く、自ら進んで公事に盡瘁し未だ嘗て退嬰的弱音を吐いたことなく、その意氣益々旺んに孜々として毫も倦むことを知らないものゝやうである。

隣人皆翁の風格を望んで感奮興起し何事によらず翁を以て長老先輩と推す、まことに故あるかな

偶々翁の家を訪ふと玄關見付けに「至誠一貫」と書せる扁額のかゝつてゐるのを見る、蓋し翁の風格を察するに足るではないか。

現住所　高知市西久万二一三
氏名　志和壽之助
生年月日　明治四年一月十日
職業

十二、產婆報國

在鄕軍人某氏は此度名譽の應召を受け〇〇部隊に屬し勇躍聖戰の途に上つたのであるが、氏の心に殘るは家計不如意の中にあり幼兒を抱き加へて目下懷姙中の妻子の事であつた。暴支膺懲の鉾をとりて正義の前に堂々と進軍する皇軍勇士に少しでも家庭の心配をさせては銃後國民として申譯がないと考へ、この一家を慰め暖かい救ひの手をさしのべ職業報公の誠をさゝげた產婆さんがある。

小西かなゑさんは今次事變勃發するや、縣產婆會軍事援護の主旨を体し職業報國を爲すは今だと常に姙產婦擁護に獻身的努力を續け、出征妻女の出產に對しては遠近を問はずよろこんで奉仕し感謝せられてゐたのであるが、某氏の出征を知つて時々訪問して妻女を慰め勇氣づけてゐたのであつた。やがて月滿ち分娩に際しては全く親身も及ばぬ世話をなし、其の上材料其他總て無料にて奉仕したのである。其後これに對し知事より受けし材料代金四圓也を其のまゝ產家に祝儀として贈つた。產婦は女史の奇篤に涙を流して喜んだのである。

やがて中支の野に赫々の武勳をたてゝ歡呼の嵐に迎へられて歸宅せる某氏は、露營の夢の間も案じてゐた妻女が、いとし子を抱いて迎へた姿を見、小西さんの誠心をきゝ、感謝感激の涙を禁じ得なかつた。

國家總力戰下にあつてかなゑさんの如きは職業報國を爲し得た感ずべき日本女性の鑑である。

現住所　高知市筆山町三四番地
氏名　小西かなゑ
生年月日　明治二十八年一日九日
職業　產婆

十三、この純情、この熱血

併合以來二十八ヶ年、その間朝鮮の民度、民情は飛躍的な向上をなし、內鮮一体の實は上り、今や半島には彼等の待望久しかつた志願兵制度は施行され、學制の改革をも見るに到つた事はまことに喜びに堪えない。

半島同胞は「我等は帝國臣民である。」と言ふ光榮を力强く自覺し、今時事變に於ては、各種の方面に涙ぐましい愛國運動が展開され、感激の波をまき起してゐる事實は枚擧に遑ない有樣である。就中、本市在住の梁金石君の如きはその代表的のものと言ふべきであらう。

梁金石君は、本年二十五才、全羅北道鎭安郡の片田舍に生れ、去る昭和三年、同地に奉職してゐた高岡郡高岡町金子平次氏に伴はれて來縣したものである。

學力優等の上に親孝行で學校では表彰を受けて居た梁君は來縣すると、金子氏の宅に寄寓し、高岡小學校に學んだ。眞面目に勉强するので難解な日本語もすつかり馴れてしまつて內地人と少しも變らないまでになつて卒業した。その後、同町の角井商店に奉公し、勤勉に務める傍ら寫眞術の研究をはじめた。昭和十年、朝鮮の大出水は、梁君の故郷をも慘鵬の中に追ひこんだ。父母の身を案

じて、歸鮮したが、すつかり日本人になつてしまつた梁君は第二の故郷土佐が忘れられず、再度、來縣して今日にいたつたものである。

事變勃發は、多情多感な梁君を動かさずには居なかつた。暴支膺懲の聲に、半島人でも皇國を思ふ心に變りはないと、いち早く『半島人献金芳名帳』を作つて、半島人間に回送した。在高半島人も同君の擧に贊同直ちに、金六圓也が集つたので早速献金の手續をとり、愛國運動の先陣に乘り出したのである。

十二年九月〇〇日、殘暑の鋪裝道路をラッパの音も曉々と軍靴の音も高らかに出征する一部隊があつた。上海未だ落ちず、市民は道路の兩側に堵列して、萬歳の歡呼を以て見送つた。梁君も勿論見送りの一人であつた。

勇士の列は近づいた。梁君は勇士の隊列に飛びこんだ。そして、

『吾々半島人になり代つて倍の働きをして下さい。』

『私の身代りに從軍させて下さい。』

と絶叫しつゝ、すばやく

『センショウヲイノル半島人梁金石』

と愛國の熱血もたつぷりと血書した血染の日章旗二十三枚を順々に配つた。勇士達は勿論、見送り

の人々も同君の姿を見やつて今更のやうに深い感激を覺えずにはゐられなかつた。

朝鮮人志願制度實施に當つては、眞先に志願し、戰線への出動を奬願したのも同君であつた。しかし願意は聞き屆けられず、この上は銃後に於て一層の御奉公をと念じ、國民精神總動員運動に則り、十ケ條よりなる半島人の自肅文を印刷し、縣下三千名の同胞に送り、自重を促したのである。

印刷に要した費用は勿論自辨である。自肅文の內容は次の通りのもので、同君の誠意を窺ふに充分である。

一、吾々は大日本帝國臣民たることを忘れてはならない。

二、毎朝、顏を洗つたら必ず宮城を遙拜しませう。

三、國旗日には必ず國旗を出しませう。

四、何か社會によい事をしませう。

五、腹が立つたら、今一度とく考へて見ませう。

五、酒を飲んだり、みだりに風紀をみださぬ樣になりませう。

七、人によくして貰ひたく思つたら、自分から心をよくして行きませう。

八、兵隊さんの見送り、出迎へは出來るだけ、繰合せて出る樣にしませう。

九、戰死した勇士の葬式に出會つたら、心から默禱を捧げませう。

十〇、長期抗戰であります。兵隊さんに心おきなく、働いて貰ふためには我々の心一つです。眞面目に働いて少しでも國防獻金を致しませう。そして內鮮人の差別なく一丸となつて當りませう。

更に今一つ梁君の本領を遺憾なく物語る一挿話を記すことにしたい。

同君が一時市內の某履物商店に奉公して居た事がある。その經驗から往來で鼻緒を切らして困難してゐる人の多い事を思ひ、外出の時は、自家製布片の鼻緒をいつもポケットに用意して居り、そんな人に出會つたら無料で進呈する事を樂しみとしてゐた。

同君のこの親切、奇篤な行爲に感謝する者は永い間には相當の數に上つたのであるが、去る四月中島町でこの厚意を受けた一女性から左の手紙と金二圓の爲替が屆けられた。

同君は、この金を私用するに忍びないとしてすぐさま、聯隊區司令部に持參して獻金したのである。この事は、新聞にも「美談が生んだ軍國美談」「鼻緒が結ぶ內鮮融和」のみ出しの下に紹介された。

その文面には、

突然お手紙を差し上げる失禮をお許し下さいませ。私は今年四月、貴下樣から下駄の鼻緒をいたゞいた女でございます。

先日ふと高知新聞に貴方樣の寫眞がでて居りましてあの時の貴方であることがはつきりわかりました。そして貴方樣が半島人である事に尙更驚かされました。そして貴方樣の祠の樣なお心がはつきりわかりました。同封した爲替は極く僅かですがお國元のお母樣に何か買つて送つて下さい。それからこの上とも益々內鮮融和の爲お盡し下さる樣お願ひいたします。

と、水菫の跡うるはしく書き記されてあつた。

この一事を見ても梁君の麗はしくも尊い心根が、單に事變に對するものゝみでない事がわかると思ふ。

まだこの外に君の直接或は關接に關係した銃後美談は多い。まことに至純、熱血の愛國青年と呼ぶも過賞ではあるまい。

氏名　梁　金　石

現住所　朝鮮全羅北道鎭安郡鎭安面下里出身
　　高知市大膳樣町六一番地居住

職業　寫眞業（二十五才）

十四、半島人の熱血

支那事變勃發と共に、朝鮮同胞の時局に關する協力は涙ぐましいものがあるが、こゝに美談の一として白南龍さんの献金がある。

昭和十三年二月のこと

私は朝鮮人白南龍と申す者です。今の事變に献金いたします。先日朝鮮人でも志願して兵隊になれるやうですが、年をとり過ぎて御奉公もできませんので、少くありますが金五圓を、軍事援護會へ寄附します。何卒宜しく願ひます。

といふ、つたないながらも心のこもつた手紙に、金五圓を添へて軍事援護會へ出して人々を感動させた。

氏名　白南龍
本籍　朝鮮慶南國城郡上里面
現住所　高知市丑之助町三十八番地

十五、國防石鹸

「此の石鹸はまことによく垢がおちるのーし。」

「まこと、あの石鹸は中の心の所まで柔かくてよく泡になるのーし。」

これは西桑泉寺町西谷邊の井戸端會談に聞かれる言葉である。この石鹸には森岡春惠さんの報國美談がひそんでゐる。

森岡さんは、平素何によらずよく世話の出來る方で、附近の人からは非常に大切がられてゐたが、今回の事變勃發と共に女史の精神は益々發揮せられた。御主人は目下西山合名會社に勤めてゐられるが、二男三女の御子樣でそれ〴〵高等及中等の教育をも施し、經濟的にも又精神的にも、相當苦勞の多い奥樣と思はれる。普通の人なら國家の事など思ふ暇は無ささうである。女史は寸暇を利用し附近の田に芹を採り之を市に出して賣る事をはじめた。（此の仕事には竹内由子さん西本琴亀さんなど陰に助力せられた方がある）度重なる内に若干の資金が集まつたので、此の金で洗濯石鹸を買入れた。之れを近隣の人に賣り其の利益金を以て同地婦人會の資金又は献金に當てゝゐる。其の石鹸の良質と森岡さんの精神とに感じ附近婦人會員の援助もあつて、よく賣れてゐる。

森岡さんの近隣に池本さんと言つて七十才近くの老父を殘して出征せられた方がある。男子ばかりの家庭で万事不自由勝であるのを、常に立廻り母代りとなつて面倒を見てゐる。

又森岡さんの家には、献金箱が造られてある。家族は誰彼の區別なく、外出に際しても路傍に捨てられた、古金類は小さな釘切れに至るまで拾つて歸り箱に入れる。一定の量に達すれば金に代へ婦人會に納める。實に注意周到で、私利を貪らず献身的に盡してゐられる。又御主人も公共の爲なら勞力を惜しまぬ人で、一家揃つての奉公精神には附近の人誰も感動せぬは無い。

氏名　森岡春惠

住所　西奈泉寺町二〇

生年月日　明治三十年四月十一日生

十六、司令官を感激せしめた義僕

歐米の個人主義、自由主義の影響により、自己の利益のために、自己の安樂の爲に、たゞ己に〳〵と傾かんとしつゝある現在に於て、他の爲に己を棄てゝ努力しやうとする奉公の精神は非常時局下に於て最も必要な事でなければならない。日本全國民がこぞつて他の爲に〳〵と奉公の誠を競ふ事こそ、我が國古來の美しき傳統を生かす所以であり皇國の發展を助長する一つの道であらねばならない。

主を戰場に送り、主家の家業を一手に引きうけ奮闘努力遂に奈閑官を感激せしめた義僕坂本登君は、現に鹽屋町小原良太郎氏方の僕となり忠實に仕へ、かたはら青年學校に通ひ研究科一年生として修養に勉めてゐる。

小原氏は後事を坂本君に托して昨夏勇躍征途に上つた。君なくして三町の田地は、女子供の手でどうする事も出來なかつた。責任感の強い君は主を皇國の爲に盡させるには後顧の憂をなからしめなければならぬ。己を棄てゝ如何なる困難に遇はうとも、どこまでもやり通さう。今迄の數倍働いて報恩の誠を捧げるが己の非常時下に於ける務である、これがやがて皇國につくす所以であると堅

く決心した君は、朝は星を戴いて起き、夕は月を踏んで歸る、全く死闘そのものであつた。假さへあれば車を引いて市中に肥取りにと出掛け、仕事の少しの合間にも野菜の手入を忘れない。こうした文字通りの勞働に家人は涙を流さんばかりに感謝してゐる。隣人も『よくも、まあ体が續くことだ。』と其の精勵振りに感動しないものはない。

又青年學校教官山崎操氏出征するや、あとは女手ばかりにて春のシツケが非常に後れてゐるのを見、君は率先して家事に奉仕せんことを主張し、級友と共に牛六頭を連れて行き一日中に田地總てを鋤き上げて美しい師弟愛を表したのである。

晝間の疲れにもかゝはらず夜青年學校に出ての君は眞面目であり、學科技術共に秀で他生の指導もよく出來る模範生である。防空演習其の他公の爲には進んで出て其責任を果してゐる。

やゝもすれば色々の口實をつくつて公の仕事に對して不平がましい事を言つて身をいとふ青年もあるのであるが、かうした輩に對しても君は實に不言の指導者である。

昨年奈閑に際して司令官殿より、

『出征遺家族の家業を助け後顧の憂なからしむ。』

と賞讃の言葉を戴き表彰されたのも君の至誠の致す所に他ならない。

君は又一家の模樣、作物の出來ばえ等細々と戰地に知らせて主人を安心させる事につとめてゐる。時々家庭や近所に屆けられる小原氏の通信にも坂本君に對する感謝の誠が表れてゐる。

君の如き主の爲に、己をすてゝ盡す青年のあつてこそ銃後の護りは一層強化されて行くのだ。

現住所　高知市塩屋崎町小原良太郎氏僕
氏名　坂本登
生年月日　大正八年五月四日生
安藝郡畑山村出身
高知市潮江青年學校研究科一年生

十七、留守宅美談

高知市東片町栗山鹿さんは僅三疊一間の見るからに陰鬱な借家に、盲目に近い不自由な體で、旭元町のさる酒店に勤めてゐる長男幸雄君、小川淵の某家に奉公中の姉娘芳子さん、播磨屋町某洋品店に勤むる次男正夫君達、我子の仕送りを頼りに一人わびしく餘生を送つてゐたのである。

然るに昨年夏ふとした事から正夫君は、腹膜炎に罹り、病勢は日に募り、一時は重態を傳へられた。然し幸にも日を經るに從ひ次第に快方にむかひ、一家の者は、漸く愁眉を開くに到つた。

折りも折りとて七月七日の蘆溝橋事件に端を發した日支事變は遂に擴大され、愈々暴支膺懲の皇軍を進める事となり、幸雄君は、名譽ある帝國軍人として召集され、勇躍出征したのである。

正夫君は病後の身體、其の上今度の幸雄君の出征に、俄かに働き手を失つた一家は、可弱き乙女芳子さんの細腕によつてやうやく支へられ、時には、其の日の暮らしに事缺ぐ日さへもあつた。

運命の神の徒はこれのみでは止まなかつた。命の綱とも頼む芳子さんは、急性神經リウマチスに侵かされ、見る目も悲慘な姿となりて、我が家に歸へつた。其の後中耳炎をを併發し、一家の者は全く糧の道を斷れたも同然、路頭に迷ふの餘儀なきに立ち到つたのである。

方面委員齋賀美猛氏は、この慘狀を傳へ聞き、直に同家を訪ひて、親しく家族の者を慰め、且軍事援護會の扶助を受くべく奬めた。こゝに初めて救援の手が、同家に及んだのである。

其の後、正夫君も芳子さんも奇蹟的に速に全快し、十月には最早や元通り就職することゝなり鹿さんも、ほつと安堵の胸をなでおろすことが出來たのである。十月の或日、高知街軍事援護會事務所に、正夫君は姿を現はし

『此の度こそは、ほんとに色々と御世話樣になりまして有難う存じました。御陰樣で、私共一家は

救はれました。何とも御禮の申し樣もありません。皆樣の御情で、私もこの通りの体になり、姉も全快し、二人共、元通り就職致しました。就きましては、今後の扶助金の御辭退に上つた次第ですあしからずお願申します。』

との挨拶に係の者は、

『いや〳〵。君の兄さんは、征支の聖戰に惡戰苦鬪、文字通り血みどろの奮戰を續けられてゐます。其の留守宅の御世話を見るのは私共銃後の者の務です。特に思はぬ御病氣で、意外の費も要したでせうし、決して御遠慮なさらぬやうに。』

と引續き受給するやう奬めたが、

『御厚情は誠に有難う存じますが、私等二人で母は養つて行きます。國家非常時に、何時々々までもお世話樣になつては、お上にも濟みませんし、又戰地に働く兄にも申譯がありません。どうか私共に御心配下さらず、そのお金を、お國の爲に、より有意義にお使ひ下さい。』

と。この衷心より溢ふるゝ正夫君の熱誠に、居合した者唯一人として感激せざるなく、遂に其の意志を尊重し、この申し入れを受理したとのことである。

現住所　高知市東片町四一
氏名　栗山正夫

生年月日　大正七年一月十日生
職業　店員

十八、一厘貯金は軍艦に乗つて

社長以下從業員一同の獻金

社名を下川商事株式會社と言ふ。株式といつても一家一族が株主で、水入らずの會社である。

社長は若くて三十才をいくつか越へた腕盛りで、其の上市會議員の公職にある人である。

會社には百名内外の女工さんが働いてゐる。此所の女工さんは市内の各所から、市の附近から通勤してゐるが大低電車やバスに乘る人はない。朝は早く、晩は遲くても歩くのである。

仕事と言ふのが現代國策にふさはしい廢物利用古布利用での敷物の刺繍である。製品はほとんど外國向きであり、一度工場を見る者は、こんな廢物からよくもまあ此の美しい物がと驚かされるであらう。そして此の廢物は年五、六十萬圓から、百萬圓近くの金貨となつて日本へ歸つて來

る。

女工の日給は仕事の分量によつて定められるが、熟練工で一日七八十錢、新米の女工なら、二、三十錢にしかならないと言ふから、此所の女工さんは電車やバスには乘らないのである。

こうした、女工さん達が、若き社長の熱意に動かされて巨額の國防獻金をしたのである。

一厘貯金の動機

昭和六年九月に始つた、滿洲事變は、明けて七年一月二十八日には上海事件となつて、廟巷鎮の三勇士が出で、鄉土の聯隊も旗の波に送られて、燃ゆる愛國の至誠を胸に、上海へと出征した。あの感激も最早七年の昔となつたが、當時今日の支那事變を豫測してか、知らずか、鄉土部隊出征の感激に、強く心に決する所があつて、一厘貯金を始めたのが、若き社長、下川廣海氏であつた。

一日女工を集めて社長は

『私は今回、勇士の征途に上る狀を目擊して、強く心を打たれました。故國を出で立つ勇士の胸中を思ふ時、戰地の勞苦を忍ぶ時、私達も何かお國の爲にと思はさせられたのでした。いつまた起らんとも限らない非常時の爲にも、今日から私達は斷然一日一厘を御國の爲に捧げ樣ではありませんか。』と叫んだのであつた。

社長の言葉に感動された女工さん達も、

『やりませう、わづか一日一厘なら、たいして肩にも掛らないし、それが御國に役立つなら。』

と其の決心の程も固く一厘貯金は始められたのである。そして十日毎に取纒められ貯蓄銀行に積立てられたが、事件もおさまり、平和の春の光がさしそめ樣とした昭和八年、九年と續く内には、一厘貯金も次第に減じて、前途に憂色を豫想せられたが、社長の熱意は初一念をつらぬき通して、どうにか盛り育てられて來た。

一厘貯金は軍艦に乘つて

生れるに易く、育てるに難い一厘貯金も、五才の春を迎へた昭和十二年には、大分肉附も良くなつてどうにか育つと言ふ自信が出來た。

それ迄の育ての勞苦は、人の子の母にもましての惱みはあつた。十二年の春一先づ纒つた物を第一回献金として差出したのである。

たまゝ、十二年四月、郷土の偉人原少將は、陸奥、長門、日向の一等戰艦を引きつれて浦戸港外に、郷土訪問の錨を降して、一般の觀覽を許した。

下川商事會社に於ても、國防思想普及と、銃後婦人覺醒の上からも有意義の事として、女工さん達一同に軍艦の見學をさす事となつた。

然し觀覽者は以外に多く、一時に多くの團体は參觀困難と言ふ狀況であつた。種々社長は考慮の末、司令部の方へ相談した所、事情をくまれ、特別の取計ひで陸奥艦に上艦し、女工さん達も驚きと感激に打たれ乍ら、艦内くまなく見學する事が出來たのである。

此の時社長は艦内の一室に通されて、一將校と色々と話しを交したが、幸か、不幸か、社長は丁度、前に献金した司令部よりの感謝狀と、其の時の手紙等懐中してゐたので、話しのついでに

『私の會社でも、女工達に一日一厘の目標で報國貯金をやつてゐます。第一回の献金を此の通りやつたのですが。』と差出すと、

『こんなのは日本にもめづらしい事だらう、これは乘組員にも、水兵達にも話したい。又他への立派な手本だから、參考の爲に此れをいたゞいて置き度い。』と言つて、感謝狀と手紙を收められた。社長も心ならず承知したが、然し歸りには、わざ〳〵艦の汽艇で女工さんや一同を種崎の棧橋まで送つてくれると言ふ、親切ぶりであつたとの事である。

此の歡待と、軍艦見學の感激は、女工さん達の心に、

『あんな立派な軍艦を造るお金はどこにあるのです、私達も一厘貯金に參加して軍艦の錨の一つでも御國の爲に捧げやう。』と堅い決心と、強い奮發心を呼び起さしめ、一厘貯金の參加者は一層增して、益々拍車を加へらるゝ事となつた。

然かも、同年七月、蘆溝橋の一聲は斷呼膺懲の日支事變となり、長期抗戰下の支那事變となつて、未曾有の非常時は、健氣な女工さん達の美しく、やさしい心を益々、緊張さし、若き社長の熱意も益々燃へて、上海事變以來、七年の長年月にはたつた、一厘の貯金は目下の狀況に鑑み、愈々國防力强化の急を痛感させられて、昭和十三年十月、血みどろ、汗みどろの、報國結晶、二百五十九圓七錢は高知聯隊區司令部に差出されたのであつた。

此の長き年月を一厘貯金に終始した、若き社長の熱意こそ銃後報國の美談と言ふべきであらう。

◎ 長期戰戰の場に立たぬ身も
　心の駒に鞭をわするな。

住所　高知市常盤町
氏名　下川廣海
生年月日　明治三九年八月一五日
職業　下川商事株式會社々長

十九、純情不開（アカズ）の金庫

高知市本與力町竹内喜八氏令嬢富美子（高女二年生）さんと喜美子（尋常六年生）さんの姉妹は、小學校入學前より不開の大型金庫に、日々の小使錢を一錢殘らず蓄へ約十年間位繼續し來り、昨今ではこの金庫に金を入れるのが一つの樂しみとまでなつて來てゐた。

昭和十二年七月七日北京郊外蘆溝橋畔に於ける支那兵の不法射擊を導火線に前古未曾有の支那事變が勃發したのである。この暴支膺懲の聖戰に於ける我が勇猛果敢なる將兵の奮戰振りは日々の新聞紙に、或はラヂオ等により逸早く銃後國民に傳へられてゐる。これ等の報導に接する度毎に姉妹は時局に痛く感激し、とてもじつとして居られず、常に國威宣揚、武運長久を神に祈ると共に、何かお國の爲、自分共に出來得る事はないかと頭をなやましてゐた。

或日のこと例の一錢を入れんとした刹那、頭にひらめいた。

「これだ〳〵。この金庫だ……。私達の毎日蓄へ來つた金だ。たとひ額は少くても、私等二人にとつては、十年間の尊い金だ。このお金をお國の爲に役立たせて戴かう。」

と感喜の胸を躍せながら父母に話せば、

「よい所へ氣がついた。お前達の眞心のこもつた金だから、きつとお役に立つだらう。」

との言葉に力を得、直に車夫に前記金庫を持たせ、二人は高知聯隊區司令部に出頭、國防獻金方を申し出でたのである。

同司令部では、直に金庫屋を呼び寄せて錆を生じた錠前を漸く開き、山積せる銅貨を取出して、計算したるに壹錢銅貨を主として貳錢銅貨、五錢白銅貨等取混ぜ、實に百三拾四圓八十八錢（重量五貫）を得たとのことである。

現住所　高知市本興力町四四
氏名　竹内富美子　姉
竹内喜美子　妹
生年月日　大正十二年七月二十二日生
大正十四年十一月十九日生

二十、纖手よく留守を守る

脊には赤ん坊を負ひ、幼兒の手を引いて行商する可憐な婦人がある。これこそ夫出征後の一家を

守る山本照尾さんの雄々しくも可憐な姿である。

昭和十二年九月夫應召出征の後は六歳と二歳の幼兒を抱えて雄々しくも生活の苦境と戰ひ、在鄉軍人分會或は軍事援護會等より救助しやうとしても「やれるだけはやつて見ます。」と人の情に感謝の涙は愈々彼女をして紛骨碎身の奮鬪を誓はさし、坐して人の情にすがるは戰場の夫に對しても申譯なしとそれよりは二兒を連れてマッチ、石鹸、化粧品其の他の雜貨を携へて市中を行商し、雨の日は網をすきなど寸暇を惜しんで働き、昭和十三年四月まで實に八ケ月、戰線の夫を激勵慰問すると共に雄々しくも一家を支へて血みどろの奮鬪を續けて居た。

此の間幾度か援護會より扶助せんとしても同女は是を受けやうともしなかつたが、いつまでも應召家庭にかく苦勞をかけるにしのびずと援護會より軍事扶助の申請をなし强ひて之を受けさせる事とした。然るに扶助を受けるに至つても之に依賴せず依然として寸時も休まず働いてゐる。

まことに日本軍人の妻として殊勝なる心掛と感歎しない者はない。

現住所　高知市浦戸町一〇二番地
氏名　山本照尾
生年月日　明治三十六年五月四日

二十一、武人の妻

「多勢の家内ですから、各々思ふ通りを言ひ張りますと、円滿に行く筈がありませんが、お互に堪へ合つて戴いて、今日迄平和に暮すことが出來ました。」

一家三名應召

感心な武人の妻

町内賞讃の的

不具の父多病の母を助けて雄しくも職業戰線に立つ姉と弟嫁

昭和十三年十月某日、日刊新聞紙上で感激を傳へられた銃後美談の主高知市小津町三二矢野國正氏三男賢三郎君の妻女縫さんは、春の赤ん坊をあやしながら語り續けるのであつた。

「數年前、不慮の輪禍で右脚を失ひましたお男様も、左脚一本で巧に自轉車を操縦して、家業の請負の仕事を、日々お勤めになりますし、お姑様も御体に御無理をなさつて迄家事萬端、先立つてなさいますし、お姉様も大變親切にして下さいますし、二人の義弟も一人の義妹も私共二人の姉の言ふ事も、よく聞いて呉れますので、水臭い内輪喧嘩もなく、又兄弟三人が、名譽の應召を

致しました後も、何等不安な事もなく暮す事が出來ます。

又應召につきましては、軍事後援會の方々や、町内の方々から大變な御同情を賜はりまして、私共一同常に感謝致しまして、勵まし合つてゐる次第でございます。」

事變以來應召出征の名譽の家は多い。一家數多の勇士を出した名譽の家も少くはないだろう。併し、兄弟は他人の初の諺もある程であるが、斯かる多人數の家族が一家に世帶して、斯くの如く美はしい生活をしてゐる姿を見ては、一家の者の態度に對しては勿論だが、二人の嫁の心掛に對して町内の賞讃を博するも亦當然と言へるであらう。

現住所	高知市寶町一二二
氏名	矢野靜子
	矢野縫
生年月日	大正三年十二月十日生
	大正七年一月三日生

二十二、兵隊ばあさん

「先日は御親切な御手紙を戴きまして、まことに有難う存じます。弟清太郎も御かげさまで元氣に出征致しましたとの事、一同喜んで居ります。

出征の際には親兄弟も及ばぬ様な御心盡し御世話様になりましたさうで御親切に對しましては家内一同涙を流して感謝致して居ります。とりわけ母は毎日話しては唯有難涙にむせんで居ります。

清太郎の負傷入院中の御親情や其の後今日に及ぶ御厚情は何とも御禮の言葉には盡せない程で御座居ます。清太郎はまことに幸者です。どんなに喜んで出征した事でせう。この御親切御恩に報いる爲にも、きつと立派な働きをしてくれる事と思ひます……。」

兵庫縣神樂村大稗　足立伊太郎

野村様

此の手紙が兵隊ばあさんの許に屆けられたのは昭和十三年十月二十日である。高知とは遠くはなれた兵庫縣の見ず知らずの人からどうしてこんな手紙が來たか。これには次の様な面白い物語がある。

此の度の支那事變に赫々たる武勳を樹てた我が郷土聯隊にはそれだけに犧牲者も多く、白衣の勇

士は陸軍病院に或は赤十字病院に次々と送還された。

兵隊ばあさんは、かうした氣の毒な將兵を見るにつけ同情と感謝の念で、もうじつとしては居られず、花束を持ち或は菓子果物等を携へては病院を訪れた。

昭和十三年二月の或朝　自分の仕事先である九反田中央市場に出かけた。そこでふと耳にしたのが赤十字病院に戰傷の身を横へる一兵士の淋しい身の上であつた。

親兄弟或は親族友人等慰問者の多くある負傷兵の中に誰一人知つた人の訪れもなく氣の毒な兵士がある、聞けば縣外在住との事。是れを聞いた兵隊ばあさんはもうたまらなかつた。我が子の如く不憫に思はれてならなくなつた。その日は仕事もそこ〳〵に花や菓子を持つて病院を訪れた。

「思ひがけない此の慰問に此の負傷兵はどんなに驚き且つ喜んだ事であらう。

この負傷兵は兵庫縣氷上郡神樂村大稗出身の足立清太郎一等兵である。

此の後兵隊ばあさんの姿は、時々此の病院に見受けられた。かうして知る人もない地の病院に負傷の身を養ふ足立一等兵を慰問する事がおばあさんには限りない喜びでもあつた。

傷はぐん〳〵快方に向かひやがて全快した彼は再び原隊に還つた。

さうして昭和十三年〇月〇〇日、再度の出征に加へられた足立一等兵は離別の爲に五日間の休暇を得て懐かしの郷里に歸る事となつた。

足立一等兵はおばあさんに挨拶すべく汽車で發つのをやめて、夕方の船としておばあさんの家に立寄る事とした。その日はおばあさんは早くから御馳走を用意して足立一等兵の訪れを待つた。

かうして久し振りに樂しい數時間は過ぎた、やがて船の時刻も近づき棧橋へ出かけやうとした。

「足立さん船で食べるに何がよいかね、一番すきなものを言つて。」

「いや、おばあさんいゝですよ、僕買つていきますから。」

「今更らさう遠慮せんでもよいぢやないか、一番好きな物は何でしたかね。」

「は、それでは、饅頭です。」

おばあさんは大急ぎで酒饅頭を特別に注文した。さうして出來るを待つて車を棧橋に飛ばした。

出帆間際である。

おばあさんは、感謝と感激の涙を浮べて無言に押し戴く足立一等兵の手にそれを渡して、ほつとした。

× × × ×

なつかしの實家に僅か二夜の語らひに盡きぬ名殘を惜しみつゝも彼はあはたゞしく又高知へと出發した。

おばあさんは又彼を家に迎へて色々ともてなし再度の出征を祝ひ、心から其の武運長久を祈つて

やつた。かうして彼は〇月〇日勇躍征途に上つた。おばあさんは朝まだほの暗い驛頭に立つて彼を送つた。

× × ×

兵隊ばあさんはその名の如くまことに兵隊が好きである。おばあさんの世話を受けた兵は今迄にいくらあるかわからない。

昨年十一月には身寄りの無い氣の毒な出征兵の話を聞いて夜通し千人針を調製して御守を添へて出征の前日聯隊に持つて行き、一面識もないその兵に贈り、余りの嬉しさ有難さに其の兵をしてしばし言葉なく男泣きに感泣せしめたといふ。

又本年九月廿六日より二週間、此の町内附近に聯隊兵が宿泊した、おばあさんは自分の家にも御世話したくてたまらなかつた。けれ共早朝より働きに出る身であり御世話の出來なかつたのを非常に殘念に思ひせめて近所に宿つてゐる兵隊さんだけでも御慰勞したいと、其の家々に了解を得て澤山の壽司を各戸に配り宿つてゐる兵の勞を犒ひ感謝と慰勞の誠を捧げたといふ。

この兵隊ばあさんは掛川町、野村つる（五十一歳）さんである。

現住所　高知市掛川町五十七番地
氏名　野村　つる

生年月日　明治二十一年三月二十五日
職　業　書籍販賣

二十三、街の体育指導者

非常時局に際し、國民の緊張を促す爲の強調週間は次から次へと計畫されてゆく。けれども、それが單なる形式的行事として終らさぬ樣に我々は常に反省しなければならない。我々は茲に強調行事の精神を生し、更に發展せしめつゝある二つの美談を錄し得る事は、我が鄉土の名譽としなければならぬ。

その一　ワツショイ學校と岡村さん

ワツショイ。　ワツショイ。
ワツショイ。　ワツショイ。

未明、寒風を衝いて附近市民の惰眠を覺す勇ましい掛聲、駈足の音。それは子供達に、ワツショイ學校の愛稱を以て呼ばれてゐる高知市寶町岡村理髮店主を主唱者とする「寶町心身鍛錬會」の早朝勤行の表象である。

昭和十二年二月國民精神總動員心身鍛錬週間行事として江ノ口校下を中心とする有志の早朝駈足勤行であつた。如何なる都市と雖も未明の空氣は清澄である。その空氣を吸ふて、ワツショイの掛聲勇ましく街頭の惰眠を破つて駈け走る時、老も若きも精氣潑溂とし、心身は淨化され鍛錬されてゆくのを覺えるのであつた。

強調週間は終つた。此の有意義なる運動を、僅かに一週間行事として葬り去るのは惜しい。茲に、岡村末廣（散髮業）はその徒弟、並に近隣川崎重躬（染物業）近森茂（店員）等と相謀り、「寶町心身鍛錬會」を組織し、強調週間の終つた翌日即昭和十二年二月十六日より、引續いて早朝駈足勤行を實行したのであつた。第一日は發起人達を合せて八名であつたが、第二日は十二名となり、第三日は三十人、斯くて十日目には八十人となり、最盛時には老幼男女合せて、三百人を超過するの盛況を見るに到つたのであつた。

勤行の概況を見るに、午前五時、起床ラツパは喇叭と岡村氏の徒弟によつて奏せられ、かつ、振鈴は自轉車によつて會員の起床と集會とを促す。それを合圖に會員は輕裝して岡村氏前の路上に集

合し、準備運動としてレコードに合せてラヂオ体操、建國体操をなし、終ればワツショイの掛聲勇ましく駈け出し、隊伍整然と東方へ八百米、産土神郷社小津神社に參詣し、皇軍の武運長久を祈願し、それより北方久萬川堤に出で、西折、寶町を南走して出發点に歸着、全行程約三粁。再びレコードに合せて調節運動をなして解散。更に發起人達は前記産土神境内の清掃を奉仕するのである。

此の勤業が行はれ出したので、沿道の家々は惰眠を恥ぢて早起となり、神社境内を汚してゐた悪童達は進んで清掃を手傳ひ、汚すを憚るに至つたのである。

何事によらず、一事は易いが續けるは難い。一般參加者の中にも中止する者もあつた。氣紛れな子供達は何かの方法を講じなければ參加しなくなる傾向を生じた。發起人達は自らの小使を節し、趣味の魚釣を止め、煙草を節する等によつて賞品を構へて會員兒童の相撲會を催し、或は出席簿を用意して皆勤者には辨當、旅費を給して遠足、海水浴等に連れ行く等によつて、會員の減少を防いだのである。それを見た有志は、感激して物品或は金錢を寄附し、父兄も感謝して寄附を申出る者もあつたが、多くは發起人達によつて負担したのであつた。

斯くして參加者の數は多少の出入はあるが、常に四五十人を下らず、冬から春へ、春から夏へと、曉の街頭、鷹城を間近に仰ぎつゝ、ワツショイの掛聲も勇ましく、氣を錬り休を鍛へて、一路休位の向上に邁進する姿は眞に感激に耐えないのである。

現住所　高知市寶町六番地
氏名　岡村末廣
生年月日　明治四十年一一月二十二日生
職業　理髪業

その二　榮田町一丁目建國体操の會と國澤義雄先生

昭和十三年度夏季ラヂオ体操會の最終日、愈々今日限りで來年迄はラヂオ体操會もお休みだと思ふと、自覺ある參加者の頭には一抹の哀愁を覺えずには居られないのであつた。此の意義ある會を是非續けて行き度いものだ、何とか繼續の方法は無いものだらうか？　會の歸途、自ら人々は語り合ひながら淋しさを語り合ふのであつた。

高知市榮田町一丁目―と言ふよりは江ノ口小學校前と言ふ方が分り易いだらう邊に住居する人々、第七家庭防空組合員の中には、特に此の願切なるものがあつた。だが、誰か中心となる者がなくてはーその時、期せずして一同の眼に映じたのは同じ町内に住む、高知縣立海南中學校体操科主任教諭國澤義雄氏であつた。是非先生にとの有志の代表者からの申出を受けた國澤氏は、丁度其の前、東京市に開催せられた、第一回建國体操指導者養成講習會に出席し、横濱市並に大阪市等に於

ける建國体操の普及狀態を聞き、本市にも是非その普及を圖り、非常時下の市民体位の向上に盡し度いものと思つてゐた時であつたから、その申出を快諾し、直ちに榮田町一丁目建國体操の會を組織し、翌朝、即ち、昭和十三年八月廿一日から、自ら合圖の拍子木を打鳴して定刻を報じ、自家の蓄音機を邸前の路上に持ち出し、レコードを掛けて人々の集合を促し、集合終れば、東方を遙拜し、ラヂオ体操、建國体操をなし、最後に國歌を合唱して其の日の行を終ることゝしたのである。

此の行が初められると、組合員の家庭からは殆んど全員出席、傳へ聞いた隣の家庭防空組合からも續々と參加するものがあり、全員一同は先生の此の奉仕に對して感謝の念を以て自らの体位の向上に精進してゐるのである。

現住所　高知市榮田町一丁目二四番地
氏名　國澤義雄
生年月日　明治三十七年六月二十四日生
職業　教員

二十四、繼續献金のレコード保持者

昭和十一年も早や暮れ樣とする十二月の或る日の事である。小春日を受けた聯隊區司令部は、街頭のあはたゞしさに引きかへて、緊張の中にも至極靜かである。丁度其の時投入された數通の郵便物の中に、城田と姓のみ記した市内發送の封書があつた。係官が何心なく開くと、國防献金にとして一圓の爲替が封入してゐつた。住所氏名等不明のまゝ献金の手續を了したのである。

其の後、昭和十二年に入つても城田氏名義の献金は、毎月の樣に根氣よく送付されるので、其の赤誠に動かされた司令部では、市役所の戸籍簿について一々調査して見ると、城田姓は五丁目外數軒しかない事が明かとなつた。

丁度其の頃四月の或る日、市高等小學校の制服制帽の美少年が司令部を訪ね、お父さんのお使ですと、一書を差出して献金を願ひ出たが、其の書面に城田と記してあるではないか。係官は衝動的にたづねた。

「君は五丁目ではないか。」

「さうです。」

「今迄も毎月献金してゐたね。」
「ハイ。」
司令部でさがし求めてゐた城田氏は、本丁筋五丁目洗張業城田政治氏である事が判明したのである。

昭和十二年四月といへば郵便法が改正實施せられた月である。城田氏は考へた。封書は四錢に値上げられたが、一錢でも無駄にしてはならぬ。さうだ、幸長男が市高に通學しはじめたから、其の便で送金すれば四錢が浮ぶことになると。かくて長男富男君が司令部をたづねたのである。これこそ郵便法改正の取りもつ緣といふものだらう。

昭和十二年七月、日支の風雲急をつげ、越えて八月には我等の鬼部隊も矛をとり、有史以來未曾有の敵前上陸に世界の耳目を驚敷せしめ、更に北支に中支にと、暴支膺懲の軍が堂々進擊に進擊を續けるや、城田氏の愛國熱は更に一段と強化せられ、此の好機を逸せず、献金の增額をしようと堅く堅く心に誓つて、以後は毎月一圓五十錢を最少限度として、五圓十圓の献金を續ける事となつた。かくて早くも三ケ年、未だ一月も缺がした事がなく、縣下に於ける繼續献金のレコード保持者である。

今日は昭和十三年十月二十七日、漢口完全陷落の記念すべき日である。喜びの煙火は打上げら

れ、市中は全く日の丸の波で感激の坩堝と化した感がある。此の目出度い日に、ゆくりなくも献金の家に城田氏を訪ねる事が出來たのである。

長身白哲で眞面目そのものゝ樣な氏は、つゝましく謙遜しながら、しかも眞實のこもつた口調で、献金の動機感想將來の考へ等について話される。

動機といつて別にありませんが、かうして私の家の今日ありますのも世の人々の御かげ、何とかして御恩返しがして見たい、こんなに考へたのが一つ、昭和十一年の末に酒の上で怪我をした事があります。今迄病氣一つしなかつたのに、酒の上で人樣に心配をかけて申譯がない。さうだ、酒を斷つて献金をしよう、これが動機の第二です。

感想といつてまとまつた感じもありませんが、献金をはじめてから、自然と心が引締つてまいりました。富裕な家では何万圓といつて一時に献金も出來ませうが、私の宅ではさうはいけません。それですから、僅かな金をへり出し〳〵して長く續けてゐるやうなわけです。

自分がしてゐなかつた頃は何も氣に止めなかつたラヂオ放送の國防献金に心が引かれるやうになりました。自分の献金もあの一部だと思ふと、一層家業に精が出るやうになりました。人間は働くことも蓄財する事も大切ですが、生かして使ふことがより大切ではないでせうか。

將來に對する考へ――やらない先の事で申しにくいのですが、此の事だけは一生を通じて行ひた

いと思ひます。私の宅には女手が少いので、各種の婦人會の行事などに出て思ふやうに働くことが出來ません。その代りにも續けていかねばならないと思ひます。

城田氏の眞實あふるゝ御話に魅せられ、更に陸軍大臣からの承認書、感謝狀を見せていたゞく。山と積まれた寺內、杉山、板垣三大臣からの感謝狀に、長期繼續獻金の功績がしのばれる。

この承認書をごらん。僅か一圓の小額でも三八式銃實包二十三個となつて生れ代る事が出來るのですからねえ。

と感慨深げに語られるのであつた。

現住所　高知市本丁筋五丁目一三二

氏名　城田政治

職業　洗張京染業

二十五、八十媼さんの赤誠

人生の齡を全うして、何等皇國の爲に盡す事が出來ない我身も、銃後の一人としてせめて出來るだけの御奉公をさせて戴き度いとの烈々たる祖國愛より、扶助料五十圓を献金した安政四年生、當年八十二才の老媼がある。

此の老媼こそ島崎棹さんといつて、非常に謝恩の念厚く公共の爲に盡した事跡も頗る多い。

日露戰役當時は潮江婦人會の幹事として、銃後の第一線に立ち大いに働き、陸軍省より表彰されたのである。上海事變に際しても献金を爲し、そのあふるゝ愛國の赤誠は町民を深く感動させたのであるが、今次の日支事變勃發するや、八十二才の高齡にもかゝわらず、兵士の歡送迎には一度も欠かした事がなく、且つ新聞の時局記事は毎日精讀して時局認識につとめてゐる。皇國の安危を双肩に擔つて勇戰する兵士の困苦を偲ぶにつけて銃後の勤めを幾分なりとも盡したいと考へ、此の非常時に扶助料を戴いて安閑とすべきでない、これを何等かのお役に立てる事が最も有意義であると考へついた。かつて近衛兵であつた亡夫慶雄氏も定めし地下で喜んでくれる事と信じ、昭和十二年八月十九日扶助料五十圓をポンと國防献金として、銃後奉公の赤心を寄せたのである。

棹さんのこの愛國の熱情は司令部の方々を非常に感激せしめ、やがて陸軍大臣より感謝狀をいたゞいたのである

現住所　高知市鹽屋崎町二五八番地
氏名　島崎　梼
生年月日　安政四年七月一三日生
職業　無

二十六、此の母

我等が部隊　其の名和知隊
召されてたてば　後へはひかじ
敵前上陸　青史をかざり
羅店をほふり　白壁破ぶる
打ち振る御旗　朝日に燃えて
萬歳かすれ　涙はわきぬ
泣け泣け勇士　泣くべき時ぞ
上海陷ちぬ　我が手に陷ちぬ

和知隊の向ふところ敵なく、鬼部隊の名は中華をふるはし、敵前上陸以來鉄壁トーチカも土壁の如く、縱横に張る細胞クリークもほとんど用をなさず、吶喊敢行二千米一番乘の功名を擅にしたのであるが、此の名譽のかげには幾多の尊い犧牲を拂つてゐる。

故國にあつて銃後を守る部隊長夫人としての心痛は、夫君にもまして傍の見る目も氣の毒であつた。英靈を祀り遺族を慰めるのを職務と考へた夫人は、戰病死の公報があると必ず其の遺族を訪うて心から慰め、又宅には新しく佛壇をつくつて勇士の御靈を迎へ、朝夕二回端坐して默禱を續ける其の姿は、さながら生ける佛陀の如く全く、三昧の境地にひたつてゐた。

かくて幾百千の英靈の御名と、戰死の場所や日時までも銘記して、忌日には香をたき生花を供へて感謝の意を表した、特に毎月上海上陸の記念日の二十八日には、眞如寺の僧侶に乞うて讀經をしひたすら其の冥福を祈つたのである。

あらゆる婦人會の會合には、その中堅となつてまめまめしく立ち働いた。或時には愛婦となつて赤襷をかけ、又或時には國婦となつて白襷をかけ、慰問袋の調製に、出征兵士や白衣の勇士の送迎に又遺家族の慰問にと、全く身を忘れ家を忘れて働いた。

將校團婦人會としては、月の一日と十五日には必ず市の忠魂墓地を清掃し、柳原で粗食辨當を開いて、出征兵士の勞苦を思ひやるのが常であつた、又時々病院の慰問や英靈の慰靈祭をも行つた。

更に篤志看護婦となつて其の訓練を受け、毎月將校夫人を引率して陸軍病院に奉仕した。馴れぬ手つきで繃帶を卷き、再生ガーゼを整理するなど、あらゆる苦しみを味つて白衣の勇士を感激せしめた。

町内の人々は部隊長夫人として尊敬するよりは、街のよいお母さんとして親しみなつかしんだものである。兵士の送迎慰問袋の調製其の他町のあらゆる會合には必ず出席した。月の一日と十四日の五社參拜などでも肥大短軀にもかゝわらず、電車にもバスにも乘らないで町民と行動を共にした。

東京へ轉住する場合には、町民は街の光りを失つたやうに悲しみ、日頃の恩に報るために獅子に牡丹の模樣のついた硯箱を贈つた。「新任の時にも歸京の時にも町内の裏長屋の隅まで挨拶に來られたのですからねえ。」と町民は今も尚其の人格にうたれてゐる。

昭和十二年に土陽高知兩新聞社が主催となつて、和知部隊に對する武器獻納の資金を募集した事があるが、銃後に於ける各方面の絶讃を受けて資金は續々集つて來た。或る日、一人の紳士が高知新聞を訪づねて獻納資金にといつて百圓札を一枚差し出した。名を訊ねたが中々あかさない。帖簿記入に困るからとのたつての願ひに、高橋復四郎と名乘つて倉皇として立去つたのであるが、此の人こそ部隊長の實弟（興中公司勤務）で、所用があつて來高し、縣民一致の銃後活動に感激すると共に、留守宅を護る夫人の人格に心をうたれて此の擧に及んだものである。

美談は尚も續く、高橋氏は歸京後實弟の和田文吾氏（東大講師理博學士、實業家）に此の事を話すと、兄さん姉さんの爲なら默つては見てゐられないと、美しい兄弟愛に燃えたつて金二千圓を出されたのである。これを見た養母の衣織さん（夫人の叔母）もいたく感動卽座に一千圓を投げ出された。此の美談は、夫人を中心に咲いた肉親愛の花であつて、此處にも亦夫人の人格がひらめいてゐるのである。

高知縣に職を奉ずると誰でも、先づ第一に室戸岬を見物し龍河洞に遊ぶのが定石であるが、夫人は岬を知らず龍河も見ず、唯一度だけ親族が來高した時に、桂濱を訪ねて英傑坂本先生の勇姿に接したのが、名勝見物の最初であり最後でもあつて、登山や觀劇などは夢にも考へる暇がなかつたのである。

しかし市を中心として、附近の神社佛閣には余すところなく參拜し盡くし、又戰病死者の遺族を慰問したので、此の方面の地理には實に詳しかつた。慰問の御伴をした一將校夫人が「奥樣は高知生えぬきの私らよりは、よつぽど地理にお詳しいですのね。」と心から感歎して語つたといふ。

夫人は廣い屋敷で女中と唯二人留守を守つてゐたのであるが、宅に居たのは夜分遲くと默禱の時だけで、他はほとんど西に東にと銃後の固めに奔走してゐたのである。「まあ此の御奮闘で、御体

に……。」と將校夫人の心配した事は再三でなかつたが、其の間風邪一つひかず至つて元氣であつたのはひとへに神の御加護によるのであらう。

短軀で肥大の夫人は彿陀さながらの圓滿な姿をしてゐた。「賢こくて親みよい奥様」「上品で魅せられる奥様」「淡泊で人を包む奥様」であり、全く神の心を具へてゐる奥様であつた。「もう一寸背丈が高かつたら」と婦人會の方が言つたといふ事である。

夫人在高の期間は短かゝつたが、其の人格の縣民を教化した事は非常なものであつた。

思ひ出の高知を去る時が來た。道具一切荷造りが出來てしまつて何もない。廢物の鹵釜で御飯を焚いて握飯をつくり、手傳の將校夫人や婦人會の人々に振舞ひながら、「戰地の事を思つて我慢して下さい、」と言つたとか、あはたゞしい離縣の時までも、心の全部を占めてゐたのは我等が部隊の事であつた。否歸京後も戰歿將兵の位牌を安置して毎日讀經を續けてゐるとの事である。

そば降る秋雨の中から、夫人の尊い讀經の聲が聞かれる樣な氣がする。

現住所　東京市澁谷區大向通八地
元　高知市通町二丁目

氏名　和知雅子
年齢　四一才
職業　無

二十七、隱れたる慈善家

和田泰造氏は實に慈善奉仕の念强く、長年貧困なる者に金品を贈り町民よりその德を慕はれてゐるが、今次事變に際し市社會課に托して、出征遺家族に白米一石を贈つて感謝の誠を捧げたのである。

氏のかうした美擧は枚擧にいとまもないが、一、二、を擧げて見ると先年方面事業の資金醸成のため勸進角力を開催した際、一向に前賣券が賣れぬので同氏は數百枚を買ひ非常に盛大に終了した事がある。又昨年來貧困者の爲に糯米一石を配布し世間並な新年を迎へさしたのである。又潮江小學校にも書籍を寄附したり、又同校貧困兒童の爲にネル百反を寄贈せるなど、長年に亘つての方面事業の助成者であることが、此度の白米献納の事より市社會課の知る所となり、一同大いに感激した。市社會課長は親しく同家を訪問し厚く謝辭を述べた。

現住所　高知市春野町五五番地
氏名　和田泰造
生年月日　安政二年二月一七日生
職業　肛門専門醫病院（桟橋通一丁目）

二十八、愛國草履のお龜婆さん

市内秦泉寺三谷街道に沿ふ路傍に四五足の藁草履を吊し一足五錢と記したのが目につく、この草履の主は岡林龜さんといふ今年七十一才になる、お婆さんである、

此のお婆さんは息子さんがあるので日々の生活に困難を感ずる程ではないが、小遣錢や副食物などは草履を作り之を賣つて其の費用に當て、住家は亜鉛屋根三疊敷位の廣さで、一人暮の淋しい日を送つてゐる。

今回日支事變勃發し應召軍人の續出するのを目のあたり見たお婆さんは、

「自分には五人もの子供があつたのに、お國の爲御奉公に出したのは一人も無い。自分の知つてゐ

る軍といへば熊本の役、近くは日清日露の戰があつたが、も早や七十の坂を越した自分は、今回の事變が聞き納めかと思ふ。何か最後の御奉公として御國の爲に盡したい物だ。」

報國精神はむら〳〵と燃え上つた。しかし之に對するお婆さんの力はあまりにも弱かつた。

「貧と老とはつらいものだ、献金するにも金は無し働かうにも體はたゝず。」

考へた末。

「よし、この草履代を献金しやう、たとへ味噌と鹽を嘗めてでも。」

お婆さんの献金計畫は出來た。時は昭和十二年七月の末である。

しかし其の材料となる藁は一本も無い全部買ひ求めねばならず、皺の寄つた痩腕で片手打の槌を振つて打たねばならぬ、炊事洗濯の暇仕事として七十老婆にとつて並大抵の苦勞では無い。一日中腰の痛さをも忘れて働き、やつと三足か四足。出來た草履を露店に出しても賣れ無い日が多い。氣は燃えたが結果は思はしくは行かぬ、やつと留めた金も長く置けば使ひたくなるので壹圓以上留まればすぐ献金した。

それで昭和十二年九月より十三年十月迄に聯隊區司令部に献金する事五回總額六圓貳拾錢に上つた。陸軍大臣より感謝狀を受くる事二回（昭和十二年十月十日附、同十三年二月十四日附）に及んだ。外に秦街國防婦人會へも拾錢或は二十錢を數回寄附し、又時には草履を持つて

「何かの御用にたててもらひたい。」

と頼んで來た事もある、献金を始めてから日々の生活費を惜しみ好きな豆腐一個の代をも節約してゐるとの事である。附近の人はお婆さんの精神に感動して愛國草履と呼び愛用してゐる。

又お婆さんは日蓮宗の信者で、或夜の夢に南無妙法蓮華經と記した二本の旗と男子の姿が現れた。

翌朝南京陥落の號外が鈴音高く配布された。この靈夢と元寇の役に於ける日蓮の祈願の事を思ひ合せ、直ちに旗二本を造り一本をば戰地に建てたく、苦心の結果聯隊區司令部の盡力により送り得たとの事だ。

尙申の年の申の日の申の刻に漬けた梅は武運長久の呪になると聞き去る昭和七年申の年に造つてゐたのを貯へゐて今回の事變に聯隊區司令部へ八十個献納し殘りは其後の出征者に配布したが、其の持參者には未だ敵彈に斃れた者が一人も無いと云ふ。

應召軍人見送も隨分頻繁で時には朝の五時といふ早さ。時には大風雨の日にも、白エプロンのお亀婆さんを見ない事は無い。又月二回の部落總動員祈願參拜には老脚止むを得ずとて必ず賽錢を頼むのを缺かさぬといふ熱心さである。

今次事變銃後の活動美談は多くあるが、このお亀婆さんの如く老体尙壯者を凌く精神的の活動をせられてゐるのは少いと思ふ。

現住所　高知市秦泉寺三九八
氏　名　岡林亀
生年月日　明治元年一〇月一五日生
職　業　無

二十九、老人の青年

或日、青年學校へ先生にお目にかゝりたい、と訪ねて來たものがあつたので、早速專任教員が應接室へ行つて見ると、初老に近いがりゝしくはりきつた面に希望の色を浮べながら、

「私は、本町上一丁目で鍍金業をやつてゐる中井源一郎と言ふ者ですが、私の所に青年學校の生徒に、なるべき弟子が數人居りますから、入學さして貰ひたうございます。それから、私も最早四十二歳でございますが、不幸脊丈が足らないで徴兵に洩れ、銃執ることも知らないので、日頃之を遺

憾としておりましたが、特に目下の様な時局に出あひましては、益々痛切にそれを感じます。どうか私も共に入學させて戴ひたいと思ひます。さうすると、一は自分の爲、一は私の弟子の入學や、出席の奬勵にも都合がよいと思ひますし、尚又一方に於て、一般青年を勵ます資料ともなるであらうかと存じます。まげて御許しを願ひます。年は少しゐてをりますけれども、まだ決して他の青年達の足まぎれにはならないつもりです。」

と如何にも眞面目な申込があり、其の態度にも其の言語にも、衒氣とか、奇矯とか云ふ樣な風は微塵もないから、教員も大變其の特志に感激して、直ちに校長に話して入學せしめた。

後で聞いて見ると、氏は鄉里奈良の櫻井尋常小學校を卒業すると間もなく、未だ幼弱な身でありながら、一家のため驟然高知市に來て、則岡自轉車店の徒弟となつた。それからは黽勉努力よく業務にいそしみ、技倆も從て進歩し主人の信用と寵遇を受け、遂に現在の鍍金營業所を讓與せられ、爾來益々奮勵努力して現在の隆運を得る樣になつた。

氏は又主家の恩を忘れず、今に至るも主家に何事かあらばいち早く趨せ參じ、縣外に旅行するが如き事があるときには、先づ主家に暇乞して行き、歸つた時も必ず先づ主家に挨拶して自宅に入るを常とし、特に、元旦には、一家打揃ひ、禮裝して第一に主家に慶賀を陳べて嘗て一度も怠つたことがない。

日支事變が勃發すると、自分が壯年の時徵兵に洩れたことを殘念に思ひ、苟も時局が重大になるにつれ、日本男子と生れて、銃持つ術も知らない樣ではいけないと考へ、且つ、同人の使用してゐる數人の弟子をも青年學校に學ばしめねばならないと痛感し、自分の年いたことも厭はず、なに、青年に負けるものかと、弟子數名と共に斷乎第六青年學校に席を置き、多忙な業務を繰合して出席することになつたのである。

なほ事變下、軍需工業は甚だ忙がしくなつたが、朝は午前四時頃から起き、夜も一時二時に至ることが珍しくない、程で其の精勵ぶりは驚くばかりである。

又第六青年學校に機關銃がなくて、新進の教練を受けるに不便なことを思ひ、多忙な營業の傍で、二百餘名の間を晝夜奔走して、多大の寄附金を募集し、輕機關銃二丁其の他を購求して、第六青年學校に獻納した。

或は、生徒を代表して橿原神宮に勞役奉仕をする等、國策に順應することが頗る多い。

最近四國商會から十三名、中山電氣局より六名、其の他入學生が多く、且出席率も漸次向上の傾向を示してゐるのは、氏の努力に負ふ所が非常に多い。

現住所　本町上一丁目一六〇番地

氏名　中井一源一郎
生年月日　明治三〇年二月一〇日
職業　鍍金業

三十、愛國半島人

歡呼の聲に送られて應召、出征する勇士、見送る老幼男女の打振る旗の波、萬歳の鯨波。その鯨波の波にもまれながら、日の丸の小旗を打ち振る赤襷の半島婦人を貴方は見かけた事はありませんか。

そしてあなたは、その半島婦人が愛國婦人會に入會するに就ての美はしい愛國物語を聞いた事はありませんか。

若冠、志を立て、內地に渡つてから二十餘年、其に皇恩の無窮を体驗せる李在根は、家人に對し或は半島人に對し近隣の者に對し、常に口癖の樣に報恩を盟つてゐたのであつた。

今次事變の勃發するや、擧國一致だ、銃後の護だ、國防獻金だ慰問だ、等々々、日本國內の緊張

活躍振を見て、彼の心は躍り血は湧いた。

「我々も同じ日本人です。チョーセン、チョーセン等と、性ない子供達に蔑視せられながらも、じつと我慢して來た我々同胞ではないか、見よ、一品獻納、古金集め、反毛運動等々々國の政策に迄なつた廢品回收運動は、我々が先手ではないか。今こそ我々半島人の愛國心を示す時が來たのだ。來れ半島人達よ。」と、決然として起つた半島人李在根。彼の選んだ一つの道は、半島婦人の愛國婦人會入會勸誘であつた。

「大日本天皇陛下の御蔭で我々半島人は平和に暮せます。働けます。働いて自由に儲けられます。有り難い事ではありませんか。歷史を御覽なさい。大日本帝國と合併してゐなかつたらどうなつてゐたですか。きつと支那に併呑せられてゐたでせう。支那に征服せられてゐたら、今日では、きつと今の支郡人と同じ苦しみを嘗めてゐたと思ひます、貧乏な中から、日本帝國は、我々朝鮮の爲に澤山な費用を使つて、文明を進め我々半島人の幸福を圖つて下さいました。その日本帝國が、今東洋平和の爲に、我々を救つて下さつたと同じ樣に、支那人を助けてゐるのです。我々半島人が、御恩を返すのは今です。忠義を盡すのは今です。朝鮮にゐる青年は軍人となる事を許して頂きました。高知にゐる青年は半島青年團を作ります。

女は愛國婦人會には入つて、大日本帝國の爲、東洋平和の爲に忠義を盡して下さい。」と彼は、

附近に住む同胞の間に説いてその入會を勸めた。陰になり陽になつて彼等同胞の面倒を見て來た彼の熱誠に動かされないものは無かつた。附近在住の十余名は直ちに呼合せられて江ノ口分會に入會したのである。

それだけでは滿足しない彼は、旭に、下知に、遠く郡部に迄、自己の業務を抛つて勸誘に行つた。斯くして其の功空しからず、彼の紹介で入會した者は三十一名（昭和十三年十月末現在）に達した。

斯くして入會した半島婦人は、汗と塵埃にまみれ、孜々として働いて得た僅ばかりの金から、尊い金を據出して會の事業たる慰問袋も作れば、國防献金もする。或は傷病兵遺骨の出迎へにも、尊い時間を割いて、日本國民としての誠意を表はすし、市葬にも代表者は必ず參列する樣になつた。

群集の中に赤襷の半島人を見出した時、我々は愛國半島人李在根の名を永く忘れることは無いであらう。

住所　高知市小津町四一番地
氏名　李在根（日本名木村大吉）

生年月日
職業　古物商

三十一、戰線の父に代つて

高知市永國寺町中の町陸軍歩兵上等兵廣田常近氏は、北門筋ミルクプラント牛乳配達をなし、妻女春江さんとの間に長男安秀君長女博子さん次女利子さんがあつて、貧しい内にも和かな日を送り子供達の成長を唯一の樂しみに暮してゐた。時恰も暴支膺懲の皇軍を進めることゝなり、常近氏は「好機到來」と勇躍出動。征支の聖戰に身を鴻毛の輕きに比し轉戰幾度か、砲煙をくゞりて、輝かしい武勳の數々をたてゝゐるが、俄に働き手を失つた留守宅は忽ち路頭に迷ふといふ有樣となつた。

然るに現在の家主永國寺町畠中寅太郎氏は常近氏の應召を聞くや直に、

「私の貸家へ是非來てもらひたい家賃はいりません。」

と。無理矢理に同氏貸家に移らしむる銃後の美しい義俠に、十五に足らぬ一子安秀君（工業一年生）は蹶然たつて健氣に、

「母さん心配はいりませんよ。」父の代りは私がやります。」

と妹博子さんも

「私はお參りに……」

と。其の日から朝まだき頃より共に起き出で、博子さんは薫的樣へ日參、父の武運長久を祈り、兄安秀君は自轉車を驅つて、肌をつんざく寒風の日も、吐く息凍らん氷雨をついて家々を縫ふて走る凛々しい姿。

この姿は何時しか町内の話題となり、學校へも傳はり、職員をはじめ學友を感激せしめたのである。

安秀君は同情を寄せらるゝ人々に、

「こんなこと何でもありません。戰爭に比ぶればこんな仕事は勿體ない位です。それよりもお得意先の方々や、皆樣が余りにも親切にして下さいますので……」

と。双眸に涙さへ浮べて語つてゐる。

また戰線の父常近氏は「安秀に告ぐる」の一文を與へ、父に萬一の事のあつた場合の覺悟を決せしめ、更に一子を激勵し、近隣の者を泣かしめたのである。

安秀に告ぐ

試驗も濟んだ樣だが、今度は何番であつたかを、手紙着き次第知らせ。

安秀には、父の不在中は充分母上のいふ事を聞いて孝行して居る事と思ふが、安秀よ、年十三歳、楠公が正行を呼びて別を告げ、父なき後は、志を繼げよと悟したることを、覺えてゐるだらう。最早明くれは十四歳の春を迎へるものなるぞ。充分一家の責任者の如く思へ。父等は御國に捧げし體だ。唯、何時戰地で名譽の花と散らんとも限らんぞ。その時の覺悟は、今より充分あれよ。母上より何やかや注意せられて後働く樣では、社會に出て、活躍るす御身等に、そんな淺間しい心が、萬一あつてはならんぞ。自分のなすべき道と、なすべき仕事を自覺して、時間正しく働く事が出來ない樣では、實社會に立つ事は出來ないぞ。今より敎しへて置く。若し牛乳でも配つて居るなれば、それが一番安秀本人の性格を、人に示すものであるぞ。最も時間勵行にて働け。時間を守る事の出來ない人間は、必ず社會に立つて立派に働くことの出來ない人間なのだから、今から注意して置く。

次に工業學校長先生から過日手紙が着いた。今後充分母上の云ふ事を聞いて一家の爲働け。

先づは體を大切にせよ。

父より

三十二、働くおぢいさん

現住所　高知市錦川町七六
氏名　廣田安秀
生年月日　大正一四年三月一三日生
職業　工業學校生徒

高知市福井町といへば、今代の碩學鹿持雅澄先生御誕生の地であり所謂福井の里なのである。三町といふは何だか變な氣がしてならない樣な純朴そのものゝ農村である。全町は一致團結してよく働くので各家は相當に富裕な生計をたてゝゐる。今だに都會の惡風も浸入せず、青年團の修養などに至つても、確に範とするに足るものがある。

まして本事變に際しての銃後の務に至つては勤勞奉仕、遺家族慰問、寺社詣、名士に依賴しての修養會等、眞劍であつて、質朴純眞な其の活動には心から感動させられるのである。

「この福井にあつて『働くオヂイサン』と仇名をもつた七十近い老爺さんがある。この町で働くと異名をとることは並大低の事ではない。老爺さんは德弘德彌（六十六才）さんといつて痩形の健康な方である。」

水田のみでも三町餘を所有して普通ならば樂隱居といふ恰好である。

支那事變突發するや昨年息子の清治さんが百田部隊に應召されたのである。

「清治さんの應召後はじ十才の老人とは思へない程に元氣になつた。この樣を町の人々は、

「まあ德彌さんの眼の光が。」

がういつて其の緊張振りを賞したものであつた。

「息子は戰爭、ワシヤ百姓。」

「息子位は未だ充分出來ると思ふけネヤ。」

この意氣で、以て一家の采配をとられてゐる。しかし流石に年の加減でもあらう、稍々生氣の落ちた腕と、面ざしには一抹の淋しさを見せてゐる。

德彌さんの感心なことはこればかりでなく、酒も煙草もすつかり止して、たゞ晝夜の別もなく働

き續けてゐる。

「戰爭を思へばワシラはじつとしてはゐられるか。」常に徳彌爺さんの語られるところである。

× × × ×

今日は福井町の勤勞奉仕日である。

應召留守宅の水田耕耘に集つた村人たちは、先づ徳彌さんの田からはじめることにしたところ、實に意外。昨日までしかも其の夕方までも其の儘であつた水田はいつの間にか美しく耕されてゐる。

「ハテおかしいぞ。」

まだ五時過ぎといふ薄暗いのに。皆の者は一時狐につまされた樣な氣分であつた。しかしそこには何の不思議もない、其の畔道を牛と仲よくより添ひながら徳彌さんの姿、

「ヤア皆さん御親切にありがたう。」

「それは〳〵。」

「皆さんにお世話を掛けては濟まんと思うてハト、昨夜やりましたよ。」

色々と聞けば月の明りを幸ひと、倚牛の頭に提灯をかけて夜通し働かれた相である。

七十才の老人が夜通し働かれるとは、全く鐵桶の意志と、非常時緊張の結果ではなからうか。こ

んなことがたゞの一時的でなく、勿論氣まぐれでもなく、夜分といはず田畑に耕作する徳彌さんの姿は少しも珍らしくはない相である。

「徳彌さんの畑を見よ、はや來年の用意が出來てゐるのではないか。」

と村人達は其の精進振りにほと〳〵感心させられてゐる。

現住所　高知市福井町
氏名　徳弘徳彌
年齢　六六才
職業　農

三十三、精米機を死守する妻

今時の若い者が、映畫を見ないなどと言つた所で、眞實とは思へないが、それが眞實であるから仕方がない。

若夫婦に下男一人と言へば、映畫や小説に描かれさうなローマンチツクな生活を想像させるだら

うが。此の家にはそんな、甘い生活は夢にも無かつた。主家であり姉の嫁ぎ先である家から分けて貰つた暖簾であるとは言へ、顧客の奪ひ合ひは殆ど肉彈戰同様である。夫と下男が力仕事から外働きをすれば妻は、内で、次々と生れた子の養育から、家事萬端、それに精米に混つた砂選り迄、女中を置かぬ家にとつては、一刻の偷安も許さない苦闘であつた。未明から深夜迄―映畫どころでは無いと言ふのが此の家の生活の實相でもあつた。

此の奮闘の家、精米商關本賢次に、突如召集令が下つたのは、昭和十二年七月某日、丁度產土神の夏祭の翌日であつた。神祭に集つて來た親戚友人達と、蘆溝橋事件の話に血を躍らせたのは昨夜の事である。如何なる場合にも、自若として一死奉公に報ずるのが日本軍人の魂である。併し騎兵上等兵ではあるが、〇〇〇に屬した彼には、餘りにも思ひ掛けない召集であつた。しかも、入隊迄に僅か二日しか餘裕はない。苦節奮闘十余年、愛妻と二人で血みどろの結果、漸く築いた此の地盤。だが。どうしてか弱い女の腕で此の商賣が維持出來ようぞ。男手でも困難な此の精米商を―又一方、人一倍子煩悩の彼にとつて、八歳を頭に六歳四歳二歳と、四人の愛兒を託さなければならぬ事を思へば家業の事など問題ではない。

「仕事の事はどうでもよい。少しやつて見てやれなければ店を閉ぢてもよいから、子供だけは是非一人前に育てゝお呉れ」

新婚の日から十幾年、夫の氣心は隅の隅迄呑み込んでゐる妻女藤江さんである。仕事と子供、それが夫の生命である事を熟知してゐる藤江さんは、

「後の事は決して御心配して下さいますな。私がお引受け致しました。貴方は只一心にお國の爲に立派にお働き下さいませ」

涙一滴見せず、健氣に夫を勵ます妻の心中は固かつた。藤江さんの實家からは、毎晩の様に實父森斯くて夫の出征を送つた藤江さんの決心は固かつた。藤江さんの實家からは、毎晩の様に實父森下初吉さんが、娘の家を氣遣つて泊りに來て呉れる。義兄であり、舊主家であるN米穀商の御楯があるとは言へ、米の仕入から、精米、砂選、御用聞き、配達、帳附け、集金等、永年忠勤を勵み、殆ど一人前となつた青年伊井豊喜君が居るとは言へ、二人分の働きは出來様筈がない。一時人を雇つたが、なれない事とて心に任せぬ。それもやがて暇を出した。其の頃から、實家から實妹幸子さんが助けに來て呉れたので、子供の事や、家事の一切は幸子さんに一任して、藤江さんは自ら夫の分を引受けて稍頭に進出したのである。―と言つても、女だてらにと世間から笑はれては、夫に對して申し譯が無いと、なるべく人眼をさけて立ち廻つたのである。

だが、危機はやがて來つた。七年間も眞面目に働いて呉れた下男伊井君が病氣になつた事である。「人様の大事な御子様を、取り返しのつかぬ事にしてしまつてはならない。此處の事は心配要

らぬから、ゆつくり家に歸つて養生して下さい。」と、遠慮する　君を實家へ歸して置いて、遠縁に當る西野春子さんを女中に雇つて、女三人で愈々背水の陣を布いたのである。

如何に情勢に通じてゐたとは言へ、男二人の仕事を女三人で引受けたのである。幸子さんと手をとり合つて泣いた事も幾度か。でも、幸子さんも、精根の限りを盡して奮闘を誓つて妹を勵まし、春子さんも、その健康と体力とを以て男勝りに働いて呉れた。

下知から潮江朝倉方面迄、全市に散在するお顧客巡りに、歩いてはとても出來た話ではない。二台あつた自轉車を一台の女用車に取り換へて、自轉車乘の稽古を初めたのである。けれども、晝間は人眼も恥かしいしその暇もないので、夜間、人通りの絶えるのを待つて稽古を初めたのである。心安い隣の人に、二三晩は教へて貰つたが、永くは氣の毒と思つて、「上達の望がないから、もう止めた。」と斷つて置いて、遠くの廣場へ行つて自分で稽古した。

元來器用な性である上に、生命がけの練習であるので、十日程も經つと、米の一斗や二斗位は積んで行かれる程に上達した。斯くして奮闘を續ける眞劍な一家を見て感心しない者はない。昭和の鹽原多助の妻だと近所の人々は噂してゐる。女だてらに一と常に氣にする藤江さんである。あんまり早く起きて騒ぎ立てると御隣が迷惑なさると、愛兒の枕元で洗濯物の繕ひから、店の戸を閉めたまゝで砂選りなど、隣の起きる迄にはもう一仕事終つてゐる。そして二人分の仕事をして夜となな

ると、入浴して、やれ〳〵と思つても人並に寢るわけには行かぬ。妹と女中とを休ませて置いて帳簿の整理が又一役である。忙しい時には砂選りもして置かねばならぬ。夏の短か夜など、砂選りをしながら何時しか眠り込んで、ふと氣がつけば夜明けだつたと言ふ如きは珍らしくなかつた。朝は四時に起き夜は一時前に眠る事は稀であると言ふ。

「夫から引き續がれたゞけのお顧客は、そのまゝ夫に返し度い」これが彼女のスローガンである。

そして、知人でも心境を問へば、「女でもすれば出來るものだ！何と言ふ貴い一言ではないか。

餘り丈夫さうにも見受けられない身体である。病氣せぬのが不思議だとさへ自らも語る彼女。こんなに緊張した自分も、永い野戰生活を送つて、萬一にも無事に凱旋する事が出事たとしても夫も、心がゆるむと病氣になるから、ゆつくり養生出來るだけの養生費を稼いでゐる位のものですとも笑つて語られる藤江さん。夫が歸る迄には、お花の一枝も活ける樣になり度いものだと、幸子さんと二人で、ほんの少い暇を活け花の研究もされる藤江さん。此の心の餘裕こそ、男勝りの苦闘に耐え得られる原因ではないだらうか。筆末に當り夫君の武運長久と此の家の人々の健康とを祈つて止まないのである。

現住所　高知市愛宕町二丁目
氏名　關本　藤江
生年月日　明治四二年一月一四日生
職業　精米商

追記、昭和十四年一月一日藤江さんは高知市江ノ口軍事後援會長中島和三氏より銃後婦人の模範として表彰を受けた。

三十四、感心な分會旗手

「父は酒の爲に生命を奪はれたのだ。當時三十八歳であつた母と、十三歳だつた自分とは、その爲どれだけ力を落し、それ以來どれだけ苦勞をして來たのだ。自分は入學したばかりの高等小學も止めてしまつて、母を助けて、汗と米糠とにまみれて家の精米商を續けて來たのだ。これもみんな父が酒の爲に早死した爲だ。酒は敵だ。自分は酒は飲まぬ序に煙草も喫まぬ。」

斯う決心しは小松重明は、兵役に服しても酒も煙草も飲まなかつた。その爲、月々の給料も大半

は貯蓄して不時の用に備へたので、母から小使を貰つた事は一度もなかつた。

現役を終ると直ちに在郷軍人江ノ口分會班長兼旗手を命ぜられた。

彼の班長兼旗手たるや、精勵恪勤、一度も任を怠る事なく、遂に稲川司令官よりは表彰狀を授けられた。

今次事變の勃發した時は、復習の爲の入隊直前であつたが、その爲入隊は延期せられ、多數分會員の應召出征するのを、

「しつかりやつて來い。俺も後から行くぞ。靖國神社で會はうぜ」と、分會旗と共に見送つて、自分の後れるのを慨いた。

やがて白衣の勇士となり或は遺骨となつて歸る幾多の勇士を驛頭に迎へて、彼は腕を撫して仇討を誓つた。そして分會員中の遺家族に對しては、誠意を以て諸種の斡旋をなし、事變以來は殆ど自己の生業を抛つて奔走するので、分會員は勿論、一般町民も心から賞讃し感謝したのであつた。

彼の期待した召集令は遂に下された。昭和十三年九月某日、彼も亦、年老ひた母と、一人の愛兒とを愛妻に託して欣喜應召したのであつた。

彼の此の平素を知る町民達は、彼の拔群の戰功を期待しつゝ彼の武運長久を祈つてゐるのである。

現住所　高知市愛宕町二丁目
氏　名　小松　軍明
生年月日　大正二年一月二日
職　業　精米商

三十五、勇士の母

事變勃發以來戰線に銃後に、婦人の活躍は目覺しいものである。應召出征兵士の見送りに、傷病兵士或は遺骨の出迎へに、慰問に、武運長久祈願に、其他白襷赤襷の姿も甲斐々々しく、街頭に進出する彼女達は勇士達にとつては實に力强い銃後の女神であらう。

その赤襷の愛國婦人會江ノ口分會長であり、日本赤十字高知支部病院長夫人である谷靜枝夫人には、滿洲事變以來殆ど寧日とては無かつた。

諸種の會合、其他公用のため、早朝家を出て夜に入つてから家に歸るが爲、幼い坊ちやん達の顏を一日中見ない事さへ屢々であつた。

だがそれは、事變下に於ける婦人皆の事でもあり、ましてその地位にある多くの夫人達にとつては當然の務であるとも言へやう。けれども吾々は、公務を離れ、義務を離れた、眞に國の母としての夫人の面目を語る二三の事實を傳へたいと思ふ。驛頭に、陸軍病院に、婦人會長として又病院長夫人として出入する機會の重なるにつれて、顏見知りの兵士も少からず出來、中には夫人の誠意に打たれて自己の身の上話をさへなす兵士さへも出來たのであつた。

出征間近ともなれば、兵營の面會所は收容し切れない程の面會人である。外泊を許された兵士達は、今生の思ひ出に懷かしい家鄉へと急いだ。

けれども、故鄉を離るゝこと遠く、僅かの日數では歸り得ない者、歸ればとて待つ人も無い者達にとつては、如何に勇士であるとは言へ淋しさはかくし切れなかつた。それ等の事情を聞かされた夫人の、尊い母性愛は、心からの同情を禁じ得なかつた。母なき兵の中にはお母樣と呼ばせて哭れと願ふ者さへあつた。其等の兵士は、公休日には夫人を私宅に訪れ、眞實母のそれの如く慰め勵まされ勇氣百倍して歸隊するのであつた。

其等の兵士達に對し、夫人は、せめて千人旗の一つでもと思ひ立つて、國旗を買つた。出征の事はその間近とならぬと分らない爲、千人旗も多くは家族の名を書くのがやつとであつたが、夫君信吉博士も

國の爲大和男の子の勳しを
立つるは今ぞ勇み往け君

など、自作の歌を達筆に記して激勵したので、其の旗を手にした勇士は勇躍征途に上らざるはなかつた。

夫人が眞心こめた此の旗に、シヤツ、靴下、ハンカチから猿又に至る迄親が子に對する心遣ひで日用品を添へたのは申す迄もない事である。夫人の許に屆けられる感謝の涙をこめた戰線からの手紙は、日に四五通に達することも稀ではなかつた。宛所が分れば、又心をこめた家族からの慰問袋は發送せられた。

斯くして出征した勇士の中には、名譽の戰死者も出た。伊路町出身久松某もその一人である。滿洲事變に際し、感激の涙にくれつゝ勇躍した彼は、盟に叛かず名譽の花と散つた。彼には故郷に愛妻があつた。愛兒を惠まれてゐなかつた妻女は淋しかつた。幼くして母を失つた夫の、母と慕つてゐる夫人の名を、戰地からの便りで知つた妻女は、一面識も無い夫人を訪ね、身の振り方をも相談した。夫人は暫らく家に留めて、同深い同情で彼女を慰めかつ勵ましたのであつた。今次事變勃發以來既に一年有餘ヶ月、併じて今日以後何時迄續くか分らない長期戰中、夫人に慰め激まされて出

征する勇士は幾人あるであらうか。夫博士からは、

「餘り無理をすると死んでしまふぞ。」と言はれる程の無茶に近い活動一事實、夫人の健康は鉄の樣な身体とは言へない。過勞の爲、時には病床に就いて、藥餌に親しみつゝも婦人會幹部等を枕頭に迎へて公務をとるのであつた。

食後の團欒の折、坊ちやん達から「兵隊狂人になつた。」などとからかはれる夫人。夫人の如き幹部あつてこそ、婦人會は否全銃後の陣は完きを得るのだとも言へやう。

現住所　高知市中水道一二八
氏名　谷　靜枝
生年月日　明治二八年九月二七日
職業　無職

三十六、家を捨てて

身は多忙な一家を控へながら、全く個人を忘れての銃後の奉公に、附近の人々に感謝されてゐ

る婦人がある。事變勃發以來各種團体の要職にあるものは、誰も我を忘れて銃後の務に邁進してゐるが、この方は愛國婦人會の會長代理といふ形で、會の爲に奔走する一方、又篤志看護婦としても盡力してゐるといふ。高知驛を近くにもつ關係上、軍人の送迎は他よりも甚しく、其の他神社參拜、陸軍病院慰問、出征遺家族の訪問等に一家を捨てゝ尙定められた會の僅少な會計を補ふ爲には、時に數人の幹事の援助もあるが、其の中心となつて奔走し、炎天の下を自ら乳母車をひいて、七夕用品或は夏の飲物類を賣り歩き、又日の丸の手旗を賣り廻り僅かづつの利金を得、時には芝居音樂會等の會券を賴まれて賣り、その手數料を得る等して、出征軍人の遺家族の慰問や傷病兵の慰問に遺漏なきを期してゐる。「三日と續いて家に居つた事はありません。」ともらしてゐる通り、全く獻身的な努力をしてゐる。

なほ、之を助けて働いて居る人に、家庭の特別な忙しさをも顧みず、會の爲に奔走してゐる中村靜さん、色々の困難を排して分會創立に盡力し、一方篤志看護婦としての働も大きく、人々から稱へられてゐる島崎タツエさん、女腕で家事の處理をして行く、多忙な身を以て、高知發又は通過の出征兵のある毎に、自費を以て多量のコヒヒを出し、眞心からこれを送つて有名であり、又時には陸軍病院慰問、篤志看護婦として出勤の折等にも、必ず花束や菓子折を携へることを忘れない長崎正さん、かうした人々があることも見逃してはならぬ。

ここにもう一人國防婦人會の會長として、最も世話のよく出來てゐる婦人がある。かうした各分會の役員は、同じく會務の爲に我を忘れて働いて居るが、この婦人が女手を以て、如何に些細な事でも、會に關係あることは何一つもらさず記入してある、その記錄を見た時には、誰も敬服することゝ思ふ。これは永い年月を經過した後に於て、支那事變下にあつて如何に高知市民が活動したかを示す、貴重な材料となることゝ思はれる。記錄をたどつて二三まとめてみよう。勿論、會長としての公的行動もあるが、中には個人的な行動も相當多い。

一、高知驛、朝倉驛、棧橋行、　三一二回
一、陸軍病院、善通寺病院慰問、　二〇回
一、八幡宮、山内神社、天滿宮、琴平宮、藤並神社、小津神社、箸藏寺參拜、　一〇二回
一、遺家族慰問　四六回
一、市葬、慰靈祭、忠魂墓地美化作業に參加、　二四回
一、分會長會合　二三回

右は大体事變勃發以來一ケ年間のものである。

現住所　高知市材木町四十三番地
氏　名　近藤　茂
生年月日　明治三一年生
職　業　材木商

現住所　高知市細工町三十一番地
氏　名　（勳八等）平尾只猪
生年月日　明治一五年三月一日生
職　業　産婆

外三名

三十七、軍國の老父

皇軍漢口突入、武昌完全占領の號外の鈴の音も勇しい十月二十六日の夕刻、二子を國家に捧げた名譽の家石田氏を、南奉公人町二丁目に訪ねて、靖國神社臨時大祭參列の感想を聞く、

もう唯々感激の外ありません。日本の力強さがほんとにわかりましたよ。

次男三男が揃つて征途に上つたのが去年の八月でした。それから激戰又激戰で、戰死者の氏名が毎日ラヂオで發表されます。幸今日も名前が出ない。元氣に御奉公してゐるのかと、こんなに考へてゐました處、突然九月二十四日弟の名前が出たのです。お國の爲だよく死んでくれた、かう思つて一週間目です。兄の名が發表されました。これにはさすがの私も胸がドキンとしました。

當時はずいぶん苦しみもがいたものです。とんな事ではならぬ。國家の爲に死んでくれたのだ。かう考へてもあきらめ切れないのです。人生の死といふ事を考へると、これ程立派な死はないのです。よく死んでくれた伺長男が殘つてゐるではないか。こんなに思つて見ても　あきらめ切れないのが親の情です。

（私共が死んでも兄さんが殘つてゐる。思ふ存分働くことが出來るよ）二人が出發の時殘した言葉を思ひ出して心を勵ましても見ました。

たつた一人の息子さんを死なした方もあるではないかと、より以上不幸の方に比較して、心を勵ましましました。

しかし今回の大祭に列しまして、更に、至尊を拜し奉るに及んでは、もう何もかも忘れてしまつ

て、あゝよく死んでくれた。お前は神様になつたのだぞと、心が全く晴れ渡りました。

殘つてゐる長男も騎兵です。何時でも、お召があれば國の爲陛下の爲に捧げるだけの決心と準備が出來てゐます。

二子を失つて、更に殘る一子を献ぜんとする此の覺悟には、唯々感泣させられるのであつた。

軍國日本にも珍らしい老父は、少時から鍼灸業を職とし、其の餘暇には新内、生花、舞踊等を修業した趣味の人で、風流鍼灸屋として町内でも名高い。十五六年前からは淨瑠璃に專念し、土佐因會で優勝旗を獲得して大關格となつてゐる。

淨瑠璃位勸善懲惡のハツキリしてゐるのはありますまい。世間の道理を明かにしてゐるものはありますまい。日本武士道をうまく表現してゐる点、日本精神の眞髓ぢやありますまいか。

私は此の精神で子供を導びいて來ました。又淨瑠璃の精神が不識々々の中に子供の心境を養つたとも云へます。

決死三勇士の一人として見事に散つた三男諄三郎氏、壯烈鬼神を泣かしむる樣な立派な戰死を遂げた二男容之助氏の功績は、かうした父の教育による事が偉大であつたと思はれる。

人至誠の人、風流の人石田氏と對坐してゐる客間の床には、靖國神社臨時大祭の砌戴いた、兄弟二の御靈殿が安置され、その前には老父が心盡しの黃菊が生けられて、戰功を語るかの如く清楚に香

つてゐる。後には和知部隊長から送られた「壯烈泣鬼神」の墨痕あざやかな軸がかゝつて、英靈の勳功を物語つてゐる。

現住所　高知市南奉公人町一六二
氏名　石田竹猪
生年月日　明治八年五月一六日
職業　會社監督

三十八、愛國喇叭手

支那事變勃發以來曉に起き出でゝ鎭守の森に集ひ、皇軍の戰捷と出征將兵の武運長久とを祈る殊勝な男女青年の祈願隊がある。これは銃後に於ける初月青年團の精神活動の一現はれであり、孜々營々として未だ嘗つて休んだ事がない。其の中團の名譽を脊負つて立ち不斷の努力を惜まずに唯一人、起床喇叭を吹いて團員を呼びさましてゐる一青年喇叭手がある。

彼の住む久万支部に於て「サイレンの設備もなく、何の合圖により早朝祈願に集合するかは」支

部長及び幹部の最も心をいためた問題であつた。然し此の心配を知るや知らずや決然立つた彼の喇叭手「起床合圖は及ばずながら僕にまかせて下さい」と一同の前で誓ひ、深く〳〵心に期する何物かゞあつた、爾來祈願日の朝毎に久万山で吹き續ける起床喇叭は團員の胸深く刻まれて、如何なる寒夜も嵐の朝もこぞつて祈願する事一年半、郷人の感謝深きところとなつたのであるが、此れ實に彼の喇叭手の絶えざる努力の賜であると言はねばならない、

記者は一日此の努力する青年喇叭手に感謝すべく祈願祭を訪れた。人影一つ見えない靜寂の街を久万山に急ぐ、雪下しの寒風が商店の看板をもぎ取る樣にかけぬけて行く、時偶出合ふ犬の尾をすぼめて露路に逃げ込む樣は如何にも寒さうである。時計を見れば午前四時二十分、喇叭の音はまだ聞えない。處々に「祝出征」の新らしい門札が眼につく、やがて久万山の坂路にさしかゝつた時だ。鳴る〳〵嘹喨たる起床喇叭が！すぐ頭の上で……何んだか強く心をひきつけられ、我しらず足が早くなる。うすやみをすかして見れば凍る樣な星の下、きちんとした團服を着け、西に向き東に向かひ幾回か起床喇叭は繰り返へされてゐる、其の内一人二人と團員は集ふ。夜はまだ仲々明けそうもなく、霜が降りたのか町の屋並が白く光つてゐる。

やがて喇叭片手に默々と歩む彼を先頭にして、久万支部祈願隊は鎭守の森へ集ひ、支部長の朗讀する祈願祝詞に續いて吹奏する喇叭の音は高く低く響き、さながら地下の英靈に通ふかの如くであ

る。祈願を終へて見上げる東の空がほゝと明るい、喇叭吹く手を止めてふと見上げた彼の喇叭手の眼にちらりと光るものがあつた。あはれ彼の日の戰に漢口の空眺みつゝ第一線の華と散つた友の事か、將又前線にあつて硝煙しげき野に山に、飢や寒氣と闘ひつゝ苦勞するあの朋友の露營の夢を思つてか……感謝して歸途につく。

万才の聲は驛毎に聞え銃後の護りの叫はいや高い、然るに戰線に送る慰問の品や慰問の手紙は一時よりはるかに減少してゐるとか、熱し易く冷め易いのが世の人の常、然るに彼の喇叭手こそは世の例にもれ、熱して冷めない若人である。

事變勃發以來一歲半休なく繼續されてゐる早朝祈願には、鷄の鳴かない朝はあつても喇叭の聞えぬ朝は未だ嘗て一度も無い、而して其の祈願は夏季は四時、春秋四時半、冬季五時であるが、其の半時間以前に吹奏する事あたかも時報の如く、嚴寒骨を刺す嚴冬の朝も亦野良の疲れがまだ癒えない夏の曉も、ついぞ休んだ事がなく、又おくれた事もないと、其の意氣や、熱、努力と熱誠に對しては、全く敬服に價ひするものがある。

或る隣人の話すを聞けば「夜半に醒めて眠られず（起床喇叭吹奏の時刻を過すを慮かりて）讀書或は藁細工をして時の至るを待つた事幾度」と、以て其の至誠の程を察する事が出來る。此の愛國の赤誠に燃える彼れ一度喇叭を吹けば男女青年團員はもとより、七十歲の老翁にして尙ほ且つ靑

年にひけをとらない、軍事援護會外數名の有志は朝靄をついて祈願祭に赴くのである。

或は又喇叭の音と共に起き出でゝ銃後の生産にいそしむ家庭多しと聞く。此の至誠に燃える愛國喇叭手こそ初月青年學校生徒坂本武雄君其の人である。

現住所　高知市久万五〇〇番地
氏名　坂本武雄
生年月日　大正一〇年一月一〇日
職業　農業

三十九、銀紙婆さん

いつかラヂオで煙草の銀紙二十貫を集めたと大きく放送されたことがあつたが、こゝに楠瀬サタといふ日本一の「ギンガミ婆さん」がある。サタさんは昭和十二年三月に銀紙三十餘貫約五萬枚を献納して、有名になつたが、その後も絶えず之の蒐集に怠らず、昭和十三年十月二十七日漢口陥落記念にと、市第二小學校長に連れられて五十二貫といふ大量を献納した。

サタさんは言ふ。

「私はお金よりは力によつて國家に盡したいと思つてこれをはじめました。今朝も四時頃起きて棧橋通朝倉町堀詰附近を廻つて、高知驛の方へ來て七十二枚拾ひました。どんなに寒くとも、たとひ雨が降つても少し位風が加つても、毎夜十二時頃時には二時三時頃町を廻り塵箱をも探します。はじめは巡査さんにもとがめられましたが、今ではもう「ギンガミ婆」で通りました。

かうして隨分苦勞しましたが、段々私の目的がわかつて同情してくれる人も多くなり、集めてくれてをつたり、時にはぽつ〳〵持つて來てくれる者さへあり、はじめの三十貫よりは案外早く五十貫にたりました。

私は六十九歳ですが、七十歳の記念にと思つて集めてゐる中に、漢口陥落といふめでたい日にあひ、この記念に先づ五十貫を出しました。

五十貫になつたら止めようと思つたこともあり、又非常時で煙草に銀紙のつかないやうになつたものが出來たりしたので、もう集めることは止めようかとも思ひましたが、もう一奮發して後十二貫七百匁を集めて百貫にたそうと決心して、をります」と。

右の外國防婦人會員としても、功勞顯著で、一等有功章を授かつてゐる。尙町内の銃後各事業にも盡す所が大きい。家には前記の有功章授與の額と、自彊術會にも精勵し、攝政宮殿下台覽記念大會

に於ての表彰狀、縣立第一高等女學校及び、市第二小學校に特別な寄附をした、知事の褒狀が額にしてかけてある。

ぎんさんの紙婆

現住所　高知市西蓮池町十九番地
氏名　楠瀬サタ
生年月日　明治三年五月九日生
職業　無職

模範婦人會長

今回日支事變の起るや、銃後に於ける各種團体長の職にある人は、何れも獻身的に盡されてゐるのは申すまでも無いが、こゝに秦街婦人會長として六十歳を越す事三歳の老体をもち、三

百余の會員の信望の的となつて銃後活動に赤誠を捧げてゐる岡林鶴亀女史こそ眞に模範婦人會長といふべきである。

女史銃後活動は、遠く日獨の役、シベリヤ出征、上海事變より行はれ、近く今回の事變勃發と共に女史の犧牲的報國精神は益々强く、兵士の見送り出迎へより、慰問袋の發送、現役兵傷病兵の慰問、遺家族の慰藉等、壯者も及ばぬ活動である。殊に市の郊外の地區を占めた秦街故に交通は不便で電話の便は更に無く、老軀を自轉車に乘せて、或は西に或は東に、時には杖をたよりに北山を越して區内を奔走する事毎日の如く、殊に事變當初の如きは、朝食を缺ぎ夕食を忘れて、夜半まで、應召兵の家庭を廻つて慰問につとめ、或は他の團体との速絡を計るなど全く寢食を忘れての努力に對しては婦人會員は勿論在郷軍人分會をはじめ一般民衆敬の中心となつてゐる。

又女史は産婆を職業とせられてゐるので秦以外の應召軍人家庭にも出入せられてゐるが、貧困と見れば無料助産は言ふまでも無く、自家の古着を持參し或は愛國婦人會よりの給與を受くるなど着物の世話までする。女史の熱情と骨折りを惜しまぬ努力に感泣してゐる人は實に多い。

女史は秦村婦人會長として已に三十年、秦村愛國婦人會長として十五年、同分會長として五年、秦街國防婦人會長として四年、叢には愛國婦人會功勞者として、總裁宮殿下よりも表彰された。實に全生涯を婦人會に捧げし人と言つてもよい。此の間會員を率ゐて公私の事業に盡す所多く、小學

校に對する教育事業の後援、或は敬老會の創始、七洲神社參拜人の自轉車預り、農繁期托兒所の開設等其の功績は枚擧にいとまが無い。

現住所　高知市愛宕山一一〇
氏　名　弘瀬鶴亀
生年月日　明治一〇年一〇月三一日
職　業　產婆

學童美談

兒童美術

一、銃後に咲いた紅梅三輪

四女　島崎牧子
久武睦子

公園の午後。

梅も大分散つて、遅咲きの紅梅がまだ余香をとゞめてゐた午後の公園、それは十三年の紀元節の日であつた。

梅の小枝にさへづる鶯にも似て、やさしい心の少女三人は、仲良く連れ立つて愛國行進曲を聲高く歌ひ乍ら、花壇の邊を歩いてゐた。

「いや兵隊さん、あの兵隊さんの所へ行つて見ん」

と驚いた樣に誰かゞ言つた。噴水のほとりのベンチには二人の兵隊さんが腰を掛けて話してゐた。二月の暖い陽光は軍帽の星章にも光つてゐたのである。

事變が始つて以來、益々加はる銃後の緊張と、非常時の空氣はいたいけな少年や少女達の胸にも強く響く樣になつて、兵隊さんの姿を見る度に、尊敬と感謝、にも似た心を湧き立たせてゐたのである。

かうした純情な、天眞爛漫な子供心は又、殺風景な兵舎に戰の技を練り、明日にも戰地に出で立うとする兵隊さん達には、何よりも喜ばれるのであつた。

「そこの生徒さん、愛國行進曲おしへて頂戴。」

「いやー、はづかしい。」

と簡單な會話で、三人の少女達は早や、何年も前からの樣な友達になつた。それから二時間は、歌つたり、走つたり、兵隊さんも子供の樣に相手になつて遊んだ。

やがて歸營の時間が近づくと、兵隊さんは、キヤラメル一箱づつを、少女達に與へて別れたのである。

此の二人の兵隊さんが、豐永了、伊藤國彌と言つた名前は、強く頭に殘つて少女達には忘れる事が出來なかつた。

純情のお菓子。

此の三人の少女は島崎牧子、久武睦子、前田幸枝さんの三人であつたが、學校で戰地の話しなど聞く度に、又日曜日など兵隊さんの姿を見る度に、公園で遊んだ兵隊さんを思ひ出すのであつた。

「島崎さん此の前の兵隊さんに何か送らん。」

「ほんとにねえ。わざ〳〵キヤラメル買つてくださつたもの。」

「近い内に戰爭に行くと言つてゐたがまだ隊においでるらうかねえ。」

と三人が話し合つたのは公園の日から二週間程立つてであつた。色々相談してお菓子を送る約束をした。自分のお小使ひを出し合つたり。お母さんに、相談して戴いたりしてお金を集めた。

キヤラメル、グリコ、チヨコレート、など少女は少さな頭をなやまし乍らも、お菓子箱を作つたのである。それに

「先日のお禮にこれをお送り致します。少いけれどお友達と一緒に食べて下さい。

戰爭にお出でる樣に申してゐましたが、その時は知らして下さい。私達も日の丸を振つてお見送りしたいと存じます。」

との手紙もそへたのである。

丁度近所から、石川さんと言ふ方が聯隊へ通つてゐたので、賴んで送つたのである。

三人の可愛らしい心に、感激させられた兵隊さん達は。

「皆さんのお心づくしには泣されます。ほんとにおいしくて、友達も皆んな喜びました。

僕達も近い内に支那の方へ行くかも知れませんが、はつきり言へないのです。

もう一度公園で遊んで戴いて、愛國行進曲の復習もして行きたいと思ひますが、それも出來

ないかも知れません。

軍隊には何にもありませんので、支那へ行つたら、支那兵の首でもお土産に送りませう…。」

と言つた樣な返事が送られて、子供心にも、良い事をした喜びに滿されたのであつた。

眞心は戰地へ。

やがて公園の櫻も春の準備へと、蕾をふへらましかけた頃、三人の少女達も、進級の喜びを持つ三月の終り頃の一日。受持の先生から手紙を渡された。それは戰地の兵隊さん、豐永、伊藤の二人からであつた。二人の兵隊さんは一所ではなかつた。三人は休み時間毎にその手紙を出して見た。

「いつの間に行つたでせう。お見送りするのだつたに」

と殘念がつたが、しかたもなかつた。それから三人は、戰地に働く樣になつた二人の兵隊さんを一生懸命慰めてやる事を、固く誓ひ合つた。

早速慰問の手紙を送り、其後の三人の眞心は、三月の休みが過ぎて四年生となり、櫻が散り、學校のプールに樂しい水泳の夏を迎へ、長い夏休みから、秋の運動會へと續く學校生活の片時も變らなかつたのである。

三人の內、一學期の終りに前田さんを、他に送つたのは殘つた二人に取つては淋しかつたが、

慰問の手紙や、慰問の品を戰地の兵隊さんに送ることは、少しも變りはなかつた。

勇士の感激

學校へは、二人の兵隊さんから度々少女へあてゝの手紙が屆いた。その都度受持先生から、手渡されたのであるが、先生も余りに度々の手紙に、一日島崎さんと、久武さんを呼んでたづねて見ると、始めてその奇特を知つて驚かされた。先生の前には數十通の手紙が差出されたのである。それは皆んな、少女からの手紙や、慰問袋を送つた御禮や返事であつた。

「お手紙有難う。二學期を迎へて元氣で勉強せられてゐる相で何よりですね。僕も元氣です。御安心下さい。此の前戴いた慰問袋の中の「おねこさん」は僕と一緒に、いつも戰爭してゐます。彈の中でも、敵の陣地へ突擊する時でも、背嚢の中で可愛らしくないて、勵ましてくれます。

コリントゲームは此の前の戰爭の時、取落してしまひました。戰場での休みの時のなぐさめ者でしたが殘念です。許して下さい。

然し可愛い子猫丈けは決してなくしません。戰爭へはいつも一緒につれて行きます。

今日はお約束の寫眞を送ります。敵陣を占據した嬉しい一時です。こんなに萬歳を呼ぶ時はとても嬉しいのです。百三十度の暑さに燒けて皆んなエチオピヤの兵隊さんの樣でせう。

今頃は早や涼しくなりました。新らしい冬服も渡りましたから、戰場も雪の戰線と變る事でせうが、子猫には風邪を引かしませんよ。

後略……

九月十九日　　中支派遣軍百田部隊　豊永了

四年女子　久武睦子様

「本日慰問袋を有難う。皆さん元氣で何よりですね。

僕も元氣で、露營の夜には皆さんと公園で遊んだ夢を見てゐます。

今日討伐から歸ると、准尉殿が「慰問袋が來てゐる。」と知らして下ださつたので飛んで行つて見ると、皆さんからでした。

戰友達が、うらやんでゐました。早速戰友にも分けてやりました。お菓子は大變おいしうございました。あの踊り人形でヨサコイを踊らしたら准尉殿も、皆の兵隊も大喜びでした。こんどの娯樂會にはあの人形で皆を笑はしてやらうと、樂しんでゐます。

皆んなのお心は、これ程もやさしい、美しいものだと知りませんでした。今も涙が出て來ます。

先生や、お家の人にもよろしく。

豊永君も元氣でやつてるるのかしら。

十一月十二日　　北支派遣鷲津部隊　伊藤國作

四年女子　島崎牧子様

こうした戰地からの元氣な兵隊さんの便りを何よりの樂しみに、その慰問に少さい胸をいためつゝ公園の一日以來今もなほ、變らぬ三人の少女こそ、春に魁けて咲き出づる紅梅の香にもまして、强く、やさしい香りの持主であらう。

非常時の風は益々つのるとも
直(ナホ)くそだてよ大和撫子。

二、一石二鳥の名案

尋六男　宮地正修君
仝　岡本時治君

今日は七月七日、支那事變勃發一周年の記念日です。宮地岡本の兩君は、今日の記念講話に感激しつゝ手をとり合つて歸つて行くのでした。何か深く考へながら歩んでゐた岡本君が、突然口を切りました。

「献金しよう。」

「どうして。」

「何かよい事ないかなあ。」

腕ぐみしながら考へる二人は眞劍そのものでした。宮地君が云ひます。

「さう〳〵、蝗を取つて賣らう。買つてくれるぜ。」

「一匹いくら。」

「百で一錢。」

「つまらないなあ」

「決心しだいで、五十錢や一圓は働けるよ。」

「よーしやらう。」

思ひたつともうたまりませんでした。その晩、それ〴〵二人はお母さんに袋を縫つていたゞき、翌日から毎日放課後に鏡川南岸にあらはれては、眞夏の太陽を浴びながら蝗取に精出したのです。堅い決心と大きな希望に燃える二少年は眞劍になつて働いたのです。

蝗を取つて

六六男　宮地正修

學校から歸へると、すぐ宿題をすませて蝗取りに出かけた。岡本君を誘ひ鏡川を渡つて向ひの田のあぜに來た。

「もう此處で取らうか。」

「うん。」

早速取りはじめた、稻の葉に止つてゐる。そつと手をのばしていくと、する〳〵と葉の裏へ廻つて脚だけのぞかせてゐる。さつと稻ごしつまんだ。蝗は脚をふんばつて逃げようとする。手のひらがこそばい。

はじめのうちは蝗を取るのに骨が折れた。岡本君はデブ〳〵太つてゐるので、よけいに取りにくいやうである。しかし今では苦もなくさつと取れるやうになつた。汗が顏を流れる。もう袋に半分位も取つた。岡本君も向ふで一生懸命取つてゐる。僕も元氣を出した。ふと頭を上げると、赤い夕

日が西の山にかゝりさうだ。

「もういのか？。」

「うん、いのう。」

取る手を止めて袋をのぞくと、ぐよ〳〵してゐる。

「五錢ばあはあるね。」

「たしかにある。」

夕日を横顏に受けながら歸りはじめた。雀の群が頭をすれ〳〵に飛んで行つた。西の空は雲が眞赤に輝き鏡川にうつゝて何とも云へない美しさだ。

合間には人形を賣つて

六男　岡本時治

宮地君から蟇を取つて献金しようと誘はれ、それは大變よい事と早速贊成して、毎日勉强後二人で取りに行き、知り合ひの鷄を飼つてゐる家で買つていたゞいた。五錢、六錢、たまには二錢位しか無かつた事もあつたが、毎日お金のたまるのが樂みでならなかつた。

そのうちに親切な近所のをばさんが。

「時治さん、お人形を持つて來たら買つてあげる。」

とおつしやつので、宮地君と相談して時々お人形賣りに出かけた。安く賣るので思ひがけぬ人が買つてくれる事がある。中には國防献金と聞いたからとおつしやつて、わざ〳〵買つてくれるをばさんもあつた。その時は大そう有り難たかつた。そして一錢でも多く献金しようと一生懸命で賣つた。

夕方には二人で、今日はいくら献金が出來るかと、道々計算しながら歸つた。その時の嬉しさは饅頭を百いたゞいたよりもずつと嬉しかつた。二人はにこ〳〵して顏を見合せ、何とも云へない氣持であつた。

……

一學期も終りが近づきました。蟇を取つたり、お人形を賣たりして得た一錢二錢のお金が貯金箱にいつぱいになりました。

一日二人は相談して受持の先生の前へ持つて行きました。先生が開いて見ますと、銅貨ばかりがざく〳〵と積り積つて二圓三十錢も出て來ました。二人の喜びにも增して大變先生が喜んでくれました。そして國防費として陸軍に献金いたしました。

三、友　情

四女　松岡登女子

木山茂子さん（假名）のお父さんが應召されたのは昭和十二年〇月〇〇日であつた。日頃あまり裕福でない茂子のお家に唯一人の働き手であるお父さんを召集された茂子さんの一家の生活はまことに氣の毒であつた。お母さんは四人の子供をかゝえてその日から雄々しくも生活の第一線に立たなければならなかつた。

お父さんが居てさへ生活は豊かでないのに……人々の同情は此の茂子さん一家に寄せられた。殊にお父さんの應召後お母さんは重病にかゝり入院、一時は余程心配される狀態であつた。同級のお友達も皆茂子さんに同情を寄せた、子供ながらも何か援助してやらうかといふ氣持が表れてゐた。

同級生の一人松岡登女子さん（尋常四年）は特に此の一家に心を寄せた。さうしてそれからは毎日登女子さんの姿が茂子さんの家に見出された。或時は箒を持つて掃除の手傳をしてゐる。赤ちやんのお守をしてゐる。或は炊事のお手傳をしてゐる。かうして眞心から此の氣の毒な一家を慰め援けた、これが一ケ月二ケ月ではない應召中滿一ケ年殆ど缺かす事がなかつた。

登女子さんのこの友情の行爲は町内の人々の目にもとまり賞讃されてゐる。

四、汗と膏の献金

五女　立石琴子
三女　立石智惠子

「七夕さまのおかざり買つて頂戴。」

可愛いゝ女の子が二人家々を賣り歩いてゆく、

日支事變始まつてまだ間もない八月初の事である。

「あら、琴ちやん智惠ちやんも一しよに……

どうしてそんなに賣り歩いてゐます。」

顏見知りのをばさんは不審の眼を向けてきいた、

「國防献金にするの、をばさん買つて頂戴」

「さう、そりや感心だこと、まだ早いけれど買つて上げませう。」

眞夏の太陽は舗裝路に熱氣を吐き燒けつく樣に暑い、その中を短冊お飾りを入れた箱を兩手にか

ゝえ汗を拭ひながら町々を賣り歩く殊勝な姿にその事情を知るも知らぬも快く買ひ求めて下さる。

かうして數日後には汗の努力は五圓二十錢といふ實に多額の金に替つてゐた。

二人は早速父母の許を得て司令部へ出頭献金を願ひ出た。事情を聽いた係官は非常に感激してその勞を謝した、やがて陸軍大臣よりの感謝狀はこの姉妹の許に屆けられた。

愈々事變は進展して鄕土部隊も出動する。此の緊張の中に姉妹二人も愈々じつとしては居られず更に御國の爲に盡さうと相談してお盆にはおはぎ餅を賣り二圓七十錢を得、是等を再び献金、翌昭和十三年八月には又七夕祭、盆祭のお飾など行商して利益金三圓八十錢を得て國防献金するなど、か弱き少女の身にまことに殊勝の行爲である。

尙これに止まらず毎日曜日には皇軍の武運長久祈願に天滿宮山内神社八幡宮に參拜をなし或は母と共に忠魂墓地の清掃に赴き、或は二人して慰問袋を發送するなどまことに銃後報國の赤誠溢るゝ美談といはねばならぬ。

五、献金二組

六年女　下元幸子
六年女　西村種子
六年女　杉村美枝子
六年女　鈴木宏子

（其の一）

下元さんと西村さんは、昭和十二年十月頃から毎日學校がすむと、高知新聞夕刊を十部あて持つて新京橋附近に立ち、道行く人々に賣つて得た利金を、約六圓献金した。

下元さんは語る、

「私達はお家でいたゞくお小遣を節約して、お國の爲に献金するのは勿論ですが、もつと進んで

働かうと考へ、最初、弟や西村信子さんと夏休を利用して、石鹸や齒ブラシ、ナフタリン等を賣り歩き、約三圓の献金をいたしましたが。はじめは何だかはづかしく思ひましたが、高知新聞社からいたゞいた襷をかけるやうになると、十錢でおつりはいらぬと言つたり、新聞を買はずに献金したりして下さる人が出來ると、ありがたさに勇氣が出てまいりました。

今年のお正月からは受驗の爲の勉强を、家でしなければならなくなりましたのでやめたのは本當に殘念です。西村さんは高等小學校へ行く筈であつたが、兄さんが出征なさつたので、決心して神戸へ行つて職に就いて働いてゐます。」

下元さんはその後高坂高女へ入學してゐる。

（其の二）

杉村さんは校長先生の病氣中、毎日跣足參りを欠かさなかつたり、又細工町の火事の爲に類燒した友人の爲に奔走して、見舞金十圓を集める等感心な行が多いが、今次事變にあたつては、昭和十三年八月の休中、級友鈴木宏子さんと二人で、中新町の近藤商店の同情を得て、石鹸、齒ブラシ、ネツト等を乳母車に積み賣歩き、三圓六十錢を得、更に冬休には二圓を得て、之を國防献金した。

尙杉村さんは、昭和十三年三月頃から、赤十字陸軍病院を數回訪問し、花束を贈つたり等して度々慰問をしてゐる。又古新聞古雜誌を賣つた金を以て、慰問袋を送る等、父上を失つて家事の手傳

をも怠らない一方、かうした行を以て人々を感激させてゐる。現に高坂高等女學校一年生で、この夏にも級長長尾建さんと行商をしたといふ。

鈴木さんは現に第一高等女學校一年生でゐる。

六、支那のお友達へ

六女　岡林敏子

六月頃のことでした。放課後いつもの通り私は、嘉吉さん、三木さん、と三人で校門を出ました。

「今日又白衣の勇士をお迎へしましたが、これで何回目でしたかね。」

「皆さんのお顏が靑白くてとても心配よ。」

「私達がかうして毎日勉强の出來るのも、みんなあの兵隊さんのお蔭だわね。」

「私等も何かよいことをしてお國の爲に盡さなくては。」

「一年生や二年生までも、献金などしてゐる樣ですよ。」

と、種々お話をしながら歩むうちに、早や三人はそれ〴〵分れみちに來てしまつた。こゝでお別れ